

第73回 中国地区小学校長会研究大会 広島大会

第62回 広島県連合小学校長教育研究大会 福山大会

大会要項



令和8年11月20日(金)

ふくやま芸術文化ホール リーデンローズ 他

表紙:「常夜燈」

鞆港西側の雁木の南側に立つ常夜燈で、鞆のシンボルです。1859年に建てられ海中の基礎から宝珠まで12.1mあり、現存する江戸時代の常夜燈としては最大級の大きさを誇ります。

「写真提供:福山市、公益社団法人福山観光コンベンション協会」

※本冊子に掲載している、福山市関係の写真はすべて福山市、公益社団法人福山観光コンベンション協会からご提供いただいています。



● 鞆の浦

福山駅から南へ14kmの瀬戸内海沿岸のほぼ中央に位置する鞆。古くから潮待ちの港として栄え、万葉集にも詠まれています。

また、日本で最初の国立公園に指定された瀬戸内海を代表する景勝地の1つです。

● 鞆のまちなみ

2018年5月には、鞆の港町文化をテーマとしたストーリー「瀬戸の夕凧が包む 国内随一の近世港町～セピア色の港町に日常が溶け込む鞆の浦～」が日本遺産に認定。1つの地域が国の「重要伝統的建造物群保存地区」、ユネスコ「世界の記憶」と合わせて3つの評価を受けているのは、国内で鞆の浦だけです。



主催	中国地区小学校長会 広島県連合小学校長会
後援	福山市 広島県教育委員会 広島市教育委員会 福山市教育委員会 全国連合小学校長会 日本教育公務員弘済会広島支部



あいさつ

第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会
広島県連合小学校長会

会長 高尾 俊 寛

「第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会」が、中国地区各県から多数の会員の皆様をお迎えし、広島県福山の地において盛大に開催できますことを、開催県を代表いたしまして心よりお礼を申し上げます。また、本大会の開催にあたり、温かいご支援を賜りました福山市をはじめ、開催地として多忙な業務の合間を縫って周到な準備と円滑な運営に全力を尽くしていただきました福山市小学校長会の皆様、並びに多大なるご協力をいただきました関係各位の熱意とご献身に対し、深く敬意と感謝の意を表します。

デジタル技術の急速な進展や生成 AI の普及、グローバル化の加速、さらには少子高齢化に伴う社会構造の変化など、子どもたちを取り巻く環境はかつてないスピードで変貌を遂げています。このような激動の変革期において、学校教育に課せられた使命と責任は極めて重大です。これからの時代を生きる子どもたちに対し、変化に翻弄されることなく、自ら課題を見出していかにたくましく道を切り拓いていくか、そのための基盤を築くことが今、私たちが担う学校経営において強く求められています。

本大会は、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に掲げ、さらに副主題として「～夢や志をもち 他者と協働して 主体的に新たな価値を創り出す 子どもを育成する学校経営の推進～」を設定いたしました。この主題には、いかに社会が複雑化しようとも、子どもたちが自らの夢や高い志を決して見失わず、多様な背景をもつ他者と手を取り合いながら、新しい社会の価値を主体的に創造してほしいという、私たち中国地区小学校長会の共通した強い願いと不退転の決意が込められています。

この主題を具現化するために、学校長に求められるのは、子どもたちが主体的に学び、失敗を恐れずに挑戦できる環境を整える「学校経営」の推進に他なりません。教職員一人一人の専門性と情熱を引き出す組織運営、地域や家庭との確かな信頼関係に基づく開かれた学校づくり、そして、子どもたち一人一人のウェルビーイングの実現を目指した教育課程の編成など、多角的なアプローチが必要です。学校長が明確なビジョンを掲げ、強力なリーダーシップを発揮しながらも、教職員や地域と協働していく姿勢が、これからの学校の推進力となります。各分科会における実践発表や活発な協議を通して、互いに学び、知恵を出し合うことで、新たなブレイクスルーのヒントが見つかるものと確信しております。

終わりにあたり、本大会が中国地区五県の校長先生方の英知を結集し、これからの小学校教育の未来を明るく展望する実り多き機会となりますことを心より期待いたします。そして、本日得られた多くの成果が、各学校における明日からの学校経営の活力となり、子どもたちの輝かしい未来へとつながることを祈念いたしまして、歓迎と感謝の挨拶いたします。



あ い さ つ

広島県教育委員会

教育長 篠 田 智 志

中国地区各地から多くの皆様の御参集のもと「第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会」並びに「第62回広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会」が、ここ福山市において盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

各地からお越しの皆様におかれましては、ようこそ、広島県においでくださいました。心より歓迎いたします。

また、皆様方におかれましては、平素より、学校経営の責任者として、子供たちの教育のために、多大なる御尽力をいただいておりますことに、深く敬意を表します。

さて、教育を取り巻く状況は、少子高齢化、AIの進化・実装が急速に進むなど、変化が止まることのない時代となっています。急激な社会の変化の中で、将来を正確に予測することが難しいからこそ、「自ら問いを立てる力」、「他者とともに価値を創り出す力」を身に付けていくことが求められています。そして何より、一人一人の人を大切にすることが重要です。

こうした中、広島県教育委員会では、「信頼される公教育」の実現と「学びの変革」を推進してきているところであり、本年7月には、これまでの取組の状況や社会情勢の変化などを踏まえ、令和8年度以降の教育の基本的な方針を示す新たな「広島県 教育に関する大綱」を策定いたしました。「広島ならではの学びを通じて、一人一人の個性や能力を見だし、伸ばし、生きる力を育む」を基本理念とし、誰もが安心して学習できる環境づくりを全ての基盤とした上で、本県教育を更に前進・加速させてまいります。

特に、子供たちが「一人の人間として大切にされている」と感じられる、安全・安心な学校づくりが基盤となります。安全・安心な学校づくりの基盤の上に、主体的な学びを促す「学びの変革」、広島ならではのキャリア教育を推進し、様々な場面でのリアルな体験機会の充実や、デジタル学習基盤の効果的な活用により、さらなる学びの充実を図ってまいります。また、持続発展する教育のため、教職員が一層力を発揮することができるよう、「働きやすさ」と「働きがい」を両立する働き方改革とともに、教員の指導力向上を図る人材育成に取り組んでいるところです。

本研究大会において、中国5県の小学校教育を担う皆様が、研究を深められることは、社会の変化の中で多様化・複雑化する教育のあり方を考え、その充実を図っていく上で大変意義深いことと思います。

本研究大会の成果が、各県における小学校教育の充実・発展に生かしていかれることを心より期待するとともに、子供たちの健やかで豊かな成長のため、中国地区各県小学校長会がさらに発展し、各地区からお集まりの皆様方がますます御活躍されることを祈念し、御挨拶いたします。



祝 辞

広島県知事

横 田 美 香

第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会並びに第62回広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会が、盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

中国地方各地から御参加の皆様には、ようこそ広島県にお越しいただきました。心から歓迎を申し上げます。

また、校長の皆様におかれましては、日頃より、次代を担う子どもたちの育成や小学校教育の充実と発展に多大なる御尽力をいただいております。深く敬意を表しますとともに、厚くお礼を申し上げます。

さて、本県では、想定を上回るスピードで進む人口減少や、国際情勢の緊迫化、円安の進行などによる物価高騰など、策定時には予測できていなかった社会経済情勢の変化に対応していくため、先般、策定から5年が経過した総合計画「安心▷誇り▷挑戦ひろしまビジョン」を改定いたしました。

これまで進めてきました「ファミリー・フレンドリー」という視点での広島県づくりを深化させ、これまで以上に進展・浸透させるということで、「シン・ファミリー・フレンドリー “家族で暮らしやすいまち、誰もが暮らしやすい”」を今後5年間の方向性に設定したところです。ビジョンに基づき、本県が持つ多彩な宝や強みを磨き、魅力を高め、県内外の人々の交流により創造性と活力を生み出し、更に多くの人を惹きつけ、経済も成長していくという好循環の実現を目指してまいります。

ビジョンの5つの政策の柱の1つである「未来を担う人づくりと、安心して子供を持ち育てられる社会づくり」におきましては、社会経済情勢が大きく変化する中においても、あらゆる分野において、社会の変化に的確に対応し、新たな付加価値を創造できる人材を育成していくことが不可欠です。そのため、「学びの改革」を中心とする乳幼児期から社会人まで一貫した人づくりを着実に推進していく必要があります。さらに、児童生徒の個々の状況に応じた支援を充実させ、誰一人取り残されない、安心な学習環境づくりを進めることも必要です。

こうした中、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進～夢や志をもち 他者と協働して 主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営～」の大会主題のもと、学校教育に携わる皆様方が、こうして一堂に介され、経営ビジョン、組織・運営、評価・改善など、学校経営や教育課程に関する13の分科会に分かれて、教育が直面する諸課題を、多面的、かつ実践的に研究を進められますことは、誠に意義深いことと存じます。

どうか皆様には、これまでの教育実践の中で培われた豊かな経験と深い見識のもとに、新たな時代の要請に応える教育を推進していただきますとともに、小学校教育の振興のために、一層の御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、中国地区小学校長会並びに広島県連合小学校長会の御発展と本日御参集の皆様の益々の御健勝、御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



祝 辞

広島県福山市長

枝 広 直 幹

第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会並びに第62回広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会が、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進 ～夢や志をもち 他者と協働して 主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営～」の大会主題のもと、多くの皆様のご参加により、盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。また、県内外から福山市にお越しいただき、心から歓迎申し上げます。

今日、将来の予測が困難な「VUCA」と言われる時代の中で、激しい変化が止まることのない社会を生きることもたちには、社会の持続的な発展に向けて、学び続ける力、新しいものを創り出す創造力、他者と協働して問題を解決する力等が今後一層求められています。

このような中、中国5県の校長先生方が一堂に会し、情報交換及び研究結果を共有される機会をもたれますことは、誠に時宜を得たものであり、その成果に大きな期待を寄せるものでございます。

ここ福山市は、本年、110周年を迎えました。古くから瀬戸内の海と豊かな自然に恵まれ、歴史や文化、ものづくりの技術と人々の営みを大切にしながら発展してきたまちであります。また、「ばらのまち福山」として、市民が思いを一つにし、平和への願いを未来へつないできたまちでもあります。ふるさと福山への愛着と誇りをもち、一人一人の夢や志を育みながら、自らの可能性を信じ、未来に向かって挑戦していくことができるよう、学校、家庭、地域が力を合わせた教育の充実に取り組んでおります。

本研究大会が、校長先生方にとりまして互いに学び合う重要な機会となりますとともに、今後の学校経営と教育実践のさらなる充実につながる大会となりますことを心から期待しております。

結びに、本研究大会の開催にご尽力いただきました関係者の皆様に深く敬意を表しますとともに、御参加の皆様のますますのご健勝と御活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



祝 辞

全国連合小学校長会

会 長 松 原 修

第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会が、かくも盛大に開催されますことを、全国連合小学校長会を代表し、心よりお喜び申し上げます。

さて、次期学習指導要領の改訂に向けた議論も、いよいよ大詰めを迎えております。教育課程部会による審議まとめやパブリック・コメントを経て、冬頃には中央教育審議会答申がなされ、年度末には改訂へと向かう、極めて重要な局面となっております。

このように日本の学校教育が新たな時代を迎えようとしている今、私たち校長にはどのような学校経営が求められるのでしょうか。学習指導要領が変われば、学校も変わらなければなりません。授業も変えていかなければなりません。しかし、そうした受け身の姿勢で、誇りややりがいを持って、学校経営を進めていくことができるのでしょうか。

今、私たちが取り組むべき課題は、子どもたち一人一人の可能性を最大限に引き出す学びの保障と、子どもを中心に据えた学校全体のウェルビーイングの向上を目指し、安心して学び、働くことのできる教育環境を整えていくことです。そのためには、多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程を編成すること、教師と子どもの双方に「余白」を創出すること、デジタル学習基盤を前提とした学びへと転換していくことなど、これまでの学校の在り方そのものを問い直していく必要があります。そして、時代の変化を的確に捉えながら学校組織を活性化させ、教職員とともに新たな学校の姿を描き、創り出していくことが、これからの校長に求められています。

本大会では、全国連合小学校長会の研究主題のもと、副主題として「夢や志をもち 他者と協働して 主体的に新たな価値を創り出す 子どもを育成する学校経営の推進」が掲げられ、各地区の校長会によって練り上げられた提言をもとに、活発な研究協議が展開されます。

大切なことは、何に取り組むかだけではなく、何のために取り組むのかという目的と、その取組の先にどのような未来を創り出したいのかという学校経営のビジョン、すなわち「夢や志」を明確にすることです。課題に追われるだけでは疲弊してしまいます。一方で、目指す学校の姿が明確であれば、日々の取組一つ一つにも意味が生まれます。そして、その思いを教職員、保護者、地域と共有することで、同じ未来に向かって主体的に協働することができるのです。

本大会が、これからの学校教育の在り方を見つめ直し、私たち校長の「夢や志」を確かめ、新たな学校づくりへの歩みを進める一步となることを心より願っております。

結びに、本大会の開催にあたり、ご尽力いただきました中国地区小学校長会 高尾 俊寛 大会会長をはじめとする役員の皆様、広島県連合小学校長会の皆様、また、福山市、広島県教育委員会、広島市教育委員会、福山市教育委員会をはじめ関係各位に深く感謝申し上げますとともに、ご参会の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、祝辞といたします。

目 次

あいさつ	大会会長	高尾俊寛	1
あいさつ	広島県教育委員会教育長	篠田智志	2
祝辞	広島県知事	横田美香	3
祝辞	福山市長	枝広直幹	4
祝辞	全国連合小学校長会会長	松原修	5
大会日程			7
会場案内			8
全体会場座席図			9
全体会・分科会会場図			10
大会主題・副主題及び趣旨			13
分科会（領域・研究課題・趣旨）			14
記念講演			21
分科会会場及び参加者数			23
分科会関係者一覧			24
分科会提案資料			
第1分科会「経営ビジョン」			26
第2分科会「組織・運営」			28
第3分科会「評価・改善」			30
第4分科会「知性・創造性」			34
第5分科会「豊かな人間性」			38
第6分科会「健やかな体」			40
第7分科会「研究・研修」			42
第8分科会「リーダー育成」			46
第9分科会「学校安全」			50
第10分科会「危機対応」			54
第11分科会「社会形成能力」			58
第12分科会「自立と共生」			62
第13分科会「社会との連携・協働」			64
大会役員			67
大会参加者一覧			73
大会のあしあと			85

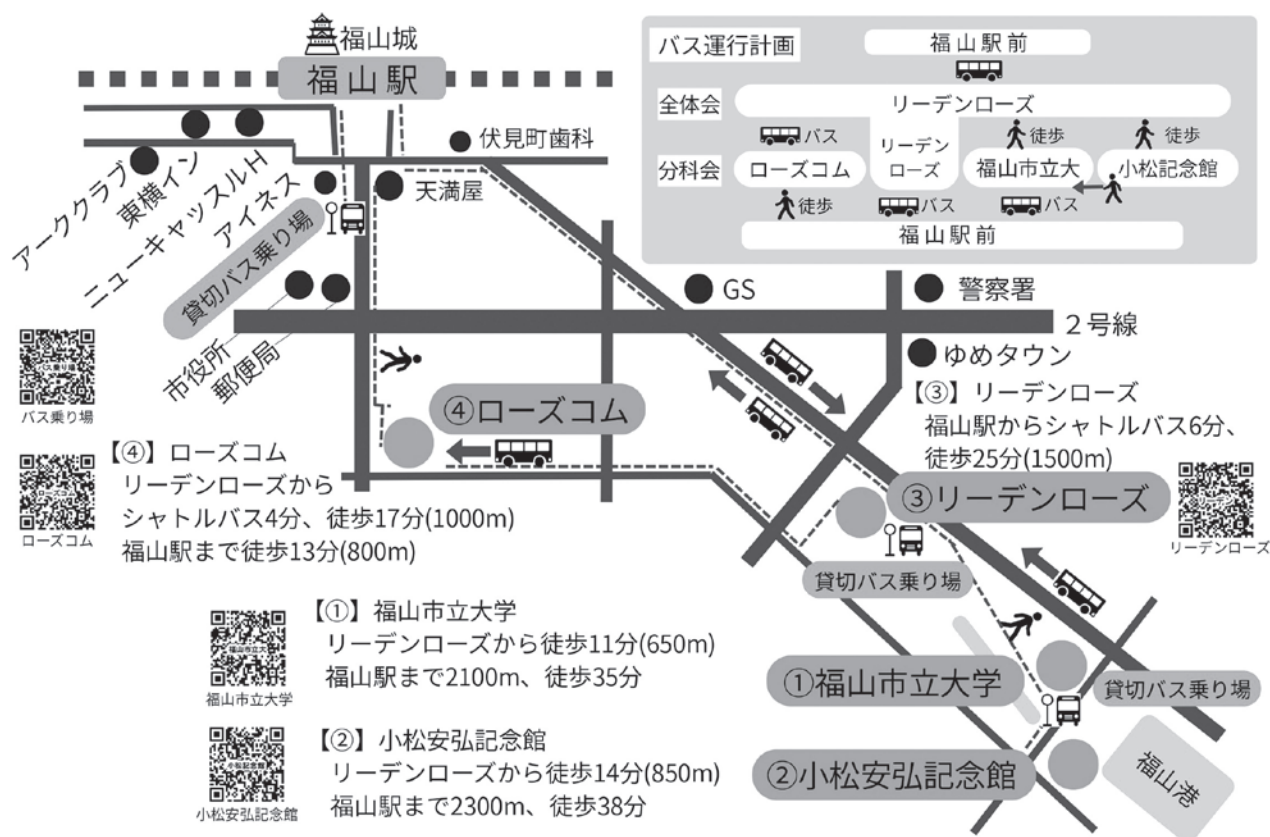


大会日程

11月19日(木)	11月20日(金)
14:30 中国地区理事会 (福山ニューキャッスルホテル)	12:20 昼食 ・各分科会会場への移動後、昼食
11月20日(金)	
9:00 受付 (ふくやま芸術文化ホール リーデンローズロビー)	13:05 提案者・司会者・記録者・運営委員等 打合せ会(昼食後) 打合せ場所:各分科会会場施設等
9:50 開会式 (リーデンローズ) 1 開式のことば 2 国歌斉唱 3 大会会長あいさつ 4 来賓祝辞 ○ 広島県教育長 ○ 福山市長 ○ 全連小会長 5 来賓紹介並びに祝電祝文披露 6 閉会のことば	13:30 分科会 (10 会場 13 分科会 20 提案) ○福山市立大学港町キャンパス中講義室 B 1・2 分科会:経営ビジョン 組織・運営 ○福山市立大学港町キャンパス中講義室 C 3 分科会:評価・改善 ○福山市立大学小松安弘記念館多目的 A 4 分科会:知性・創造性 ○福山市立大学小松安弘記念館講義室 A 5・6 分科会:豊かな人間性 健やかな体 ○リーデンローズ小ホール 7 分科会:研究・研修 ○リーデンローズ大ホール 8 分科会:リーダー育成 ○福山市立大学小松安弘記念館講義室 B 9 分科会:学校安全 ○まなびの館ローズコム大会議室 10 分科会:危機対応 ○福山市立大学小松安弘記念館ラーニングコモンズ B 11 分科会:社会形成能力 ○まなびの館ローズコム中会議室 12・13 分科会:自立と共生 社会との連携・協働
10:40 全体会 (リーデンローズ) ○ 大会主題・趣旨説明 ○ 次期開催県(鳥取県)会長あいさつ	
11:00 記念講演 (リーデンローズ) 演題 「伝え継ぐ能の心 ～伝統に学ぶ生きる力～」 講師 能楽シテ方 喜多流 大島 衣恵 氏	16:30 分科会閉会



会場案内



〈大会会場〉

- ①福山市立大学 港町キャンパス（分科会場 AB）
〒 721-0964 福山市港町 2 丁目 19 番 1 号 TEL 084-999-1111（代表）
- ②福山市立大学 小松安弘記念館（分科会場 CDGI）
〒 720-0821 福山市東川口町 1 丁目 1-33 TEL 084-999-1111
- ③ふくやま芸術文化ホール リーデンローズ（全体会・分科会場 EF）
〒 720-0802 福山市松浜町 2 丁目 1-10 TEL 084-928-1800
- ④まなびの館 ローズコム（分科会場 HJ）
〒 720-0812 福山市霞町 1 丁目 10-1 TEL 084-932-7265

〈理事会会場〉

- 福山ニューキャッスルホテル 〒 720-0066 福山市三之丸町 8-16 TEL 084-922-2121
※ JR 福山駅南口から徒歩約 1 分

〈情報交換会会場〉

- アーケクラブ迎賓館 〒 720-0067 福山市西町 1 丁目 6-28 TEL 084-973-1380
※ JR 福山駅南口から徒歩約 5 分

〈宿泊ホテル〉

- 東横イン 福山駅新幹線南口 〒 720-0066 福山市三之丸町 9-24 TEL 084-916-1046
※ JR 福山駅南口から徒歩約 4 分

○バス運行計画

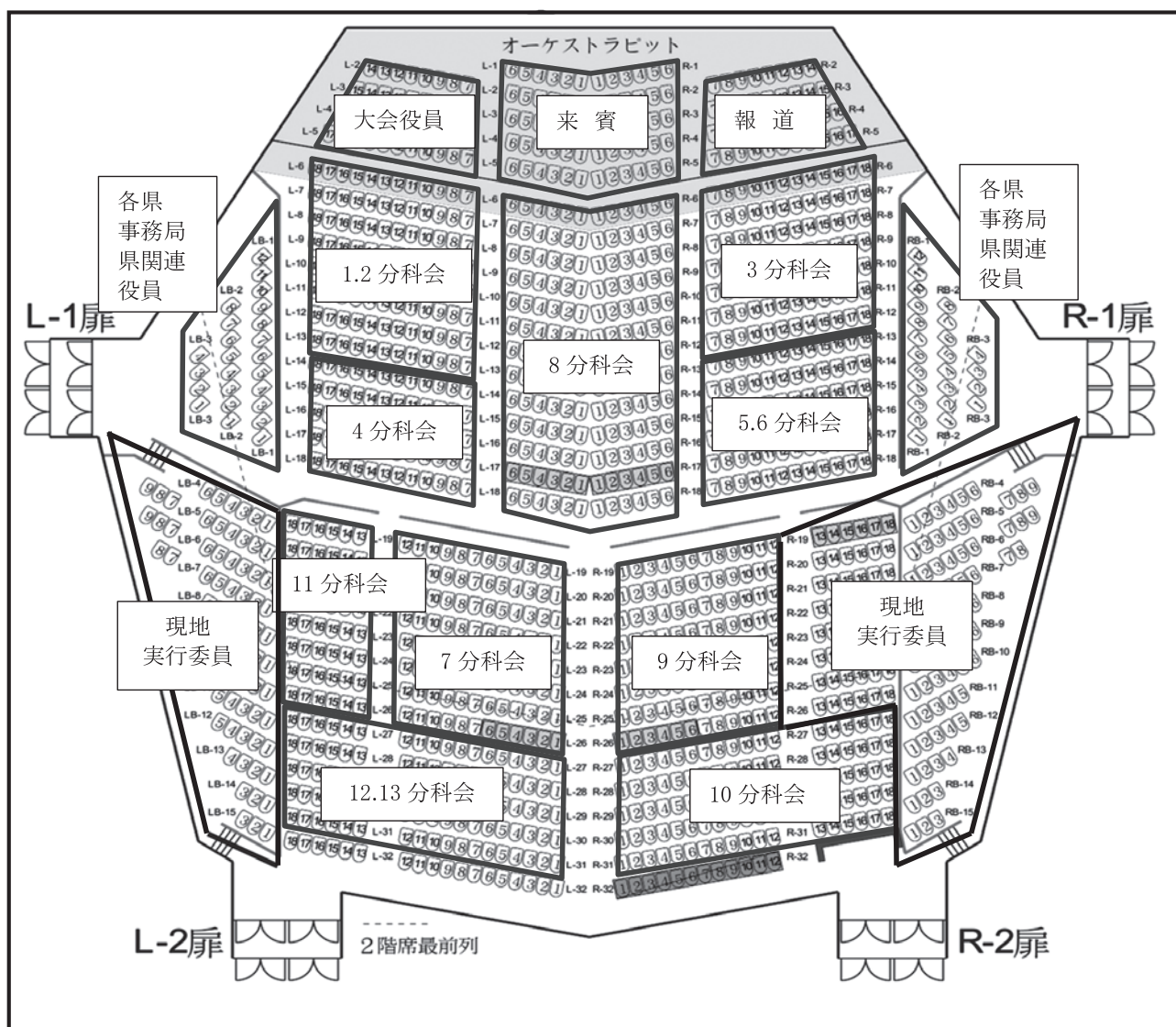
- 【朝】福山駅発→リーデンローズ（全体会場）行き 午前 8 時 20 分～9 時 15 分
- 【昼】リーデンローズ（全体会場）発→ローズコム（第 10、12、13 分科会場）行き（全体会後）
- 【夕】リーデンローズ、福山市立大学発→福山駅前行き（分科会終了後）



全体会場座席図

(ふくやま芸術文化ホール リーデンローズ 大ホール)

ステージ





全体会、第7・8分科会会場（リーデンローズ）



第1・2・3分科会会場（福山市立大学 港町キャンパス）



第4・5・6・9・11分科会会場（福山市立大学 小松安弘記念館）



第10・12・13分科会会場（ローズコム）



全体会

大会主題・趣旨
分科会(領域・研究課題・趣旨)



●福山城

福山城は、江戸時代初期の1622年頃、初代藩主・水野勝成によって築られました。「令和の大普請」と名付けられた築後400年記念事業により、鉄板張りの天守が往時の姿で美しくよみがえりました。





大会主題・副主題及び趣旨

大会主題

自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進

大会副主題

夢や志をもち 他者と協働して 主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営

【趣 旨】

現代社会は、深刻さを増す少子化・高齢化、グローバル情勢の混迷、生成 AI などデジタル技術の急速な発展、気候変動に伴う自然災害の激甚化などにより、社会・経済の先行きに対する不確実性がかつてなく高まっている。めまぐるしい変化や不安定な社会が常態化する時代において、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力が必要とされている。

特に、「人生 100 年時代」の到来や労働市場の流動性の高まり、マルチステージの人生モデルへの転換に伴い、自分とは異なる他者の多様な価値観を受容し、対話を通して課題を発見・解決できる未来の担い手を育てる必要性が高まっている。

このような将来の予測が困難な時代においては、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会の様々な変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、民主的で持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を育成することが求められている。

そのため、学校教育においては、一人一人の個性や興味・関心に応じ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「探究的な学びの質の向上」に向けた学びへの転換をより一層進める必要がある。そして、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、多様な他者と協働して新たな価値を創造する人材を育む学校教育を推進しなければならない。

広島県では、次期「広島県 教育に関する大綱」が掲げる「一人一人が、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働して新たな価値を創造する人づくり」のもと、これまで推進してきた「学びの変革」をさらに加速させることが求められている。子どもたちが自らの夢や志に向けて挑戦し学び続けられるよう、地域等の多様な人々と協働し、現実社会における課題の解決策を創造する主体的な学習活動を通して、「広島で学んだことに誇りを持ち、胸を張って『広島』、『日本』を語り、高い志のもと、世界の人々と協働して新たな価値（イノベーション）を生み出すことのできる人材の育成」を目指していく。

こうした中、校長には、確固たる教育理念と豊かな見識をもち、未来を見据えた広い視野で学校を導くことが求められる。次期学習指導要領の方向性を踏まえ、将来の予測が難しい社会の中でも、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を一人一人に確実に育む学校教育の実現に向け、リーダーシップを発揮し、柔軟に対応することが不可欠であり、次の2つの視点をもとに取り組むこととした。

- ・明確なビジョンを構築し、全ての教職員と共有するとともに、学習指導要領にある生きる力を踏まえ、学校の特色や多様化した地域の力、豊かな自然や里山などの地域環境を最大限に生かした独自の探究的なカリキュラムを構築し、カリキュラム・マネジメントを実施すること。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、授業改善や「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を図ること。
- ・家庭、地域社会、関係機関との緊密な連携・協働体制を構築するとともに、地域の教育力を生かした透明性の高い学校経営を実現すること。同時に教職員の働き方改革をさらに加速させるとともに、若手教員を含めた教職員一人一人が主体的に挑戦できる計画的・継続的な人材育成を通じて、それぞれの専門性と意欲を高め、次代の教育を担う活力ある学校組織を構築し、効果的に機能する体制を確立すること。

以上のことから、副主題を「夢や志をもち 他者と協働して主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営」と設定し、校長の果たすべき役割と指導性を究明しようとするものである。

【分 科 会】

- | | | | |
|---------------|----------|------------|-----------|
| (1)経営ビジョン | (2)組織・運営 | (3)評価・改善 | (4)知性・創造性 |
| (5)豊かな人間性 | (6)健やかな体 | (7)研究・研修 | (8)リーダー育成 |
| (9)学校安全 | (10)危機対応 | (11)社会形成能力 | (12)自立と共生 |
| (13)社会との連携・協働 | | | |



分科会（領域・研究課題・趣旨）

【研究領域Ⅰ 学校経営】

〈第1分科会 経営ビジョン〉

【研究課題】 先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知

【趣 旨】

グローバル化・情報化の進展や人工知能（AI）の進化が進む一方で、SDGsに掲げられる課題が多く残る等、社会環境の変化が急速に進む予測困難な時代を迎えている。このような時代の中、学校教育には家庭や地域社会の多様なニーズに応えながら、子ども達一人一人が心豊かに、たくましく未来を生き抜くための資質・能力を育成することが求められている。また、個別最適化された学びによる個性の伸長に加え、持続可能な社会を創造する「人財」として、活用力や汎用性の高い確かな学力、変化し続ける社会に対応するための自主性、自律性、適応力を育む教育を推進していくことが必要である。

このような予測困難な時代において、校長はよりよい学校経営に向けて、学校教育の目指すべき姿を明確に描き、各々の教育活動を貫く理念となる、創意と活力に満ちた学校経営ビジョンを示す必要がある。そのために、校長はまず自校の課題を把握し、その解決に向けて重点化と効率化を図りながら、時代の潮流を的確に見取り、創意と活力に満ちた学校経営を推進することが重要である。そして、校長の力強いリーダーシップのもと、教職員の知恵と力を結集するとともに、家庭や地域社会と連携して課題を共有し、解決を図ることで、よりよい教育を実現していかなければならない。

本分科会では、先見的で創意と活力に満ちた学校経営ビジョンを基盤とする具体的な方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

〈第2分科会 組織・運営〉

【研究課題】 学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある組織づくりと運営

【趣 旨】

情報化やグローバル化の進展など急速に社会が変化する中、学校教育を取り巻く社会情勢はますます複雑化・多様化してきている。また、未知の疾病や激甚化する自然災害への対応等、国境を越えた協力体制なくしては到底解決できない課題も山積している。これらに伴って、学校が抱える教育課題も、増々複雑化・多様化していくことが予想される。

こうした中、学校には、高い志と広い視野をもって人生を切り拓き、社会の主体的な創り手となる子どもの育成が求められている。また、多様性を尊重し、幅広い知識・教養と柔軟な思考力に基づいて新たな価値を創造する力や、一人一人が自らの課題を解決しつつ、他者と協働する力の育成も求められている。こうした社会からの要請に基づく様々な教育課題に対応するとともに、学校の強みや弱みを的確に把握した上で、実態に即した学校経営ビジョンを明確にもって学校経営をすることが重要である。

そのため、校長は学校全体を俯瞰する目を持ち、経営資源（人・もの・予算・情報・時間）を有効に活用して、児童・保護者・地域が「通ってよかった・通わせてよかった・応援してよかった」と思える学校をめざして、学校経営をすることが求められる。そして、それは全ての教職員とビジョンや目標を共有し、協働していく組織として機能させなければならない。

本分科会では、学校経営ビジョンの実現に向けた心理的安全性の高い組織づくりと運営について、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。



〈第3分科会 評価・改善〉

【研究課題】 学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善

【趣 旨】

社会の変化は加速度を増し、より複雑で予測困難な時代を迎えている。このような時代の中、変化を前向きに受け止め、感性を働かせて社会や人生をより豊かなものにし、複雑化・多様化した現代社会の課題に対して、主体的な学びや多様な人々との協働を通じ、その課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出す資質能力を子ども達に育むことが求められている。

こうした中、教育活動で育成すべき資質・能力を「何を理解しているか、何ができるか。」「理解していること、できることをどう使うか。」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。」の三つの柱で、バランスよく確実に育成することが重要である。そして、「生きる力」や、知・徳・体の育成の現代的な意義をとらえ直し、夢と高い志をもち、未来社会を主体的に生きる力を育むために、教育活動の質を高め、その向上を図る必要がある。

そのために校長は、時代の変化を見据えた学校経営ビジョンを策定し、リーダーシップを発揮しながら、協働的な教育活動が展開できるよう、学校経営の評価・改善を進めていく必要がある。中でも、学校評価においては、経営や教育活動の組織的・継続的な改善を進め、家庭・地域・関係諸機関等と評価を共有し、連携・協働する「チームとしての学校」づくりを推進することが重要である。また、教職員評価においては、定期の評価はもとより、あらゆる機会を効果的にとらえ、教職員への適切な指導と対話を重ね、各自の意識改革と能力開発を促すとともに、個々の評価を学校の組織力の強化につなげ、協働体制のもとで学校の教育力の向上に取り組めるようにしていくことが大切である。

本分科会では、学校の教育力の向上を図るため、学校経営の評価・改善の在り方の具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

【研究領域Ⅱ 教育課程】

〈第4分科会 知性・創造性〉

【研究課題】 知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

【趣 旨】

社会の在り方が劇的に変わり、先行きが不透明で予測困難な時代を迎える中、これまで経験したことのない問題に対応するためには、既成概念にとらわれない豊かな発想や新たな価値を生み出すことのできる資質や能力が求められる。学校では、そうした資質や能力を育成するため、知識や技能の獲得を重視する学力観から、知識の活用を重視する学力観への転換を図っている。今後は、子ども達一人一人が、自らに自信をもち、夢や志の実現に向け、たくましく生きる力を身に付けるため、新たな課題に果敢に挑戦しながら、いかなる変化にも対応できる柔軟な思考力や判断力、表現力、さらには新たな見方や考え方をもとに新しい価値を創出することのできる資質・能力を育てていくことが重要である。

学校においては、これからの持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力を育てる教育課程を編成・実施し、評価と改善を進め、子ども達一人一人に、自らの夢や志の実現に向け、他者と協働しながら学び続けるための知性や創造性を養うことが求められる。校長は、これらのことを踏まえ、育てる児童像を明確にして目標を設定し、その達成に向けた教育活動が、効果的に展開されるようカリキュラム・マネジメントを行っていかねばならない。

本分科会では、校長がリーダーシップを発揮し、知性や創造性を育むカリキュラム・マネジメントを推進するための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。



〈第5分科会 豊かな人間性〉

【研究課題】 豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント

【趣 旨】

社会の在り方が急速に変化していく中で、学校では不登校やいじめ、SNSでの誹謗中傷、自殺等、深刻な問題を抱えており、その背景として人間関係の希薄さ、自己肯定感の低さや無気力が指摘されている。このような中であって、子ども達は、自らを律しつつ、自己の確立に努めるとともに、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について多様な価値観を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよく生きることが肝要である。学校では、子ども達の豊かな人間性を育むことが求められており、その基盤となるのが、教育活動全体を通じて行う道德教育や人権教育である。

道德教育においては、道德的価値を内面で統合させるとともに、人間らしいよさとも言える道德性を養うことが求められる。子ども達一人一人が自立した人間として、互いを尊重し合い、多様な出会いから自己の生き方を見つめて、自らの人生を拓き、未来社会を創ろうとする力を育成することが重要となる。

また、人権教育においては、人権の意義や内容、その重要性を正しく理解させるだけでなく、自他を尊重し、共に生きることの価値を自覚できるようにすることが求められる。そのため、教育活動全体を通じて、他の人の立場に立って共感的に理解する力、伝え合い分かり合うためのコミュニケーション能力、人間関係を調整したり解決方法を見出したりしてそれを実現する力等を、体験活動を効果的に取り入れながら総合的に育成し、人権感覚を磨き、人権擁護を实践する意識や態度を養っていく必要がある。

本分科会では、道德教育や人権教育等の実践を通して豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントを推進する上での具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

〈第6分科会 健やかな体〉

【研究課題】 健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

【趣 旨】

科学技術の高度化や情報化の進展等、社会環境の急激な変化は、子どもの生活環境にも大きな影響を及ぼし、心身両面にわたる健康上の問題を生み出している。日常的な運動量の減少は、子どもの体力・運動能力の低下を招くとともに、基本的な生活習慣の乱れにもつながり、ストレス症状の増加、SNSやゲームへの依存等、様々な心の健康問題の要因になっている。このような状況の中、健康で安全な生活を送るために必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行い、自らの課題の解決を目指すことができる力を子ども達一人一人に育むことが求められている。

学校においては、ヘルスプロモーションの理念に基づき、生涯にわたって主体的にスポーツに親しむ習慣や資質能力を育成するとともに、健康の保持増進に必要な知識・習慣を身に付けさせることを一層重視していく必要がある。また、子どもが身に付けたことや学んだことを実生活や実社会に生かせるように、家庭や地域社会、関係諸機関等との連携を強化するとともに、指導の在り方を工夫していくことが重要である。

校長には、健やかな体を育む教育を全教育活動の中で意図的・組織的に進めるためのカリキュラム・マネジメントが求められる。そのためには、各教科、特別の教科 道德、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動等を関連付けて教育計画を整えるとともに、家庭や地域、保健関係・福祉関係機関等、様々な組織と連携・協働できる体制を整備しなくてはならない。

本分科会では、地域連携教育の仕組みを生かしたカリキュラム・マネジメントを通して、子どもが生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力、健康で安全な生活を営む実践力を育む教育活動を推進するための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。



【研究領域Ⅲ 指導・育成】

〈第7分科会 研究・研修〉

【研究課題】 学校の教育力向上を図る研究・研修の推進

【趣 旨】

21世紀は知識基盤社会であり、グローバル化の進展と人工知能（AI）の飛躍的な進化により、これまでにない大きな社会の変化が予想される。子ども達には、こうした予測困難な社会の変化に主体的に関わり、自らの個性や可能性を存分に発揮しつつ、様々な事象や多様な他者と向き合い、関わり続ける中で、多くの現代的な課題を解決する高い能力を育むことが求められる。このような現状を踏まえ、学校においては、「チーム学校」として家庭や地域社会と一層連携・協働し、地域とともにある学校づくりを推進しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善やカリキュラム・マネジメントを推進することが必要である。このような教育活動を直接担うのは教職員であり、その使命・責務を果たしていくために、教職員の資質や能力の向上を図る研究・研修が極めて重要となる。

校長は、教職員一人一人の特性や力量を見極め、個に応じた課題とその解決への展望をもたせながら資質向上を図る必要がある。また、キャリアステージを意識した展望や「チーム学校」への参画意識をもつことができるよう、リーダーシップを発揮することも必要となる。そこでは、教職員間の学び合いや支え合い、協働する力、即ち同僚性が基となる。校長としては、組織マネジメントの視点を持ち、それらがうまく機能する研究・研修の場を意図的に設定し、組織的・計画的に推進していくことが重要である。さらには、教職員の世代交代が進む中、校長自らも資質・能力の向上を図り、これまでの「不易」の教育を継承しながら培ってきた指導法等を伝え、若い世代を育てていくことも求められている。

本分科会においては、学校の教育力向上を図る研究・研修を推進するための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

〈第8分科会 リーダー育成〉

【研究課題】 これからの学校を担うリーダーの育成

【趣 旨】

教職員は、子ども達の心身の発達に関わり、その人格形成に大きな影響を与える存在であり、その資質能力を絶えず向上させていく必要がある。さらには、組織的に課題解決に取り組む組織運営能力を高めることも重要となってくる。そのため、校長は、日常的に相互の関わりの中で教職員が実践的な指導力を発揮できるようにするとともに、将来の管理職を担う人材となるべき教職員や組織を育成することが求められている。

また、予測困難な社会への変化が急速に進み、取り組むべき課題が多様化する状況にある中、学校経営を計画的に推進していくためには、教育活動全体を俯瞰する見識と実践的な指導力、管理職と教職員の円滑な連絡及び調整を行う力等を備えた、校務運営において中核的な役割を果たすミドルリーダーの存在も不可欠となってくる。校長は、教職員一人一人の授業力・指導力の把握はもとより、長期的で広い視野に立って教育活動を展開・推進する意欲、他の教職員と協働する能力や資質等、これからの学校を真に担うリーダーとして求められる力量を見極め、人材を発掘しなければならない。また、教職員が、係る資質能力をより一層伸長していくことができるよう、組織的・計画的な人材育成体制の構築及び充実に努めなければならない。

本分科会では、社会の変化に主体的にかかわり自ら学び続けるこれからの学校を担うリーダーを育成するための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。



【研究領域Ⅳ 危機管理】

〈第9分科会 学校安全〉

【研究課題】 地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進

【趣 旨】

近年、「特定非常災害」に指定される災害が全国各地で頻発し、今後も大規模な自然災害の発生が危惧されている。また、重大事故や犯罪・事件の発生、児童虐待等、子どもが被害者となる痛ましい事案が後を絶たない。さらには、無料通話アプリやSNS、オンラインゲーム等によるネット依存、それらの利用に伴うトラブルも起きている。そして、近年では、新型コロナウイルス感染症のような「未知の領域の危機管理」が求められており、子ども達を取り巻く危機的状況は多様化するとともに、深刻さを増している。

こうした現状を踏まえ、学校には、安心・安全な教育環境の確保や、防災についての知識、危険予測と危機回避能力等を養うことが求められている。加えて、予測不可能な事態が生じた際には、子ども達が自ら判断し、行動できる力や態度を身に付けさせるとともに、協働して新たな社会を創造する力を養うことも強く求められている。

校長は、教職員の学校安全に関する資質・能力を身に付けさせるとともに、各教科等を通じて安全教育・防災教育を計画的・組織的に推進し、子ども達の生命を守るための諸課題に適切に対応していかなければならない。また、安全で安心な社会の担い手となる子どもの育成を目指し、家庭や地域社会との連携に努めていく必要がある。

本分科会では、子ども達の安心・安全を確保するとともに、生命を守るための安全教育・防災教育を推進するための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

〈第10分科会 危機対応〉

【研究課題】 学校と子どもを取り巻く危機への対応

【趣 旨】

近年、学校や子どもを取り巻く安全上の課題は多様化している。大地震や風水害等の自然災害のみならず、不審者の侵入、新型コロナウイルス感染症等の様々な感染症の流行、児童虐待、SNSやインターネットを使った犯罪、登下校中の交通事故等、安全上の課題が見られる場面は、多岐にわたっている。また、いじめや不登校、暴力行為、器物損壊等、生徒指導上の問題も依然として深刻な課題となっている。

学校は、子ども一人一人が安心して通い、様々な教育活動に取り組み、仲間とともに夢や希望、志を育むことができる場でなければならない。そして、教職員は第一に子どもの命を守り、安心・安全な学校生活を送ることができる環境を整備する役割を担っている。そのために、学校には、事件・事故の未然防止と適切な対応を可能にする危機管理体制を確立し、教職員及び子ども達一人一人の危機対応力を高めることが求められている。

校長は、常に危機意識をもって学校経営に当たり、事件・事故の未然防止に努め、教職員の危機意識を高めるとともに、あらゆる場面を想定して危機管理体制の充実・改善を図っていく必要がある。また、常に様々な危機を想定し、家庭・地域社会・関係機関等との連携と協働体制を構築しておかなければならない。

本分科会では、様々な危機から子どもや学校を守る対応の在り方と未然防止のための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。



【研究領域Ⅴ 教育課題】

〈第11 分科会 社会形成能力〉

【研究課題】 社会形成能力を育む教育の推進

【趣 旨】

生活様式の変化とともに、単独世帯の増加や地域コミュニティ活動の減少等により、地縁的なつながりが希薄化し、子どもが地域の中で集う場所や機会も減少している。このため、家庭や地域で子どもの社会性やコミュニケーション能力を育む機会が減少し、所属意識の醸成等にも影響を及ぼしている。

学校には、子どもに社会を構成する一員として、主体的によりよい社会を協働して形成しようとする能力や態度等を育むことが求められる。併せて、家庭や地域社会と連携・協働して、地域に貢献する学校づくりを進めることも重要である。その中で子ども達は、身近な社会の課題に触れたり、解決に向けて地域で一定の役割を担ったりしながら、地域社会の一員としての自覚をもつことができる。そこでは、社会総がかりで子どもの学びや育ちを見守り支援し、一層連携・協働した取組の充実が望まれる。

校長は、社会の発展に貢献する資質・能力、態度を育むために、地域の人材・資源を活用し、体験や問題解決的な学習を取り入れた教育活動を展開する必要がある。また、地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むために、キャリア教育の視点に立った教育活動を展開することが求められている。これらの教育活動の効果を高めるカリキュラム・マネジメントを進め、社会的・職業的自立に必要な力やコミュニケーション能力を育み、よりよい社会の創造に積極的に関わろうとする人材を育成することが重要である。

本分科会では、校長のリーダーシップのもと、社会形成能力を育む教育の推進のための具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

〈第12 分科会 自立と共生〉

【研究課題】 自立し、共に生きる力を育む教育の推進

【趣 旨】

第4期教育振興基本計画において、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が挙げられ、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上することが求められている。ウェルビーイングの個人が獲得・達成する能力や状態に基づく獲得的要素と、人とのつながり・関係性に基づく協調的要素の両者を調和ある形で一体的に向上させていくことが重要であり、これは本分科会のテーマと深くつながるものである。

共生社会とは、互いの人権を尊重し合い、共に力を合わせて生活することができる社会である。学校では、子ども達が互い的人格と個性を尊重し合い、自らの自己肯定感を高めるとともに、多様性の尊重、他者への共感や思いやりの心を醸成する教育を推進することが重要である。また、障害のある子どもの自立と社会参加に向け、持続可能で幸福な人生の作り手となる力の育成を目指した教育的ニーズを把握し、自ら必要な支援を求めることができるよう、特別支援教育を発展充実させることも重要である。

校長は「自立と共生」の社会づくりにおける学校教育の果たす役割を自覚し、誰もが幸せに生きるために必要な資質と能力を育むという視点で、特別支援教育や国際理解教育、人権教育、キャリア教育等の教育活動において、カリキュラム・マネジメントの確立と校内体制の整備、地域や関係機関との連携の推進をより一層充実させなければならない。

本分科会では、校長のリーダーシップのもと、子ども一人一人が自立し、多様な他者と共に生きる力を育む教育を推進するための具体的方策と成果を究明する。



〈第13分科会 社会との連携・協働〉

【研究課題】 家庭・地域社会等との連携・協働と学校間連携の推進

【趣 旨】

持続可能な地域社会の創造に積極的に参画し、貢献しようとする子どもを育成するために、家庭や地域社会等が担う役割は大きい。教育振興基本計画は、社会全体の教育力向上のため、学校・家庭・地域社会等との連携・協働を強化し、各々がその役割と責任を自覚した取組をするよう求めている。近年、家庭の教育力の低下や少子高齢化等、社会と家庭生活や子どものつながりの希薄化も深刻となり、基本的な生活習慣の欠如、自制心や規範意識の希薄化、コミュニケーション能力の不足等、子ども達の成長に関わる様々な課題が生じ、学校生活にも影響を及ぼしている。これからの学校には、地域の協力と地域への貢献という双方向の関わりを通して、地域と一体となって学校教育を創造することが求められている。そのため、学校と地域は情報の共有化を図り、役割を明確にして、社会全体の教育力向上に向けて取り組む必要がある。広島県では、学校運営に地域の声を積極的に生かし、一体となって特色ある学校づくりを進めるコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の導入を進めているところである。

一方、地域の保育所・幼稚園及び小学校・中学校の教職員が、「小1プロブレム」や「中1ギャップ」といった保・幼・小・中学校間における「段差」や「切れ目」を緩和・低減し、子ども達の連続的な発達を意識して、相互理解による連携を図ることが大切である。

校長は、こうした連携のもつ役割についての認識をもとに、地域とともに生きる学校づくりを推進するとともに、家庭・地域社会・異校種間等との連携、並びに円滑な接続や教育環境の整備を進めていく必要がある。

本分科会では、家庭・地域社会等との連携や異校種間の接続、推進に向けた具体的方策と成果を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

記念講演



●福禅寺対潮桜

1690年ごろ、真言宗の寺院・福禅寺の客殿として建てられました。「いろは丸事件」の際、坂本龍馬ら海援隊と紀州藩が実際に談判を行った場所です。座敷からは、穏やかな瀬戸内海に仙酔島や弁天島がぽっかりと浮かぶ、鞆の素晴らしい眺めを一望できます。

●鞆港

江戸時代には北前船の寄港地としても栄え、朝鮮通信使も幕府の慶賀などのために度々寄港。鞆は国内外との交易で栄えた港で歴史に名高い旧跡や遺構も多く残されています。





記念講演

演題「伝え継ぐ能の心～伝統に学ぶ生きる力～」



能楽シテ方 喜多流

大島 衣 恵 氏

【略歴】

広島県福山市の喜多流大島能楽堂を中心に能楽の演能、普及活動に努めている。20 数年前から福山市内の小学校での外部講師をはじめ、エリザベト音楽大学、岡山山陽高等学校、岡山三勲小学校、広島県府中市立国府小学校の能楽非常勤講師を務める。

ヨーロッパやアジア、アメリカ、ハワイなど海外での能公演やツアーにも多数参加するなど国際的に活躍し、ハワイ大学、アメリカでのプロジェクト等で能の講師を歴任している。

【経歴】

- 1974 年 東京に生まれる
- 1976 年 2 歳の時に広島県福山市に転居
- 1977 年 祖父・久見、父・政允（共に能楽喜多流職分、国指定重要無形文化財保持者）に師事し、能「鞍馬天狗」稚児にて初舞台
- 1997 年 東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業
- 1998 年 喜多流初の女性能楽師として、能楽協会に登録される。
- 2000 年 台北芸術大学で学生の指導及び能楽公演
- 2002 年 喜多流能楽師として活動を本格化しアメリカ、ヨーロッパ各地で能公演
- 2006 年 アメリカでの能楽指導に招聘される
- 2009 年 英語能シテを勤め欧州公演
- 2020 年 パリ太陽劇団で能楽指導
- 2023 年 パリ太陽劇団の劇場にて能公演

【受賞歴】

- 2005 年 県民文化奨励賞
- 2007 年 広島県教育奨励賞
- 2010 年 国際交流奨励賞
- 2018 年 第 39 回広島文化賞





メ

モ

Handwriting practice lines consisting of multiple sets of three horizontal lines (top solid, middle dashed, bottom solid) for letter formation.

分科会

分科会一覧 分科会提案者概要



●ばら

「戦災で荒廃した街に潤いを与え、人々の心に和らぎを取り戻そう」と1956年、南公園(現在のばら公園)付近の市民がばら苗約1,000本を植えたのが「ばらのまち福山」の始まりです。例年5月中旬には福山市最大のイベント「福山ばら祭」が、ばら公園をメイン会場のひとつとして、盛大に開催されます。





分科会会場及び県別参加者数

(☆印は分科会提案県)

	研究領域		分科会領域		広島県	鳥取県	島根県	山口県	岡山県	合 計
1	I	学校 経営	1	経営ビジョン	☆ 47	4	7	7	☆ 12	77
			2	組織・運営						
			3	評価・改善	☆ 46	4	☆ 6	9	11	76
2	II	教育 課程	4	知性・創造性	☆ 31	2	☆ 5	6	6	50
			5	豊かな人間性	☆ 36	3	4	7	☆ 10	60
			6	健やかな体						
3	III	指導 育成	7	研究・研修	☆ 48	5	7	☆ 9	10	79
			8	リーダー育成	☆ 66	☆ 6	35	12	19	138
2	IV	危機 管理	9	学校安全	☆ 36	☆ 3	4	7	9	59
4			10	危機対応	☆ 47	5	7	☆ 9	12	80
2	V	教育 課題	11	社会形成能力	☆ 25	2	3	4	☆ 6	40
4			12	自立と共生	☆ 46	6	6	☆ 9	12	79
			13	社会との連携・ 協働						
合 計（開催県以外は、30%計算）					428	40	84	79	107	738
各県小学校数（R7 年度）					430	118	187	263	353	1351

◆分科会会場

〈施設 1〉福山市立大学 港町キャンパス

〈施設 3〉リーデンローズ

〈施設 2〉福山市立大学 小松安弘記念館

〈施設 4〉まなびの館ローズコム



分科会関

会 場	研究領域	分科会・研究課題	発 表 主 題
福山市立大学 港町キャンパス (中講義室 B)	I 学校経営	1 経営ビジョン 先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知	コミュニティ・スクールを活用した経営ビジョンの策定 ～小中9年間を見通したカリキュラムの編成と、共に高め合う組織づくりを通して～
		2 組織・運営 学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある組織づくりと運営	職員の参画意識を高める学校運営の工夫 ～地域の魅力を学校の魅力に～
福山市立大学 港町キャンパス (中講義室 C)		3 評価・改善 学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善	効果実感の高い学校のあり方 ～行政説明を手がかりとした学校評価の活用～ 学校評価の実効性を高めるための工夫 ～小中一貫教育の取組を通して～
福山市立大学 小松安弘記念館 (多目的 A)	II 教育課程	4 知性・創造性 知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント	ふるさとを誇りに自らと未来を切り拓く児童の育成 ～ふるさと奥出雲の本物、たたら体験学習を通じた取組～ 「主体的に学ぶ子どもの育成」に向けた教育活動の活性化と校長の役割
福山市立大学 小松安弘記念館 (講義室 A)		5 豊かな人間性 豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント	心理的安全性が育む「豊かな人間性」の土壌づくり ～SWPBSを基盤とした学校風土の変革～
		6 健やかな体 健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント	運動に親しむ子どもの育成 ～体力向上取組の充実をめざして～
リーデンローズ (小ホール)	III 指導・育成	7 研究・研修 学校の教育力向上を図る研究・研修の推進	下関市全小学校の実践に基づく実証的考察 ～校長のリーダーシップを核とした「学び合う組織」の実現を目指して～ 研修・研究を学校の力に変える ～ビジョンを体現する『組織的実装』の実際～
リーデンローズ (大ホール)		8 リーダー育成 これからの学校を担うリーダーの育成	学校組織力の向上を目指すリーダー育成 ～他校との相互交流がもたらす「教師の成長」と「学校の活性化」～ 確かな展望をもち行動できるミドルリーダーの育成 ～学校組織力の向上を図る取組を通して～
福山市立大学 小松安弘記念館 (講義室 B)	IV 危機管理	9 学校安全 地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進	学校・家庭・地域が連携・協働して、自他の生命を守る児童を育む ～中浜地区津波避難訓練を通して～ 自分の命を守る みんなの命を守る ～児童・教職員の安全・防災の意識を高め、判断力を育てる取組～
まなびの館 ローズコム (大会議室)		10 危機対応 学校と子どもを取り巻く危機への対応	全体最適の危機管理を実現し、組織の危機対応力を高める校長の役割と指導性 様々な危機への対応と未然防止の体制づくり ～「日常の平和」を感じる学校づくり～
福山市立大学 小松安弘記念館 (ラーニング コモンズ B)	V 教育課題	11 社会形成能力 社会形成能力を育む教育の推進	小学校段階で必要な社会形成能力の育成 ～学級経営を核とした社会形成能力育成の方策について～ 子ども自ら地域とつながり、地域に働きかける教育活動 ～「ふるさとキャリア教育」の推進を通して～
まなびの館 ローズコム (中会議室)		12 自立と共生 自立し、共に生きる力を育む教育の推進	「自立と共生」を見据えた学校経営の在り方 ～特別支援教育の視点から～
		13 社会との連携・協働 家庭・地域社会等との連携・協働と学校間連携の推進	育ちと学びをつなぐ幼保小連携 ～離れていても無理なくできる連携を目指して～



係 者 一 覧

提 案 者	司 会 者	記録者 (広島県・市)	会場係 (福山市)		運営委員 (広島県・市)
広島・福山市・長浜小 村上 政紀	広島・福山市・赤坂小 杉本 愛弓	福山市・旭小 田村 泰子	福山・引野小 來山 桂子	福山・東小 松岡 浩之	福山市・戸手小 三島 寛子
岡山・総社市・新本小 志田 圭子	岡山・総社市・池田小 石井 恭子				
島根・松江市・出雲郷小 濱岡 宏行	島根・松江市・朝酌小 伊達 悟	呉市・豊小 清水 晃子	福山・春日小 小坂 京	福山・川口小 木元 直樹	呉市・三坂地小 菊地あかね
広島・呉市・波多見小 蒲原 尚博	広島・呉市・広小 後東 貴之				
島根・奥出雲町・横田小 千原 一弘	島根・奥出雲町・仁多小 三島 啓介	福山市・本郷小 本田 光洋	福山・坪生小 山室 和恵	福山・蔵王小 福田 裕治	竹原市・竹原小 吉田 美和
広島・広島市・五月が丘小 中澤 真子	広島・広島市・河内小 古城 裕司				
広島・神石高原町・油木小 六原 三枝	広島・神石高原町・来見小 徳重 知子	世羅郡・甲山小 宮本 毅	福山・神村小 徳重 富雄	福山・泉小 高橋 典子	廿日市・地御前小 柳川 大蔵
岡山・玉野市・築港小 片山 昇	岡山・玉野市・田井小 川淵 玉美				
山口・下関市・小串小 中野 達史	山口・下関市・養治小 三谷 朱美	庄原市・高野小 赤木 智香	福山・大谷台小 田中 勤子	福山・日吉台小 灰原 久美	三次市・三和小 佐々木 孝
広島・庄原市・総領小 川原 陽子	広島・庄原市・永末小 岡崎 敏朗				
鳥取・米子市・五千石小 山本 晶子	鳥取・米子市・河崎小 石倉 和幸	安芸郡・海田小 高木 和希	福山・駅家西小 池田 明子	福山・桜丘小 猿渡久美子	東広島市・川上小 菅 ちあき
広島・熊野町・熊野第四小 中川 隆	広島・海田町・海田南小 西村 靖子				
鳥取・境港市・中浜小 水嶋志都子	鳥取・境港市・境小 高濱 禎彦	尾道市・美木原小 石本 美喜	福山・山手小 藤里 昌子	福山・久松台小 小島 仁美	三原市・須波小 福原喜美子
広島・三原市・小泉小 岡 明美	広島・三原市・本郷西小 清田 輝				
山口・周南市・富田東小 大丸奈緒美	山口・周南市・周陽小 増本 森幸	福山市・明王台小 清水 早苗	福山・中条小 小林 貴子	福山・伊勢丘小 清水弓記子	江田島市・鹿川小 河野 諭恵
広島・広島市・大州小 藤谷 並樹	広島・広島市・宇品東小 藤井 智子				
岡山・岡山市・彦崎小 安東 伸一	岡山・岡山市・高島小 高岡 誠治	福山市・大津野小 森 正之	福山・駅家小 吉岡美和子	福山・常金丸小 山田 裕之	福山市・津之郷小 大石 充洋
広島・福山市・熊野小 望月 誠治	広島・福山市・御野小 川崎真由美				
山口・山口市・名田島小 福村 貴博	山口・山口市・生雲小 西嶋 智	福山市・旭丘小 加藤 聡	福山・駅家北小 河田 節生	福山・手城小 和田 亘	安芸高田市・吉田小 児玉 聡子
広島・広島市・長束小 吉岡奈緒美	広島・広島市・梅林小 大庭 智美				



〈経営ビジョン：先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知〉

コミュニティ・スクールを活用した経営ビジョンの策定 ～小中9年間を見通したカリキュラムの編成と、共に高め合う組織づくりを通して～

提案者 広島県福山市立長浜小学校長 村上政紀

1 はじめに

福山市校長会では、「先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知」を研究主題として各校の課題を分析し、実現したい学校の姿を共有しながら研究を進めてきた。なお、福山市校長会では、「先見的」という言葉を「変化の激しい時代に対応した…」「将来の教育環境を見据えた…」という意味として捉えることとした。更に本稿では、「学校経営ビジョン」を「学校長が自校の現状や地域の実態、教育の今日的動向等を踏まえて、どのような学校を標榜し、どのような子どもを育てたいかを示す未来の姿（理想像）」とし、「カリキュラム」を狭義の「教科・領域の年間指導計画」とする。

2 研究の概要

(1) コミュニティ・スクール（以下、CS）を活用したビジョンの策定

① 中学校区経営ビジョン「ローズマインド」

福山市では、令和8年度よりすべての中学校区でCSが導入され、育てたい子どもの姿を中学校区ごとに共有し、地域と協働しながら小中9年間の教育活動の充実に取り組んでいる。本校が属する一ツ橋中学校区は、中学校1校と小学校2校で編成されている（学校運営協議会には3校より校長を含む4人ずつが参加）。その会議で、令和8年度の方向性を協議した際、学校運営協議会会長から「小中9年間を通して、どんな子どもを地域と学校で育てるのか、もっと具体的なスローガンを設定してはど

うか」という提案をいただいた。学校・家庭・地域が同じ方向性で子どもを育てるために、誰にとっても分かりやすい目指す子どもの姿を示すことができれば、9年間という長いスパンで手を取り合って進むことができるのではないかと考え、再度各校の教育内容を振り返り、校種を超えた共通項を探った。

その結果、3校とも地域の方とばらの栽培活動を行ったり、ばらを他の教育活動に関連付けたりしていることが分かり、福山市が掲げる「ローズマインドを育てる」ことを中学校区共通のビジョンとし、家庭・地域と一体となって9年間の教育活動を充実させるという方向性を決定した。

ローズマインド（福山市 HP より）

福山の戦後復興から半世紀の歩みのなかで、誕生し根付いた言葉で、「思いやり 優しさ 助け合いの心」を表しています。平和、ばら栽培に必要な愛情、人への優しさなど様々な想いが込められています。

② 自校経営ビジョン「ローズマインド」

教職員に対しては、小中9年間で子どもを育てる意識を繰り返し語り、中学校区経営ビジョンとのつながりをもたせた自校経営ビジョン「ローズマインドを育てる～思いやり・優しさ・助け合いにあふれる子どもの育成～」を示し、ばらに係る学習を地域の方々の協力のもと充実させながら、学校・家庭・地域が協働して教育活動を推進する方針を打ち出すとともに、地域と共に学ぶ意義や地域と共にある学校の姿について語り続けた。



(2) 小中9年間を見通したカリキュラム編成

① 小中をつなぐ「探究テーマ」の設定

小中9年間で子どもを育てる軸として、「総合的な学習の時間」の学びの繋がりが重要だと話し合い、カリキュラムの整理を行った。まずは、各校のこれまでの「探究テーマ」を整理し、中学校での学びに複合的に結びつくように計画することとした。本校では「防災・環境・平和・地域貢献」を各学年でバランスよく配置し、中学校の学習とのつながりを充実させることとした。

《総合的な学習の時間「探究テーマ」のつながり》

学年	探究テーマ			
	防災	環境	平和	地域貢献
小3	○			
小4		○		
小5			○	
小6				○
中1	○			○
中2		○	○	○
中3			○	○

② カリキュラム編成の意図の周知

9年間を見通した中学校区経営ビジョン「ローズマインド」についての意義を研修するとともに、中学校区合同研修会に講師を招聘し、「探究」に関する理論研修を行ったり、実践交流を継続したりすることで、教職員が小中9年間を見通した「探究」の必要性を感じることができるようにした。

(3) 教職員同士が共に高め合う組織づくり

① 現状

上記の取組を進めていくためには、自校の教職員が一丸となり、学校運営に主体的に参画していくことが不可欠であり、人材育成を含めた組織力の向上が必要である。

しかし現状では、主任会において「校内の様々な状況や取組の共有が不十分」という意見が出されたり、福山市教育委員会が行っている「福山教育アンケート（授業を行う教職員を対象、令和8年1月末実施）において「本音を気兼ねなく発言でき、自

分の個性が認められている実感がある」という質問の肯定的回答が50%（市平均86.2%）であったりした。

② 心理的安全性を重視した組織風土の醸成
ア こうした実態を踏まえ、心理的安全性の研修を行うとともに、教職員の思いを詳しく把握するために、本校独自のアンケートを実施し一人一人の思いをしっかりと把握することに努めた。また、校長自らが積極的に教職員とのコミュニケーションを図った。
イ 「9年間でローズマインドを育てる」というビジョンを共有する対話を継続したことで、教職員のベクトルが定まり、主任層が若手の意見を積極的に吸い上げながら新しい提案をするようになったり、職員室で頻繁に建設的協議が行われるようになったりした。

3 校長の役割

- 校長は、地域の願いを丁寧に把握し、CSという枠組みを有効に活用してビジョンを策定し、また、その実現のためにカリキュラムを工夫し編成すること。
- 校長自身が9年間を見通した育てたい子どもの姿を明確にし、それを示すこと。
- 学校経営ビジョンの実現という一つの目的に対して、教職員がベクトルをそろえ、個々の良さを発揮できる職場環境を作ること。
- 校長は、学校課題を的確につかむとともに、教職員の願いを丁寧に把握し、教職員一人一人と積極的にコミュニケーションを図りながら心理的安全性を確保すること。

4 おわりに

9年間を見通した取組は始まったばかりである。今後も、カリキュラムの改善を進めながら、地域とビジョンを共有し実現する教育活動を展開していきたい。そのためにも、教職員が共に高め合える組織づくりを大切にしていきたい。



〈組織・運営：学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある組織づくりと運営〉

職員の参画意識を高める学校運営の工夫

～地域の魅力を学校の魅力に～

提案者 岡山県総社市立新本小学校長 志 田 圭 子

1 はじめに

本市は岡山県の中南部に位置し、岡山市、倉敷市、吉備中央町などと隣接する人口7万弱の市である。市内には小学校14校、中学校3校、義務教育学校1校がある。小学校・義務教育学校前期課程では、令和8年4月時点での児童数は20名～858名と、規模の差が大きく、これは市の中心部と周辺部といった地域別の人口でも同様である。市内の児童数を平準化することもねらって教育特区と小規模特認校が指定されており、特色ある教育活動を行うことが求められている。

2 研究の概要

(1) 教育特区・小規模特認校の概要

① 教育特区について

教育特区	昭和五つ星学園義務教育学校	英語 自然体験 地域貢献 課題解決
	池田小学校	体育 英語
	新本小学校	音楽 英語

② 小規模特認校について

特認校	秦小学校	理科 生活科
	神在小学校	体験活動 SEL
	総社西小学校	健康な体づくり

(2) 各校での取組

ともすれば学校の特色にからめた活動は「余分なこと」「他校では行っていないの」「自校ではしなければならないこと」「なぜしているのか釈然としないこと」といった教職員の印象があり、前向きにとらえられないことがある。働き方改革推進の中で、この傾向は一層顕著になっていると感じる。しかし、地域の特色を生かしな

がら魅力ある教育活動を展開することで、地域教材を活用した有意義な時間を児童に提供でき、地域のよさを十分に知った児童が育ち、地域の活性化にも役立つ。市内の人口課題に僅かでも貢献できる可能性もある。

そこで前述の意識を前向きなものに変化させる必要がある。そのために教職員の特色ある活動との距離感を調整することにより、無理のないところから、関わりを増やしたりその有用性を確認したりすることに取り組んだ。そして「働きやすさ」「働きがい」を感じられるように各校で様々な角度からのアプローチを行った。

① 可能なところは管理職が対応して教職員の負担軽減に努める。夜間、土日などの行事には管理職が参加し、休暇を別に取得するなどして対応する。

② 教職員がゆとりのある夏季休業中に自然体験会を計画するなどして、参加を促す。活動の意義や地域とのつながりの楽しさを共有する。

③ プラスアルファの活動を教育課程に位置付け、指導と評価を適切に行う。

④ 職員の参画を促し、「自分事 of 取組」とする。

特に③の取組は、多くの学校が取り入れている。教育課程に位置付ければ、実践すべきこととして当たり前になる。学校の課題として共通認識できていればいるほど受け入れられる。

④については、次年度の計画会議に教

(3) 新本小学校での取組

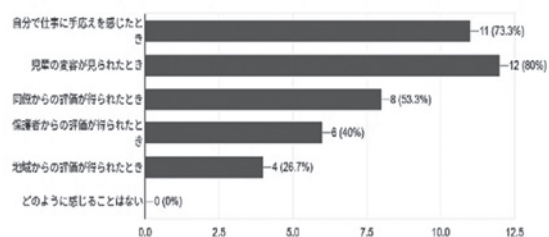
その一つに音楽特区として大学の教授にお手伝いいただきながら実施するオペレッタ『義民さま』がある。これについて担任や授業者で次の点について確認するように促した。

- ・活動を通して期待できる力
- ・効果的なスケジュール
- ・関連する教科領域 ・省ける活動 など

[illegible]

教職員が働きがいを感じられることも重要で、新本小のアンケートでは、自分の手応え以外には「児童の変容」「同僚からの称揚」によって感じられる意見が上位にある。一方、地域からの称揚によって働きが

1. どのようなときに『働きがいがある』『この仕...ていて良かった』と感じますか。(複数回答可)
15件の回答



- (1) 特色の内容に合わせた位置付けの見極め
- (2) 明確な経営ビジョンとその根拠を直接伝える方向付けと、漠然とした思いを「相談する」という形で示し教職員に委ねることの両方で「示しながら頼る」同僚との関係づくり
- (3) 日々の声かけや感謝も含めての評価と評価者の広がり

「この方法ならできる」「この点は重要」など、特色ある活動に対して、次第にこのような反応が聞かれるようになった。今後は教職員が、現任校での特色との関わり方を抽象化して「どう考え、どうすればうまくいったか」を考えることを勧めていきたい。そのことによって児童を見る視点が定まり、教育活動そのものを正しくとらえ実践する力が備わり、同僚と支え合う基盤ができる。今後、いずれの学校に転勤した後も、変化に前向きに対応し、しなやかに生きる自分を育てることにつながるはずである。



〈評価・改善：学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善〉

効果実感の高い学校のあり方 ～行政説明を手がかりとした学校評価の活用～

提案者 島根県松江市立出雲郷小学校長 濱 岡 宏 行

1 はじめに

松江市は、人口約20万人の島根県の県庁所在地であり、中核市として平成30年に移行された。松江市には小学校34校（義務教育学校2校含む）があり、児童数約900名の大規模校から児童数約40名の小規模校と幅広く点在している。松江市校長会は毎月1回定例会を開催し、学校訪問や学校運営に関する研修、教育課題に関する情報交換、協議などを行っている。

松江市の小中学校は、平成19年度から小中一貫教育を推進し、平成22年度から市内全域で小中一貫校になった。また、令和5年度から全ての学校がコミュニティスクールになっている。本校は、3つの小学校と1つの中学校で分離型「ほっとハート東出雲学園」として連携を図っている。

2 研究の概要

(1) テーマ設定の経緯と理由

本研究を進めるにあたって、学校評価の議論をめぐる経緯を昨年11月、市校長会で共有した。周知のとおり学校評価が平成10年の中教審答申から始まり平成18年3月にガイドラインとして策定された。さらに、平成19年12月には学校教育法が改正され、学校評価の法的な義務付けが始まった。その後、2回の改訂（第三者評価、義務教育学校・小中一貫教育学校の追加）を経て平成28年改訂版が最新であり現在に至っている。この学校評価の最新版が示された頃、文部科学省が「学校評価の充実に

向けて」行政説明を行っている。その行政説明によれば、その当時、全国の学校へ学校評価等実施状況調査（3年に1度）を行い、その調査結果を野村総合研究所が調査研究し、効果実感の高い市区町村の取組を分析している。当然、我々、今の校長は、その頃、教頭・教諭であったと考えられる。当時の行政説明など知る由もなく今に至っていると考える。したがって、学校評価の行政説明における、『効果実感の高い学校の取組』を理解し、今後の校長実践の一助になればよいと考え、本テーマを設定した。

(2) 行政説明と学校評価

この行政説明によれば、学校評価等実施状況調査の質問項目から効果に関する5項目（学力、生活態度、学校運営、保護者との連携、支援・改善措置の獲得）を成果・効果実感とし、1項目あたり2点として得点化している。さらに、それを自治体ごとに集計し、5項目で10点満点中平均6点以上の自治体を効果実感の高い学校の多い市区町村とし、6点以下を効果実感の中・低い学校の多い市区町村と分けて分析している。すなわち2つに分けて分析した場合、学校目標を共有するための工夫について差異が表れた項目があるのかどうかを分析して報告している。その分析によれば、効果実感の差異については、次に示す2点が重要だと提案している。この2点について、松江市校長会では昨年11月、今年の1月と学校評価に関する研修を位置づけて、その差異を紹介、情報交換を行い、実践等を



話し合った。



(3) 学校目標と具体的な子ども像

1点目が、『子ども像を具体的にイメージできる形で目標設定すること』であった。校長として3校目となるが、いずれの歴任校においても、「めざす子ども像」を子どもたちが言え、そしてわかりやすい言葉を用いて学校経営を行ってきた。現任校において、それに類似するめざす子ども像がわかりにくかったので着任早々変えた。始業式、終業式での話、全教室の掲示、体育館の前面掲示、昇降口での掲示、HPでの教育活動紹介の中での話の中に盛りこみながら浸透させていった。学校運営協議会でも、紹介して承認を得た。協議委員も「シンプルでわかりやすい。」と評価をいただいた。

(4) 個人目標と関連づけ

2点目が『個人目標と関連づけること』であった。鳥根県には自己評価システムがあり、自己目標評価シートが教職員に義務付けられている。この自己目標評価シートは雛形が鳥根県から示されているが、各校独自の項目を設けてよいことになっている。本校においては、学校教育目標や学級経営目標、学校評価項目という欄を追加して作成するようにした。中でも学校評価項目を入れたのは、教職員が学校評価を意識してほしいことと評価面接の中でなぜそれを選んだのかを聞くことによって、教職員の思いや考えを引き出せると思ったからである。1学期の面接において、全教職員と

様式 1-1 〔主科教員・教員・教員・講師〕 自己目標評価シート（学校経営室）

自己目標設定日：令和7年5月1日
所属：教員
学年：2年
担任：〇〇

学校経営目標	自己目標
1. 児童が主体的に学習することを目指す。 2. 児童が自ら学習することを目指す。 3. 児童が自ら学習することを目指す。 4. 児童が自ら学習することを目指す。 5. 児童が自ら学習することを目指す。 6. 児童が自ら学習することを目指す。 7. 児童が自ら学習することを目指す。 8. 児童が自ら学習することを目指す。 9. 児童が自ら学習することを目指す。 10. 児童が自ら学習することを目指す。	1. 児童が主体的に学習することを目指す。 2. 児童が自ら学習することを目指す。 3. 児童が自ら学習することを目指す。 4. 児童が自ら学習することを目指す。 5. 児童が自ら学習することを目指す。 6. 児童が自ら学習することを目指す。 7. 児童が自ら学習することを目指す。 8. 児童が自ら学習することを目指す。 9. 児童が自ら学習することを目指す。 10. 児童が自ら学習することを目指す。

面接を行い、作り上げた自己目標評価シート（上図）をもとに面接を行った。学校評価を選んだ理由を聞くとそれぞれの教職員には思いがあることが知れた。

3 校長の役割

- (1) 児童が具体的にイメージしやすい言葉で子ども像の目標設定を行い、常にPDCAを考え、あらゆる機会をとらえ児童に問い正していくこと。
- (2) なぜそのような目標設定が必要なのかを職員と共有する機会をもつこと。
- (3) 評価システムにおいて個人目標と学校評価（自己評価）を関連づけ、学級経営が学校経営とつながっていることを面談等で考えさせ、それを実行させていくこと。

4 おわりに

あたりまえのように常日頃から言われていることを今回の研究で、根拠を示しながら実践していくことの大切さを学んだ。現任校にあたっては、着任早々、「めざす子ども像」をある意味トップダウンで変えた。これは、調査結果データという根拠に裏打ちされた成果でもある。

課題として考えるのは、この「めざす子ども像」「評価システム」をなぜこういう形にしているのかの職員への理解・共有を効果的にする方法である。また、あえて子どもたちにも理解・共有していくことを課題として今後も研究を重ねていきたいと考える。



〈評価・改善：学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善〉

学校評価の実効性を高めるための工夫

～小中一貫教育の取組を通して～

提案者 広島県呉市立波多見小学校長 蒲原 尚博

1 はじめに

呉市は、広島県南西部に位置し、瀬戸内海に面した気候温和で自然に恵まれた臨海都市である。呉市立の学校は、小学校34校、中学校24校、義務教育学校1校、高等学校1校である。

呉市教育委員会は、小中一貫教育を基盤として、「未来を創る人材の育成」を目標に掲げ「つながり」を重視した教育を展開し、新しい時代に求められる資質・能力を育成する教育活動に取り組んでいる。また、中学校区で連携し、呉市が策定した「呉市教育振興基本計画」と連動した学校評価・業績評価の実現を目指している。

そこで、本中学校区（音戸小学校、波多見小学校、音戸中学校）では、学校評価において、各校の実態を踏まえて、統一した重点目標を設定し、本中学校区全ての教職員による組織的な取組を進めることで、学校評価の実効性を高めたいと考えている。

2 研究の概要

本提案は、呉市小学校長会の五つの部会（教育研究部・教育財政部・人事給与部・人権安全部・学校運営部）の一つである教育研究部において、「学校の教育力向上を図る学校経営の評価・改善」について、令和7・8年度に研究したものである。

(1) 呉市立波多見小学校の取組

① 本校の実態

ア 教職員は、学校経営環境分析書をもとに作成した学校評価と教職員自身が作成する

業績評価（自己申告）書の連動が、教育力の向上につながることの重要性を理解しつつも、それを意識して目標を設定し、具体的な教育活動につなげている教職員は少ない。

イ 本中学校区において、学力の向上を重点目標として、各校で様々な取組を推進してはいるものの、本中学校区全体として足並みをそろえた組織的な取組には至っていない。

ウ 学校経営目標の設定において、学校運営協議会の意見が十分に反映されておらず、次年度の学校経営目標の設定に生かされていない。

② 取組の実際

ア 学校評価と業績評価書の連動

・学校経営目標の達成に向け、教職員が学校評価と関連付けて業績評価書を作成できるよう、学校評価と連動させて作成した校長の業績評価書を教職員に開示し、目標や評価指標の共有を図った。

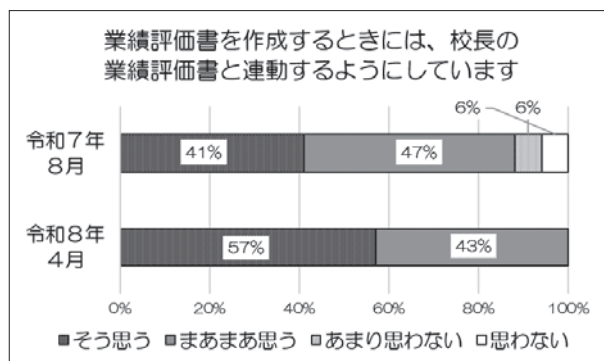


図1【校長の業績評価書と連動（小中合同アンケート）】



できる・教職員一人一人が、取組の成果を実感よう、できる限り数値目標を設定させ、次年度への取組の意欲が高まるようにした。

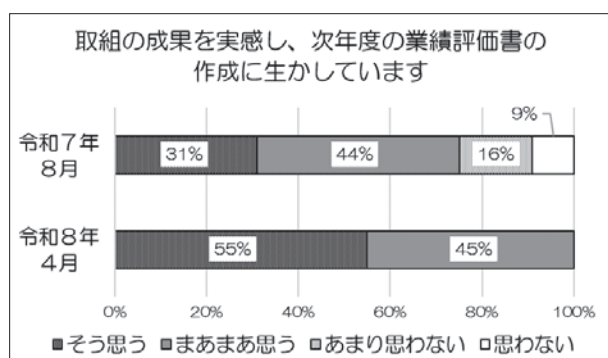


図2【取組の成果を実感（小中合同アンケート）】

イ 本中学校区での組織的な取組

- ・昨年度末の本中学校区校長会において、次年度に取り組む重点目標（学力の向上）を設定した。
- ・本中学校区推進委員会において、校長のリーダーシップのもと、重点目標に対する指標について協議した。その中で、各校の実態に応じて数値目標を決定し、取組を進めることにした。
- ・本中学校区の授業研究会において、学力の向上に向けた個に応じた指導の手立てとその有効性について、具体的に協議・検討する場を設定し、指導方法の共有を図った。

ウ 学校経営目標の設定において、学校運営協議会の意見を反映

- ・昨年度2月、本中学校区での取組と成果を本校の学校運営協議会で説明し、取組に対する意見を求めた。



【波多見小学校運営協議会（令和8年2月）】

- ・学校運営協議会では、学力の向上に関わる本中学校区としての取組に対し、一定の評価が得られ、取組の継続性を求められた。
- ・学校運営協議会での学校評価の指標に関する意見をもとに、本年度の学校評価の指標設定に反映させた。

3 校長の役割

小中一貫教育の取組を通して、学校評価の実効性を高めるには、以下の点が重要であると考える。

- (1) 学校評価に関わる取組と評価において、学校評価と教職員自身が作成する業績評価書を連動させることで、学校評価の達成に向けた教職員の意識を高め、取り組む内容を明確にする。
- (2) 中学校区における学校評価を組織的に推進するため、校長同士が学校経営方針や重点目標を共有し、本中学校区推進委員会等で具体的な指標や取組を協議することで、教職員が主体的に学校改善に取り組める体制を構築する。
- (3) 年度末の教育反省や教職員一人一人の業績評価書における自己評価等、各種の評価を関連付けることで、学校経営目標に基づく取組の一貫性を教職員に意識させる。

4 おわりに

今回の研究を通して、本中学校区の教職員が課題と目標を共有したことにより、授業研究会において、積極的かつ建設的な意見交換が行われるようになったことは、本研究の成果の一つであると捉えている。

また、本中学校区推進委員会において重点目標の指標を協議する中で、各校の生徒指導上の課題や児童生徒の成長の様子が共有され、教職員間の同僚性が高まりつつある。小中一貫教育において異校種が連携して取り組むことの意義を、改めて認識することができた。



〈知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント〉

ふるさとを誇りに自らと未来を切り拓く児童の育成

～ふるさと奥出雲の本物、たたら体験学習を通した取組～

提案者 島根県奥出雲町立横田小学校長 千 原 一 弘

1 はじめに

奥出雲町は、古来より「たたら製鉄」で栄えた地であり、今なおその伝統が息づいている。(たたらとは、粘土で作った炉の中に砂鉄と木炭を入れて、日本刀の原料となる純度の高い鉄を生み出す日本古来の製鉄法である。)

このたたらから派生した棚田文化は昨年中国地方初の「世界農業遺産」に認定された。最高峰の「仁多米」、味わい豊かな「仁多牛」、伝統の「奥出雲そば」などのブランド農産物、全国一の生産量を誇る雲州そろばんなど、この地には全国に誇れる「本物」が揃っている。

現在、本町は大きな転換期にある。少子化の波を受け、11校あった小学校は2校へと再編・統合された。しかし、学校の姿が変わろうとも、子どもたちが郷土の歴史と文化に誇りをもち、自ら未来を切り拓く力を育む教育の重要性は変わらないと考える。

(2) 仁多郡小学校長会の取組

仁多郡小学校長会が主催する「たたら体験学習」は、6年生がふるさと学習の集大成として取り組む学習である。この取組は、鉄を生み出すプロセスに子どもたちが主体的に「関わる」、人に「伝える」、本物体験の感動を「表現する」の3つのテーマをもって学習する、全国でも類を見ない実践である。今年で22年を迎える。



2 研究の概要

(1) 知性・創造性の育成の捉え

仁多郡小学校長会は、知性・創造性の育成について以下のように考えた。

児童の知性・創造性は、学校内外の人的・物的資源を最大限に活用した家庭や地域社会との連携及び協働による教育課程の系統的な実践により育成される。五感をフル活用した様々な体験や子どもの興味関心を引き出す奥出雲町のひと・もの・ことと出会えば、子どもが主体的に学習し、達成感を味わえる。その機会を校長会が中心になってサポートする。

【たたら体験学習の流れ】

- ◆^{むらげ}村下と校長会担当の打ち合わせ (6月)
- ◆第1回たたら体験学習実行委員会 (8月)
- ◆各校事前学習 (10月) ※講師の紹介
- ◆第2回たたら体験学習実行委員会 (10月)
- ◆^{むらげ}村下と校長会担当の最終打ち合わせ(11月)
- ◆管理職による前日準備 (11月)
- ◆^{むらげ}炉づくり、炭切り、鉄穴流し体験 (11月)
- ◆本操業体験 (11月)
- ◆各校振り返りとまとめ (発表) (12・1月)
- ◆取組と成果物^{けら}(鋳)の巡回展 (12・1月)
- ◆振り返りと次年度へ向けた計画(12～2月)



① 持続可能な運営への工夫と変革

開始当初と比べ、児童数は大幅に減少している。しかし、校長会では「人数が減ったから規模を縮小する」のではなく、「今の子どもたちに最適な形は何か」を問い続けてきた。小学校統合が進む中で、奥出雲町教育委員会との連携を強め、運営体制を柔軟に見直してきた。

具体的には、村下^{むらげ}にインタビューする時間を別日に設けずに本操業内に行う（時数管理）、ふいご作業を人力だけでなく機械の力を借りて行う（負担軽減）、児童がゆっくり昼食を食べられるように大人が作業する時間を作る（役割代行）、学生ボランティアの人的支援を得るなど、時代のニーズに合わせた工夫を凝らしている。

② 管理職による「背中」で見せる事前準備

本活動の特筆すべき点は、校長をはじめとする管理職が、運営の「黒子」として徹底的に汗を流すことにある。実施前日、管理職は率先して作業着に身を包む。粘土を練り、炉を築くための準備をし、燃料となる木炭^{したばい}の管理、更には下灰^{むらげ}づくりまでを村下^{むらげ}や村下候補生、町職員の力を借りて管理職自らの手で行う。また、砂鉄採取を疑似体験する「鉄穴^{かん}流し」用の溝掃除など、冷たい斐伊川の中で行う作業も厭わない。

これらは単なる設営作業ではない。村下との綿密な打ち合わせを重ね、プロの技と想いを直接受け止めるプロセスである。校長自らが「本物」に真摯に向き合う姿勢を示すことは、教職員への強力なメッセージとなり、組織全体の連帯感を高める源泉となっている。

夏季休業中には、奥出雲町教育委員会とタイアップして教職員向けのふるさと理解研修を校長会が開催している。ここでもたたらについて研究を深める場を提供している。

③ 体験から表現へ、学びの深化

私たちの目指すゴールは、鉄を出して終わることではない。各校で探究学習をすすめる、2日間をかけた本物体験、たたらの本

操業を経て、真っ赤に溶けた「鉾^{けら}」が現れる瞬間の感動を、いかに自分自身の言葉や表現に昇華させるかを重視している。

体験後、子どもたちは作文、絵画、あるいはデジタルツールを用いた発表資料など、多様な方法でアウトプットを行う。地域の方々や村下^{むらげ}から学んだ「粘り強さ」や「共同作業の尊さ」を振り返ることで、体験は「知識」から「生きる態度」へと変わる。奥出雲の「本物」に触れた感動を、自らの力に変えて表現するところまでを学習のサイクルとして確立している。

3 校長の役割

(1) 教職員と共に課題を深掘りし、ビジョンを描き、リーダーシップをとる

「なぜ今、たたら学習なのか」という目的を共有した。単なる年中行事にさせず、学校経営の柱として位置づけた。

(2) 子どもへは夢をもつことの大切さを語り、本物との出会いを仕組む

地域に眠る「本物」との出会いを意図的に仕組んだ。本物にふれる感動こそが、知的好奇心の原動力となる。そのために校長自ら作業に汗をかく。

(3) 情報発信と広報活動

学校の取組を地域や外部へ可視化することで、教育活動への理解と協力を得るとともに、子どもたちの誇りを醸成する後押しをした。

4 おわりに

小学校統合は奥出雲の教育を再確認する好機である。たたら製鉄と農業遺産の価値を学んだ子どもたちが、今後、「ジュニアガイド」として奥出雲町の魅力を発信したり、町政へ提言したりする地域の担い手へと成長するよう願っている。20年繋いできた本学習の灯を絶やすことなく、校長会は、今後も地域と手を携え、たたらを起源とした世界農業遺産の恩恵を次世代へ繋ぐ架け橋として、奥出雲ならではの教育を創造していきたい。



〈知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント〉

「主体的に学ぶ子どもの育成」に向けた 教育活動の活性化と校長の役割

提案者 広島県広島市立五月が丘小学校長 中 澤 真 子

1 はじめに

「広島市教育大綱」(令和8年3月改定)では、本市の目指す教育の方向性として、身に付けるべき5つの資質・能力が示されている。各学校は、一人一人に資質・能力の基礎・基本を確実に身に付けさせるとともに、一人一人の個性・特性を尊重し、そのよさを最大限に生かしながら、一人一人が大切にされる教育を推進し、心身共にたくましく思いやりのある子どもを育成することが求められている。本校は、広島市西部に位置し、児童数514名の学校である。着任当初、教職員の指導に統一感がなく、児童が落ち着いて学ぶことが難しい状況にあった。本市の目指す教育の方向性を踏まえ、「主体的に学ぶ子どもの育成」を学校教育の中核に据え、授業、生徒指導、学校行事、委員会活動を相互に関連付けながら、教育活動全体を見直すカリキュラム・マネジメントを推進する必要がある、知性（考える力）と創造性（工夫し表現する力）を育む学校づくりを進めることが、本校の喫緊の課題であると考えた。

2 研究の概要

教職員が教育目標を共有し、児童の学びを中心に据えた教育活動を組織的に推進する体制づくりに取り組んだ。

(1) 研究内容

- ① 児童の実態を的確に把握し、個に応じた支援を行うことで、主体的な学習参加を促す。
- ② 算数科を研究教科とし、授業改善を通して思考力を育成する。

- ③ 学校全体で統一した生徒指導を行い、児童が安心して学べる環境を整える。

(2) 研究の実際

① 主体的な学習参加を促す取組

・児童の実態把握

全国学力・学習状況調査の結果では、平均正答率が国語61%、算数59%と市の平均を下回り、無解答率が高いもので25%に達していた。また、困難に直面すると、すぐにあきらめたり、投げ出したりする姿が見られた。

・インクルーシブ教育の実践

専任の特別支援教育コーディネーターが授業観察を行い、児童の実態把握と支援の在り方について指導助言を行った。有効であった支援は「インクルダより」に掲載し、全教職員で共有した。

・学校行事における目標の明確化と共有

児童が目的意識をもって活動に取り組めるよう、行事ごとに目標を明確に示し、振り返りを通して成長を実感できるようにした。

・委員会活動における児童主体の活動の実施

児童が自ら考え、企画・運営する場面を設定し、主体性や協働性を育む活動を推進した。

② 思考力を育成するための取組

・教職員組織の実態把握

教職員の指導方法に統一性がなく、校内研修も形骸化しており、教職員の間には研修に対する抵抗感が見られた。学校全体で学び続ける基盤を整える必要があった。

・算数科の授業の型と板書を全校で統一

・研修会の在り方の工夫



研修への抵抗感を軽減するため理論と実技を組み合わせた研修を計画し、「学ぶことは楽しい」という教職員文化の再構築を目指した。

【研修内容】

- 市教委各課の指導主事による継続的な助言
- レクリエーション、図画工作科実技、介護福祉専門学校教員による講話など、多様な研修の実施
- 学年ブロック研修による児童理解、支援策の検討、振り返りの継続
- ③ 児童が安心して学べる環境づくり
 - ・教室環境整備の継続
 - ・生活目標の提示方法の工夫
 - ・学校生活のきまりの見直しと改善

(3) 研究の成果と課題

【成果：児童】

- ・個別支援の工夫が学級全体にも広がり、粘り強く学習に取り組む児童が増加した。
- ・学校行事を通して自分の成長を実感し、自己有用感が高まった。
- ・校内を徘徊する児童が減少し、教室が安心して学べる場となった。知性（考える力）と創造性（挑戦し、工夫する力）を育む基盤が形成されつつある。
- ・全国学力・学習状況調査の結果では、平均正答率がわずかではあるが市の平均を上回り、無解答率も改善した。

【成果：教員】

- ・研修への抵抗感が薄れ、主体的に学ぼうとする姿勢が見られるようになった。
- ・多様な研修が教員の学ぶ意欲を高めた。
- ・教員同士が認め合い、学び合う文化が育ち始めた。
- ・授業の型や板書を統一したことで、若手教員が児童の反応を見取りながら授業を展開できるようになった。
- ・困り感のある児童への支援について、学年ブロックや専任の特別支援教育コーディネーター

に相談し組織的に対応する意識が高まった。

- ・各部長や学年主任が自分の役割を自覚し、改善策を主体的に提案するなど、学校全体で改善サイクルが機能し始めた。

【課題】

- ・学力が低位の児童への個別支援の充実
- ・授業改善の継続
- ・教職員が共通の方向性で取り組むことの大切さを伝え続けること

3 校長の役割

- ・ビジョンの明確化と共有

「子どもが主役」という理念のもと、「何のために取り組むのか」を一貫して発信し続け、教職員と目指す方向性を共有する。また、「主体的に学ぶ子ども」「知性創造性を育む学び」の実現に向け、教育活動全体をつなぐカリキュラム・マネジメントを推進する。

- ・研修文化の再構築

講師による研修だけでなく、日々の実践や同僚、教材などあらゆる場面を「学びの機会」と捉え、学び続ける教職員集団を育成する。

- ・相互承認の文化づくり

児童と教員のかかわりを日常的に見取り、優れた実践を適切なタイミングで評価・共有することで、教職員が互いに認め合い、高め合う組織文化を醸成する。

4 おわりに

校長が教育ビジョンを明確に示し、教職員が共通の方向性で協働しながら教育活動を改善していくことが、児童の主体的な学びにつながると考える。今後も知性と創造性を育む学校づくりを通して、一人一人の可能性を最大限に引き出す教育活動を推進していきたい。



〈豊かな人間性：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント〉

心理的安全性が育む「豊かな人間性」の土壌づくり

～ SWPBS を基盤とした学校風土の変革～

提案者 広島県神石高原町立油木小学校長 六 原 三 枝

1 はじめに

現代の児童を取り巻く社会環境は、物質的・情報的にはこれ以上ないほど豊かになった。反面、精神的なゆとりや安心感を見出すことが難しくなっている。コロナ禍を経てリアルな交流機会の減少もあり、他者とのコミュニケーションに対する精神的な不安、「不登校」「自己肯定感の低下」等を抱える児童は増加傾向にある。学校において、児童が安心して自分を表現し、自分を取り巻く他者との信頼関係を築くことは急務である。しかし、「威圧的な指導」では、かえって児童の反発心や萎縮を招き、豊かな人間性を育む基盤となる信頼関係を築くことはできない。本発表では、児童の実態を踏まえた本校の取組、さらにはその成果が神石高原町全体へと波及していったプロセスを報告する。

2 研究の概要

(1) 児童の実態と課題

本校は全校児童42名、今年度から完全複式学級となり、特別支援学級を含めて5学級の小規模校である。本校の位置する神石高原町は、広島県の東部に位置し、自然豊かな高原の町である。児童は豊かな自然に囲まれ、穏やかで静かな環境の中で日々を過ごしている。児童は、素直で人懐っこく、学年を超えた縦・横のつながりも良好である。しかし、その一方で他者への依存心が強く、「周囲の意見に流されやすい」「主体的に考えて行動することが苦手」という課題も見られる。

(2) 取組の経緯

① 令和5年度（導入・土台づくり）

少人数ながら児童間のトラブルや学習への参加に課題を抱える児童がおり、必ずしも落ち着いた状況とは言えなかった。児童の不適切な言動に対して厳しく指導をするが効果は一時的で、時間が経てば問題が再発し、指導に苦慮していた。そこで広島県教育委員会の「特別支援教育の考え方を生かした個別最適な学び推進プロジェクト」の指定をいただき、「学校全体で取り組むポジティブな行動支援（School-Wide Positive Behavior Support）」を学校経営の土台として導入した。児童の困難さを理解し、特別支援教育の視点を取り入れた授業改善に努めるとともに、望ましい児童の姿を児童の言葉でループリック化するなど、指導の在り方を見直した。

② 令和6年度（個への焦点化と価値づけ）

授業改善では「個」に焦点を当て、対象児童の目指すべき姿（目標）を設定し、必要な具体的支援や手立て、評価の方法・価値づけを「分析シート」に整理し授業研修を重ねた。学校全体の取組として「あいさつ」「ふわふわ言葉」等のキャンペーンを教職員主導で行い、望ましい行動の意識化と価値づけに取り組んだ。

③ 令和7年度（授業の工夫と継続）

全児童を対象として、インプットとアウトプットのバランスを重視し、「わかった」「できた」を実感できる授業づくりへと工夫・改善を進めた。全校キャンペーンも継続した。

(3) 本年度の実践（令和8年度）

① ラーンユニットを意識した授業づくり

研究主題である「インプット・アウトプッ



ト・フィードバック」を推進し、中でもタイムリーかつ細やかなフィードバックを意識することで児童の学習意欲の向上と間違えても安心な教室環境（心理的安全性）の構築に努めている。

② 児童主体のキャンペーンへの発展

一昨年度までは、教職員主導で発信していたキャンペーンであったが、昨年度から児童自らが「〇〇キャンペーンをしよう」と発信し、児童主導の取組になった。児童目線での気付きが活動の原動力となることで、当事者意識が高まっている。

③ SWPBSの日常化

日常のあらゆる場面で、児童の素晴らしい姿や望ましい言動に対して、瞬時に肯定的フィードバックをすることが、教職員にとって「当たり前の行動」となってきた。同時に児童相互間でも互いの良さに気付き、認め合う姿が見られるようになっていく。

(4) 神石高原町全体への広がり

① 校長間の情報共有と校種間連携

町内には小学校5校、中学校2校がある。毎月の定例校長会における情報交流の中で、本校のSWPBSの実践例や成果等について発信してきた。本校の前任校長が異動された三和中学校でも昨年度からSWPBSを導入され、昨年度末には小中合同研修会も開催した。教育委員会や他校の教職員も数十名参加したこの研修会では、山口大学の宮本秀雄准教授にご講演いただき、SWPBSの具体像を共有した。

② 全町一斉研修としての位置づけと取組

SWPBSの考え方と手法は本町の児童生徒の実態に合った取組であり、教職員の児童生徒に対する適切なアプローチの在り方に必要な要素がたくさん盛り込まれているという判断から、町教育委員会が主となり全町展開への指針が示された。そして、本年度、全町一斉研修として位置づけられた。5月に実施された第1回目の研修（宮本秀雄准教授による理論研修）後の教職員アンケートでは、参加者の肯定的回答が100%

という結果であった。町全体での取組となったことで、全小中学校が共通理念のもとで児童生徒の指導にあたる大きな一歩を踏み出した。

3 校長の役割

(1) ビジョンの継承・発信と校長間の連携

令和5年度にSWPBSの種を蒔き、土台を築いてくださった前任校長の軌跡を継承し、学校経営の基盤に据え続けることが徐々に成果として児童の姿に表れ始めている。そして、そのことを町校長会等の場で情報発信し続けたことが、町全体への展開へと繋がった。引き続き、校長間の連携を密にすることで町全体の豊かな心を育む教育の土壌づくりが強固になればと思う。

(2) 教職員へのポジティブなフィードバック

授業や行事、活動等での動き、児童への対応等、様々な場面での教職員のよい姿や言動、努力の過程に対し、できるだけタイムリーに肯定的評価をするよう心がけている。教職員が自己肯定感を高め、心のゆとりや安心感をもつことが児童への肯定的な見方や関わりに繋がると実感している。

4 おわりに

SWPBSの取組は、特効薬のように短期間ですぐに成果が表れるものではない。また、個人の熱量だけに頼る取組では持続しない。組織として共通認識をもち、教職員が一枚岩となって継続して取り組んで初めて児童の姿にしなやかな変容が見られるようになり、じわりじわりと学校風土へと変わっていく。学校現場は毎年教職員の異動があり、毎年が「一からのスタート」である。だからこそ、「学校が楽しい！」「先生や友達は自分のよさを分かってくれる」と全ての児童が安心して自己を表現できる学校の実現に向け、町内の学校関係機関のネットワークを生かしながら地道に取組を積み重ねていきたい。



〈健やかな体：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント〉

運動に親しむ子どもの育成 ～体力向上取組の充実をめざして～

提案者 岡山県玉野市立築港小学校長 片 山 昇

1 はじめに

毎夏、最高気温が40度を超える状況が、当たり前のようにになっている。その影響で、子どもたちは、外遊びはもちろん、水泳の授業も満足にできない状況が続いており、6月下旬から10月上旬の約3か月は、十分に体を動かすことが難しい。そこで、この期間以外に運動に親しむ子どもを育成する取組はとても重要であると考え。一方で、多忙な学校現場において新たな取組を次々と導入することは、継続性の面から望ましい方法とは言えない。校長の役割とは、学校業務をその目的と照らし合わせながら整理し、より効果的かつ効果的に実施できるよう調整することである。また、校外の有効な取組を調査し、それらを校内外に紹介・共有しながら、有効活用していくことも重要であると考え、本研究を進めた。

2 研究の概要

(1) 研究の方針

一点目は各校で行われている取組を、互いに参考にしながら、より効果的なものへ改善していくことである。体力づくりについては、玉野市内13校の小学校で類似した取組が行われているが、他校の実践が参考になる場面も多い。

二点目は、現在取り組んでいる活動を生かしながら、実施の目的や子どもの実態に応じて改善を図り、子どもの主体性をさらに引き出しつつ、継続的に取り組めるよう工夫することである。

(2) 実践内容

① 玉野市校長研修会における実践の共有

各校で行われている取組を一覧化し、それぞれの良さや工夫点を紹介し合い、情報共有を行った。そうすることで、各校では、自校内の取組との重複や関連性、他校の実践例や実施時期を知ることができ、改善にも役立った。

さらに、市内各校が同じ方向性で進められるよう、毎月の校長研修会において、後述する県の事業への参加を呼びかけた。

② 岡山県教育庁保健体育課事業の活用

玉野市の小学校は現在、その多くが小規模校であり、多くの仲間と競うという経験が少ない。県保健体育課の事業には「みんなでチャレンジランキング」があり、インターネット上で県内他校の子どもと競うことができるため、運動に親しむきっかけづくりとなっている。

(3) 各小学校の取組

① 日比小学校の取組

令和7年度、冬季の体育的活動について、校長会で得た他校の取組を参考にしながら、体育主任と相談し改善を図った。具体的には、なわとびの取組において、子どもの意欲が期間中持続するよう、山田小学校の「なわとびだんご」の取組を取り入れた。

また、業間休みの持久走では、「玉野市一周マラソン」のカードに変更し、子どもが楽しみながらゴールを目指せるよう工夫した。

さらに、県事業である「みんなでチャレンジランキング」を積極的に活用するよう



校内に働きかけ、「8の字跳び」「クラス早回し短縄リレー」等にエントリーし、子どもたちがより意欲的に活動できるようにした。

その結果、実施前後のアンケートでは、「走ることが好き」が8ポイント、「(ランニングで) しんどくても、最後まであきらめずに頑張りたい」が5ポイント、「進んで外遊びや運動をしている」が4ポイント、それぞれ肯定的回答として上昇した。

② 山田小学校の取組

山田小学校では、3学期に体力づくりの一環として、「なわとびだんご」の取組とともに、業間休みに持久走を実施している。その集大成として、一般道や農道をコースの一部としたマラソン大会を開催している。当日は地域住民や保護者が安全確保を担い、同校の特色ある行事の一つとなっている。

マラソン大会という目標があることで、子どもたちは業間の持久走にも意欲的に取り組んでいる。



③ 大崎小学校、八浜小学校の取組

両校では、中学校区内にある県立玉野光南高校体育科との交流を行っている。6年生を対象に、5月にはミニ運動会、10月には陸上教室を実施している。高校生は、専門的な技術だけでなく、運動の楽しさについても交流を通じて伝えている。また、自分の夢や目標について考える機会を設けている。行事運営は高校生が主体となって行っており、子どもたちは高校生への憧れをもち、練習にも熱心に取り組んでいる。



④ 第二日比小学校の取組

「大谷選手グローブ」の設置場所を使い

やすい場所に変更し、さらにキャッチボール専用スペースを設けたところ、活用が増加した。これまで運動場に出ていなかった子どもたちも外に出るようになった。また、「みんなでチャレンジランキング」につながるものについては可能な限りエントリーを行った。

3 校長の役割

学校現場は日々多忙であり、行事が前年踏襲で実施されたり、十分な振り返りができないまま、次の行事に移ったりすることもある。そのような中で、校長の役割は、校内全体や、担当者に働きかけながら、取組の必要性を共有し、より効果的で持続可能な取組へと改善していくことであると考えます。また、アンケート等を実施し、取組の効果を客観的に把握・検証することも重要である。さらに、1校のみの取組に終わらせず、校長研修会等を通して広く共有・発信していくことも大切である。

4 おわりに

本報告では猛暑期間以外の取組を中心に述べてきたが、猛暑期間における体力づくりも継続して取り組むべき課題である。

子どもたちが社会へ出る頃には、健康管理や運動習慣づくりにおいても、ICT 機器やアプリ等を活用することがより一般的になっていると考えられるが、運動への「やる気」を引き出し、楽しさや充実感を味わわせることの重要性は変わらない。今後は、これまでの取組を基盤としながら、アプリ等の ICT も効果的に活用し、子どもたちの意欲を高めることができる、より幅の広い取組を進めていく必要があると考える。人生 100 年時代において、生涯にわたり健康で過ごすために、体力がその土台となる。子どもたちが、自らの健康を自ら守り、維持していけるよう、今後も取組を進めていきたい。



〈研究・研修：学校の教育力向上を図る研究・研修の推進〉

下関市全小学校の実践に基づく実証的考察

～校長のリーダーシップを核とした「学び合う組織」の実現を目指して～

提案者 山口県下関市立小串小学校長 中野達史

1 はじめに



【出典：Map-It の地図を加工して作成】

下関市は、山口県の西部に位置し、関門海峡を挟んで九州（福岡県北九州市）と接しているため、経済や交通の要所としての役割を担っている。県内「面積第3位」という広大な市域の大部分を、2005年の合併前まで独立した町であった豊浦・豊北・豊田・菊川の4町が占めており、下関市の経済に農業・林業・広域観光という広がりをもたらしている。

さらに、下関市は、日本の歴史を動かした数々の出来事の舞台となり、豊かで特色ある文化が育まれている。

人口は、かつては30万人を超えていたが、全国的な傾向と同様に現在は減少傾向にある。とはいえ、令和8年4月末日現在、人口は238,160人で、県内第1位を誇り、41の小学校が設置されている。

本研究では、このような特徴ある地域性の上に展開している下関市全41校の「研究・研修」に関わる実践を紹介し合う中から現状分析を行い、学校に必要な「研究・研修」の方向性を協議し深めるとともに、「校長の果たすべき役割と指導性」を探っていくこととする。

2 研究の概要

(1) 研究体制づくりと実践の共有（1年次）

① 各学校の特色ある研究・研修の共有

ア 各校の取組の紹介

イ 参考にすべき実践についての協議

(2) 趣旨文に基づく研究の推進（2年次）

① 研究イメージの共有

ア 趣旨文で用いられている「知識基盤社会」、「現代的な課題」等の言葉の定義及び文の解釈、趣旨文に基づく研究方針の決定

② 趣旨文に沿った各校による実践報告と現状分析

ア 趣旨文に書かれた四つのテーマの確認

・現代的な課題を踏まえた研究・研修

・教職員個人の成長意識を高める研究・研修

・教職員が協働して行う組織的・計画的な研究・研修

・校長自らが率先して行う研究・研修

イ 四つのテーマにおける各校の実践紹介と成功事例の選定

③ 成功事例から分かる要諦と課題の抽出

ア 成功事例を貫く三つの要素

・「地域連携」と「異校種連携」の戦略的活用

・「自分事」と捉えるための仕掛けづくり

・校長のビジョンとマネジメント

イ 「研究・研修」推進における三つの課題

・過負荷の懸念と持続可能性の確保

・全教職員への意識共有と参画の促進

・成果の可視化と評価方法の確立

④ 校長の果たすべき役割と指導性に関する提言の検討

⑤ 下関市における教育力向上のための研



究・研修に関するレポートづくり

- ア 生成 AI やアプリ機能の研修とその学びを生かして行うレポート作成



【「研究・研修」レポート（下関市小学校長会 R8.3 作成）】

- ⑥ レポート内容に基づく、「研究・研修マネジメント自己評価シート」の作成

- ア 自己評価シートの提案、検証・修正
イ 研修成果のフィードバック

校長のための研究・研修マネジメント自己評価シート
() 小学校 記入日:

下関市における教育力向上に関するレポート準備
この自己評価シートは、学校/学年単位で作成したレポート「下関市全小中学校の実践に基づく実証的考察—校長のリーダーシップを促す『学びぬる組織』の発展を目指して—」で示された実践、推進活動、および評価に基づき、校長が自校の研究・研修の進捗状況を客観的に振り返るためのものである。

評価基準
以下の評価基準を参考に、それぞれの評価項目について、自身の学校の現状に最も近いものを選択してください。

評価	意味
4	完全に実施できており、組織文化として定着している
3	おおむね実施できており、計画的に推進されている
2	部分的に実施されており、推進に課題がある
1	ほとんど実施できておらず、取組が必要である

1. 「現代的な課題」に取り組む際の要点
(テーマの選定、レポート1章・2章の参照)

評価	評価項目	評価の観点
1	1. 地域・異校種連携の戦略的活用：地域連携や異校種連携を、教職員のキャリアアップ・開発能力を高める場として捉える。	レポート (O)X (X)O (O)X (X)O
2	2. 教育課程への統合：「地域学習」などの特色あるプログラムを、学校として教育課程に位置づけることにより、持続可能性を確保する。	実践の要 (O)X (X)O (O)X (X)O
3	3. 「協働」の目的の明確化：「協働は目的ではなく手段である」という認識や児童の指導に当たる。	実践の要 (O)X (X)O (O)X (X)O
4	4. 指導の視点と児童の意欲の向上：教職員としての指導の視点に加え、児童自身が積極的に取り組むたいと思える気持ちを大切にすること。	実践の要 (O)X (X)O (O)X (X)O
5	5. 探究学習の推進支援：児童の思考や意欲を刺激できるよう、時間の確保を行うとともに、手段や方法等について教職員の学びの機会を確保する。	実践の要 (O)X (X)O (O)X (X)O



【「研究・研修」自己評価シート（下関市小学校長会 R8.3 作成）】

3 校長の役割

- (1) 地域・異校種連携システムの深化

個々の学校の努力に依存する現在の連携モデルから脱却し、予測可能で拡張性のある連携システムを構築するとともに、教育資源の活用効率を向上させる。

- ① 共同研究の提案

- ② 地域人材データベースの整備の提案

- (2) 教職員の主体性を引き出すボトムアップ型研修文化の醸成

教職員一人ひとりがもつ潜在能力を最大限に引き出し、自律的な学びの文化を全学的に醸成する。

- ① 「ミニ研修会」の奨励と支援

- ② 「自分事」を促す個人研究の導入

- ③ 実践共有の定例化

- (3) 校長のリーダーシップ開発と支援体制の強化

研究・研修を推進する上での校長の戦略的リーダーシップを組織として支援・強化する体制づくりを行う。

- ① 校長会における情報共有の強化

- ② マネジメント研修の実施

- ③ 複数年度にわたる研修計画の策定

4 おわりに

本研究で分析した下関市の小学校における「研究・研修」の実践を通して、各校の教職員が日々教育課題に真摯に向き合い、創造的に取り組んでいる姿を改めて実感した。そこには、個別の成功事例にとどまらず、市全体の教育力をさらに高めるための多くの知見が蓄積されている。

校長としては、本研究で明らかになった成果や課題を踏まえ、自校における「研究・研修」の在り方を見直すとともに、「地域・異校種連携の強化」「教職員の主体性の尊重」、そして何より「校長のリーダーシップによるマネジメント」を学校組織の中に着実に定着させていく必要がある。

本研究における提言が、個々の学校という「点」の実践を起点として、「線」「面」へと広がり、下関市全体の教育の一層の充実につながることを期待したい。その結果として、すべての児童に質の高い学びが保障され、児童の笑顔の実現へと結実することを強く願う。



〈研究・研修：学校の教育力向上を図る研究・研修の推進〉

研修・研究を学校の力に変える

～ビジョンを体現する『組織的実装』の実際～

提案者 広島県庄原市立総領小学校長 川 原 陽 子

1 はじめに

庄原市は、広島県の約15%を占める県内最大の面積（西日本最大級）。市域の84%が森林であり、帝釈峡や比婆牛などの恵みを有する「日本の原風景」が広がる地域である。

・小規模校と複式学級の増加

庄原市内小学校13校のうち5校が複式学級を有する小規模校である。少子化に伴う児童数の減少により、将来的には複式・少人数学級の割合がさらに高まると予測されている。

・学校経営の方向性

庄原市の教育理念は「ふるさとの学びを原動力として高い志を持ち続け活躍できる人材の育成」である。令和8年3月策定の「第3期庄原市教育振興基本計画」に基づき、各学校は、変化の激しい社会を生き抜くため主体的に学び続け、他者と協働する「質の高い深い学び」の実現を目指し教育活動の充実を図っている。あわせて、ふるさとへの愛着や誇りを育み、健康で活力のある態度を養う実践を展開している。

2 「学校の教育力」の定義

・研究の意図

庄原市小学校長会におけるアンケート調査や実践交流を基に、研究課題「学校の教育力を向上させる研究・研修の推進のための校長の役割」に対する事例を集約して発信することをねらいとしている。

・「学校の教育力」の定義

学校の教育力とは…教育目標の実現に向

け、教職員が協働して教育活動を計画・実践・改善し、児童一人一人の学びと成長を継続的に保障する組織的・総合的な力とする。（学校の教育力とは、教職員個々の授業力の総和にとどまらない。それは生徒指導や学級経営を包含した「組織力」であり、永続的に継承されるべき「学校文化」そのものである。）

3 校長が果たすべき「5つの指標」

教育力を高めるために、私たち校長はどのような役割を果たすべきか。庄原市小学校長会では、アンケートにより校長が果たすべき役割を調査したうえで、各校の回答を基に、5つの指標に分類した。

指標Ⅰ：学校の教育目標・育てたい資質能力を明確化する役割 【重点】

指標Ⅱ：指導観・評価観の共通理解を促進する役割

指標Ⅲ：児童を「みんなで支える」組織体制を構築する役割 【重点】

指標Ⅳ：教職員が学び合う関係性を形成する役割

指標Ⅴ：チーム学校として地域や関係機関の力を結び付ける役割

さらに、5つの指標のうち特に注力している実践についてアンケートを行ったところ、特に指標Ⅰ及び指標Ⅲへの意識が高く、この2点に絞って庄原市小学校長研修会で実践交流を行った。この実践交流の内容を「3つの実装」（研修等の成果を具体的な仕組みとして定着させるプロセス）としてまとめた。



児童をみんなで支える取組(庄原市小学校長会)



4 研修・研究を力に変える「3つの実装」

(1) 実装①

学校経営の「方向性」を示す(指標Ⅰへのアプローチ)

学校の「縦軸(歴史・職員室文化・校内研究の蓄積)」と「横軸(多様な日々の教育活動)」を連動させ、目指す子供像へのベクトルを一致させる。

- ・縦軸の継承：過去の職員室文化である財産を意図的に引き継ぎ、発展させる。
- ・横軸の統合：行事や日々の経営を切り離さず、研究・目標達成への繋がりとして意味付ける。
- ・段階的翻訳プロセス：「校長による目標設定」→「研修での資質・能力への落とし込み」→「分掌ごとの行動レベル・評価指標への翻訳」という組織的プロセスを循環させる。それをステークホルダーと共有することを促す。

(2) 実装②

教職員の「安心」を支える(指標Ⅲへのアプローチ)

若手教員の増加や専門性の多様化に伴い、抱え込みを防止する「助けを求めることが当たり前」な仕組み(システム)を構築する。

- ・児童実態交流の定例化、充実：暮会(放課後の情報共有)等を活用し、全教職員で短時間の情報共有・見守り体制を確立。「一人で抱え込む」ことなく、組織で多面的に児童を観ることによって、支援や指導がスムーズにいくだけでなく、相談しやすくする。
- ・組織的なサポート：特別支援教育コーディネ

ネーターを窓口に校内委員会や保護者・関係機関との定例・日常的な情報共有を徹底し、連携を強化する。各種支援記録簿を全関係者で毎週確認して形骸化を防ぎ、児童の成長記録として組織的な支援に活用する。

(3) 実装③

組織の「熱量」を高める(安心と方向性を基盤とした展開)

安心と方向性の基盤の上で、教職員が意欲を高め主体的に動くエネルギーを創出する。

- ・対話型面談の活用：業績評価(自己申告)面談時にグランドデザインを共有し、職員一人一人の取組が全体目標にどう寄与するかを伝える(評価ではなく「価値付け」の場とする)。
- ・「児童の姿の事実」中心の協議：研究協議会において理論に終始せず、「授業での児童の姿の変容・事実」を中心に据え、校長が率先して意図を発信することにより、教職員一人一人の当事者意識を醸成する。これは、教職員にとって「教師になってよかった」「もっとこの子たちのために頑張りたい」という教育の原点(内発的動機づけ)を刺激する。

5 おわりに(持続可能な学校経営へ)

校長の役割は、学校の文化を継承しながら教職員の可能性を信じて「安心して取組ができる仕組み」を整え、進むべき「方向性」を示し、個々の実践を価値付けて「活力を生み出す」ことにある。あわせて、地域や関係機関とのネットワークを柔軟に繋ぎ、双方にとって有益な協働関係を構築することに注力していく必要がある。

研究・研修は、様々に繋がり積み重ねてこそ力となる。研究・研修成果を一過性のものとせず、組織的に「実装」し続けることで、持続可能な学校教育力として、次世代へ確実に継承していきたい。



〈リーダー育成：これからの学校を担うリーダーの育成〉

学校組織力の向上を目指すリーダー育成

～他校との相互交流がもたらす「教師の成長」と「学校の活性化」～

提案者 鳥取県米子市立五千石小学校長 山 本 晶 子

1 はじめに

教育現場に教員不足が叫ばれ、またそれに対応してきて久しい。米子市においても、4月のスタートの時点で、全ての人員が揃ってスタートすることが難しくなっている。

米子市の教職員の年齢構成を見ると、若手教員世代が37%、ミドルリーダーが期待される世代が20%、指導的立場となる世代が22%、現校長及び再任用等世代が21%となっており、若手教員の割合に対して、学校経営の要とも言えるミドルリーダー層及び指導的立場層が少ないことは明白である。加えて、管理職（登載も含む）不足、指導力の低下、休職者の増加等々、課題は山積である。中でも、ミドルリーダーと若手教員の育成が喫緊の課題となっている。

こうした現状を踏まえ、米子市では、平成27年度から、次世代を担うリーダーの育成と若手教員の指導力及び教師力の向上を目指して研修を実施してきた。令和4年度からは、次世代育成研修を改善・充実させるために「ジョブシャドウ」として取り組んできた。

2 研究の概要

(1) 双方向によるジョブシャドウ

令和4年度より、米子市校長会では、次世代育成プロジェクトとして、ミドルリーダーと若手教員の育成を目的に、市内を4つのブロックに分けて研修に取り組んできた。内容は、若手（受講者）が数時間から1日指導者（講師）の元で過ごし、ジョブシャドウをするというものであった。しかし、

一方行的な研修では成果が出にくいという反省に立ち、令和7年度より、時期をずらして、講師、受講者が互いに実践を公開し参観し合う双方向型の研修に変更した。

(2) ジョブシャドウの仕組み

① 実施内容

各学校長が推薦する講師と受講者をブロックごとにマッチングし、1学期に、講師の学級に受講者が、2学期に受講者の学級に講師が、数時間から1日張り付きで滞在し、学習指導や学級経営、生徒指導等について学ぶ。

② 研修対象者

- 受講者：採用3年以内の者（講師を含む）
- 講師：30代～40代前半で、今後市内でリーダー及び各分野で指導的立場となることが期待される者

(3) 仮説

- ① 受講者は、学んだことを実践する場を得ることができ、さらにアドバイスをもらうことによって、学んだことをより自分のものにすることが可能となるであろう。
- ② 講師は、受講者の実践を通して、自身を振り返ったり改善点を見いだしたりして、ステップアップやミドルリーダーとしての意識向上に繋げることができるであろう。

(4) 研修内容等

- ① 朝から児童が下校するまでの仕事の様子、学習指導、学級指導、生徒指導等を公開及び参観する。
- ② 放課後に話し合いの場を設け、受講者の質疑に対して講師が応答等を行う。



(5) 取組の成果と課題

【成果】

- ① 受講者の新たな視点の獲得と、2学期の実践を通じた「学びの自分ごと化」受講者は自身にない指導法や児童のみとり方に触れて視野を広げた。さらに2学期に自身のステップアップした実践を見てもらう双方向のプロセスを経ることで、学んだことをより深く自分のものにできた。
- ② 講師の自覚とモチベーションの向上後輩に教え、自らの実践を見せる過程を通じて、講師に「地域や学校の教育を担う」というリーダーとしての自覚や誇りが芽生え、自己有用感やモチベーションの向上に繋がった。
- ③ 校外への人脈拡大と、研修後も「相談できる安心感」の醸成

1対1の関係性の中で、研修後も「他校の相談できる先輩や仲間」という縦・横のパイプ（人脈）が繋がり、若い教師が安心して次の実践にチャレンジできる基盤ができた。

【課題】

- ① 受講者側の「メタ認知（課題認識）」の弱さと事前の目的焦点化
受講者が自身の課題に気付けていないケースがあり、何のために訪問し何を学びたいのかという「事前ニーズの焦点化」が不十分なまま研修に臨んでしまう難しさがある。
- ② 講師側における「事前ニーズの把握」と「効果的な助言」の難しさ
受講者のニーズや学級の実態、人柄が分からない状態でのアドバイスは、講師にとっても高度であり、また、間近でずっと見ているわけではないため、受講者のその後の「変容や成長」を捉えきりにくい。
- ③ 現場の負担と実施時期の調整
研修のために1日クラスを空ける際、特に小規模校においては、補欠の確保が難し

く、安心して研修に出かけられる持続可能な校内体制づくりに課題がある。

3 校長の役割

リーダー育成において校長が果たすべき最大の役割は、研修を単発の「行って終わり」のイベントにせず、将来の学校や地域を支える組織的・継続的な「育成フレーム」としてマネジメントすることである。

具体的には、まず評価育成面談等を通じて教員一人一人の授業力、希望、キャリアビジョンを深く把握し、適材適所ではなく「適所適材」を見据えた意図的な校内人事や分掌組織を構築する。その上で、受講者には対話を通じて研修の目的を焦点化させ、持ち帰った学びを言語化させて定着を促す。同時に、講師に対してはミドルリーダーとしてのミッションを明示し、自覚とモチベーションを促す。さらに、研修が現場の負担にならないよう学校全体のスケジュールや人員配置を工夫し、安心して学べる体制を整えるとともに、市内管理職と連携して、適切なマッチングのノウハウを確立していくことが求められる。そして何より、管理職自身がいきいきと楽しみながら働く姿（良い手本）を見せ、現状に満足せず学び続ける組織文化を醸成することが重要である。

4 おわりに

人材不足と時間的制約のなか、学校現場を維持するためには、効果的な人材育成が必要不可欠である。若手教員の増加や管理職の若齢化が進む現在、現場での人材育成や、教職員一人一人の状況や希望を早期に把握して、学校運営ができる人材を確保し、育成していくことは校長としての私たちの責務であると考え。これらの喫緊の課題に対し、校長はマネジメントに知恵を絞るだけでなく、単独校の枠を超えて校長会組織が一丸となって引き続き人材育成に取り組んでいきたい。



〈リーダー育成：これからの学校を担うリーダーの育成〉

確かな展望をもち行動できるミドルリーダーの育成

～学校組織力の向上を図る取組を通して～

提案者 広島県熊野町立熊野第四小学校長 中 川 隆

1 はじめに

学校組織力の向上には、優れた実践力や調整力、学校経営に主体的に参画する意識等を有するミドルリーダーの存在が欠かせない。しかしながら、教職員組織の年齢構成は全国的にも若手教職員の割合が増加する一方で50代以上の教職員も依然として高い割合を占めており、若手教職員とベテラン教職員間を繋ぐミドル層の育成が課題となっている。本校においても同様の状況が見られ、主任層・ミドルリーダー層の育成は急務である。

また、本校の課題として、学年や分掌を超えた繋がりが弱く、個業型組織となっている現状が挙げられる。ミドルリーダーに求められる学校経営への参画意識や組織的に展開する運営力を育成するには、組織の在り様を改善する必要があると考えた。つまり、個の力を高めることのみに焦点を当てるのではなく、チームとして組織力を高めることを同時に行っていくことで、相乗的に効果が上がるのではないかと考えたのである。

以上のことから、組織力の向上を図ることを通して、確かな展望をもち行動できるミドルリーダーの育成を図ることを研究の目的とすることとした。

2 研究の概要

(1) 令和7年度の取組

本研究では、育成したいミドルリーダーとして2名の教諭(A教諭／B教諭)を中心に、取組を進めることにした。なお、A教諭は令和7年度末をもって退任したため、令和8年

度からはB教諭のみを対象としている。

① 主任への起用

令和7年度はA教諭(40代前半。本校転任1年目)を保健主事に、B教諭(30代前半。本校6年目)を研究主任に起用し、分掌における企画・調整業務を担わせることで組織運営に関する実践的な経験を積む機会を設定した。

② 心理的安全性を高める対話

主任を命課した当初、二人の教諭は主任としての職責を果たすことに不安を感じている様子が見られた。そこで、二人の教諭に対して対話の機会を随時設定し、常に受容的態度で肯定的評価を行った。

③ 学校評価・業績評価における重点目標の焦点化

ア 学校教育目標と育成を目指す資質・能力

本校では、学校教育目標を実現するために児童に身につけさせたい資質・能力として「探究する力」「相手の思いや考えを聴く力」「自分の思いや考えを伝える力」「振り返り、チャレンジする力」の4つを挙げている。なお、学校教育目標は、前年度3月に学校運営協議委員会を含む全教職員で、育てたい児童の姿を熟議の上で決定した。

イ 焦点化について

学校経営ビジョンを全教職員が共有するためにはアに述べた4つの資質・能力を焦点化していくことが効果的なのではないかと考えた。そこで、学校教育目標の実現に向けてどの資質・能力を育成していくことが最も必要だと思うか教職員で協議し、重



点目標を「聴く・伝える力」とした。また、業績評価の目標1つ目は全教職員共通とし、学校評価表の評価項目を「聴く・伝える力」のみに焦点化した。

(2) 取組の成果と課題

対象とした二人の教諭からは、少しずつ自信をもち、主体的に学校経営に参画しようとする姿が見られるようになった。例えば、A教諭は、保健安全部が提案する様々な取組について部員の意見をICTも活用しながら聞き取り、意見をまとめながら改善を図った。B教諭は、自身の発案によるミニ研修を定期的に企画・運営するなど、校内研究の推進に関してリーダーシップを発揮した。

しかしながら、令和7年度末に実施した教職員アンケートと対話からは、二人の教諭らが、「他の教職員に理解してもらえず協働ができていない」「取組の成果が出ているのか自信がもてない」等、推進することの難しさを感じていることが分かった。また、実際に行われた数々の取組についても、重点目標との繋がりが薄くなっていた。

これは、「学校教育目標や重点目標について、その具体の姿が全教職員に十分に共有されていなかったこと」「ミドルリーダーとの対話が、二人の意欲を損なわないことに留意するあまり肯定的に受け止めるだけになってしまい、展望に繋がる助言ができていなかったこと」が要因ではないかと考えた。

そこで、令和7年度末から令和8年度7月にかけて、次の取組を行った。

(3) 新たな取組

① 課題を自覚し、展望がもてる対話

B教諭と、研究主任の役割や取組の繋がりについて対話しながら、B教諭自身が課題に対して今後の展望がもてるよう指導した。

② 学校経営構想図の改訂

令和8年度の学校教育目標及び重点目標を前年度と同様に全教職員との熟議のプロセスを経て決定した後、さらに、学校経営

構想図を各主任と共に繰り返し改善していくことにした。改善を繰り返す中で、目指す児童の具体化が共有され、各部で考える取組も、重点目標に焦点化したものになってきた。

(4) B教諭の状況

二つの取組を通して、B教諭に大きな変化があった。1つは、B教諭自身が課題と感じていた協働を意識した振る舞いが増えたことである。自分から他の先生に声をかけて授業の相談にのったり、どのような伝え方をすれば相手に伝わるか言葉に拘ったりする姿が見られるようになったことである。もう1つは、令和8年度重点目標の「表現力」に焦点を当てた取組が行われ、取組同士の繋がりが見え始めたことである。

3 校長の役割

学校が組織として力を発揮するためには、次のような取組を通して、個の力とチームの力を一体的に高めていくことが必要だと考える。

(1) 個の力を高める対話

対話の目的には様々あるが、「個の力を高める」対話とするためには、相手を受容するのみならず、今後の展望に向けたプランを引き出せているかを意識した対話を行うことが大切である。

(2) チームの力を高めるビジョンの共有

学校経営構想図を教職員と共に改善し続けるプロセスを通して、校長が示したビジョンの具体を共有していくことが大切である。

4 おわりに

本研究を通して、全教職員のベクトルを描える取組を通してリーダー育成を行っていくことが、リーダーのみならず様々な段階にある教職員育成や、創造的な学校経営に繋がっていくことが分かった。今後も、「個と組織」両方に視点を当てた学校経営に果敢に取り組んでいきたい。



〈学校安全：地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進〉

学校・家庭・地域が連携・協働して、自他の生命を守る児童を育む ～中浜地区津波避難訓練を通して～

提案者 鳥取県境港市立中浜小学校長 水 嶋 志都子

1 はじめに

本市では、コミュニティ・スクール制度の導入をすすめ、令和3年度までに市内全ての学校に学校運営協議会（中学校区に1つ）が設置されている。令和8年度の「境港市学校教育の指針」には、学校・家庭・地域の連携・協働による教育課程の編成によってコミュニティ・スクールの充実を図ることが具体的な施策の方向性の1つに掲げられている。

それを受け、本市小学校長会では、コミュニティ・スクールを基盤にさまざまな教育活動の充実について実践研究をすすめている。各学校・地域の実態に応じて創意工夫した教育活動を展開しており、学校安全においても同様である。

その1つとして本校区で取り組んでいる中浜地区津波避難訓練を通して、地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育を推進するための具体的方策を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性を究明するものである。

2 研究の概要

(1) 市内各校の現状

① 防災教育の実際

本市の小・中学校管理規則では、年2回以上防災訓練を実施しなければならないと定められている。各校が内容や場を工夫しながら実施するとともに、地域の専門家や市の防災危機管理課、消防署等と連携した防災教育を実践するなど、地域とともに子どもたちの防災意識を高める学びを推進する土台がある。

② 防災教育の成果と課題

自分やまわりの人の生命を守る意識を育む学びが積み重ねられている。ただ、災害はいつ、どこで起きるかわからない。災害が起きた時、子どもたちの安心・安全を確保するには、学校・家庭だけでなく、地域との連携が不可欠である。また、児童の発達段階に応じた地域での貢献も期待するところである。

(2) 本校の取組 ～中浜地区津波避難訓練～

① コミュニティ・スクールとキーパーソン

本校は令和3年度にコミュニティ・スクール制度が導入された。その前年から地域主催で中浜地区津波避難訓練が実施され、学校は協力という形で連携してきている。この訓練は、学校・家庭・地域が連携・協働して自他の生命を守る児童を育むのに有効であり、コミュニティ・スクール制度導入の観点からもよいスタートを切ったと言える。

実施にあたり、3名のキーパーソンが存在する。1人目はコミュニティ・スクール制度導入に伴い配置された、地域と学校をつなぐ「地域学校コーディネーター」である。2人目は防災士の資格をもち中浜地区に存在する様々な組織を束ねる「各種団体連絡協議会会長」である。3人目は「公民館運営審議会福祉部長兼社会福祉協議会生活支援コーディネーター」で、教育と福祉の橋渡し役も担い多くの人の参画を実現している。この3名の尽力により本活動が根付いたとともに、学校が「地域コミュニティの核としての役割を果たす学校」への転換



の入り口に立ったと言える。

② 地域から子どもたちへの発信

全児童に、前述の3名が学年ごとに事前学習を実施した。繰り返し子どもたちに投げかけていたのが「顔見知りを増やそう」である。自助・共助の精神を養い、受け継ぐきっかけにしたいという強い思いを伝え続けている。

③ 成果と課題

学校は、周知や参加のとりまとめ、事前学習の場の設定、避難場所の巡回等、地域とともにある学校づくりの一環として、主に管理職が調整役となって取り組んできた。それにより、年1回放課後に、中浜地区で津波避難訓練が実施されるということが浸透しており、保護者も協力的である。また、地域に顔見知りが増えることによりいざという時の安心感があるとの保護者の声も聞く。

しかし、参加児童が、初回の令和2年度は3分の2以上にのぼったが、令和7年度は半数にとどまった。地域の一員としての参加意識、地域における防災意識の醸成が課題である。いずれ中学生となる6年生の参加を増やすことで、中学生の意識向上にもつなげたい。

④ 課題解決のための一手

中浜地区津波避難訓練を教育課程内に位置づけることに踏み切った。参加者増はもちろんであるが、教職員の授業改善への取組の加速が期待できるとともに、地域と連携・協働した教育活動の充実につながると考えた。

授業改善に取り組む。訓練とともに、事前・事後学習の充実により目標の達成度や質を高めたい。

② 組織活性化・校内のキーパーソン

校内の推進者の指名が鍵となる。カリキュラムの実施のコーディネートはもちろんであるが、授業者に、授業改善に向かう主体性や地域との連携・協働に率先して取り組む姿勢を引き出すことを期待するものである。

③ 研究との連動

本校では「学びの土台となる非認知能力の育成」を研究主題に、自分と向き合う・自分を高める・人とつながる力を育む実践に取り組んでいる。人に必要とされて発揮されることの多い「非認知能力」と学校安全・地域防災を関連づけることで教育課題解決の意識を高めたい。

(2) 地域との連携・協働

本訓練をはじめ、地域との連携・協働による学びを実践するにあたり、本校のめざす子ども像に、知・徳・体に加えて「地域」を掲げ、教職員への自覚と地域への発信を促した。また、4月に「地域連携学年主任会」を開催し、全学年が事前・事後学習、目標、ひきだしたい子どもの姿等、カリキュラム化した内容を地域（主に学校運営協議会関係者）と共有した。学校の覚悟（カリキュラム化）と地域との共有が、地域ぐるみで命を守る防災教育、安全教育につながるものとする。

3 校長の役割

(1) 教職員の意識向上

① カリキュラム化

令和7年度、中浜地区津波避難訓練をはじめ、地域とかかわる活動をカリキュラムとして整理し、令和8年度より実践を開始させた。本訓練は防災をテーマに6年生の総合的な学習に位置づけ、夕刻の訓練には下校後それぞれの地域で全員が参加する。授業者は、地域とのかかわりの価値づけを図りながら

4 おわりに

地域の人・もの・こととかかわることは、児童の学びを豊かにするということは間違いない。学びを豊かにするということは、達成する目標の質や人権意識の向上、地域への愛着・誇りの醸成、自己肯定感の高まり等多くが期待できる。防災教育を含め、学校・家庭・地域が連携・協働して児童を育むために、課題や次の一手を提案し、学校への信頼を寄せ続けてもらうことが校長の役割だと考える。



〈学校安全：地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進〉

自分の命を守る みんなの命を守る

～児童・教職員の安全・防災の意識を高め、判断力を育てる取組～

提案者 広島県三原市立小泉小学校長 岡 明 美

1 はじめに

広島県は平成30年7月豪雨において甚大な被害を受け、県東部に位置する三原市及び本校が属する中学校区においても、沼田川の氾濫による浸水や一時的な孤立が発生した。しかし、総合的な学習の時間で防災を学ぶ4年生は、発災当時幼く、実体験に乏しい。また、教職員も異動等で入れ替わりがあり、地域に潜む災害リスクを「自分事」として捉えることが難しい。

本市の小学校校長会や中学校区校長会では、情報共有を行ったり、課題解決のために知恵を出し合ったりして連携・協働している。各校、いつ起こるかわからない「地震」「津波」「土砂災害」「河川氾濫」等の災害に対し、また、校内の安全管理への確実な対応について、校長がリーダーシップをとり、学校ができること・やるべきことは何かを考え日々実践している。

2 研究の概要

各校長が課題と感じているのが「児童・教職員が安全・防災の正しい知識を持つこと」「命を守るために正しく判断し行動すること」である。本校でも、それらの資質・能力を高める取組を考え実践することにした。教職員、コミュニティ・スクール、保護者、中学校ブロックの各校に協力を得ながら取組を進めた。

(1) 課題解決に向けた取組の工夫・改善

毎年同時期に避難訓練を実施するものの定型的であり、児童は自分事として捉えられない状況にあった。そこで、避難訓練を工夫・改善することとした。

(2) 変化のある避難訓練の実施

避難訓練を繰り返し実施することにより、児童は教師の指示に従い避難できる。しかし、そこに主体的な判断力は試されない。そこでいつどのような状況で起こるかわからない地震については、予告なしの避難訓練を実施するよう健康安全部に投げかけた。児童・教職員の動きが想像できず心配する者もいたため、地域の防災士に訓練の様子を参観してもらい、改善するための次に挙げる指導助言を受けた。

○「放送を立ち止まって聞く」習慣は効果的。

○先生が必要な声（指示）を出していた。

●災害の状況に合わせて身を守るには、知識や避難行動についての体験が不十分である。

●身の安全を守るため、避難状況を伝えたり、心の安定を図ったりする声かけが必要である。

それらを生かし、今年度は、次のような設定で避難訓練を行うこととした。

令和8年度 避難訓練年間計画（想定）	
6月	水害・土砂災害（大雨が降り続き、学校近くの崖が崩れる可能性）
7月	地震（震度5強、避難経路通れない）
9月	地震（予告なし、休憩時間に発生）
10月	不審者（刃物を持った侵入者）
11月	火災（火の気のない所から出火）

(3) 防災意識を高める取組の工夫

災害の特徴やそれに応じた避難方法の正しい知識を持つため、訓練前に各学級で「ひろしまマイ・タイムライン」や資料を使って学習した。また図書室に「防災コーナー」を設置して児童が意識を高め、主体的に学



ぶことができる環境づくりを行った。

(4) 多角的な視点での安全点検の実施



毎月教職員による定期点検を行っているが、点検での見落としによるヒヤリハットや、「学校は全て安全だ」と思い込んだ児童の危険な行動が課題となった。そこで、教職員だけでなく児童も含めた「多角的な視点」による安全点検に改善した。児童・教職員が身近な危険にいち早く気づき、声を掛け合える環境づくりを行うとともに、危険予知・回避能力を向上させることをねらいとした。

ア 児童による安全点検…月末の火曜日、たてわり班掃除の時間に、掃除場所の安全点検を班の人や担当の先生と行う。

イ 保護者による安全点検…参観日やPTA作業の際に、危険箇所がないか見てもらう。

ウ 地域（CS）による安全点検…4回の学校運営協議会で来校した際に見てもらう。

(5) 過去の災害の教訓をつなぐ取組

4年生が総合的な学習の時間に「防災」をテーマとして「みんなが安全にらせる町 小泉町」という学習を行っている。①学校近くの「砂防ダム」見学 ②小泉町で起こった災害についての聞き取り ③地域で起こり得る災害の想定 ④命を守るための行動を考える ⑤自分、友達、家族、地域みんなが安全に暮らせる方法を考える ⑥学んだことを地域に発信するという流れで単元を構成している。

(6) 防災と絡めたカリキュラム・マネジメント
各教科と防災教育との関連を見直し、整理した。特に5・6年生の理科で防災と絡めたカリキュラム・マネジメントを行うことができないかCSと担任に投げかけた。2学期単元「流れる水のはたらき（5年）」「変わり続ける大地（6年）」で科学的現象と災害が起こるメカニズムを関連付けて考える。

(7) 三原市の取組

中学校ブロック（幼保4園、小5校、中1校）全体会で、各校の防災教育について交流・連携した。また、市役所危機管理課の方に話をしてもらい、教職員の危機管理・防災意識を高めた。三原市の各校において、地域ぐるみの工夫した取組を行っており、今後も連携を深めながら非常時に協力し、また小学校で培った資質・能力が系統的に中学校で生かされるよう、つながりを大切にしていこう。

3 校長の役割

○ 安全・防災意識を高める取組の持続的推進
働き方改革を進める中で現在取り組んでいることを工夫・改善し、より効果的で意識の高まる取組にしようと考えた。そのために、関係諸機関に相談し、情報収集をしたり人とのつながりを作ったりした。校長が積極的に声を出すことでつながりが広がり、共に学び、考え、効果的に実践することが可能となった。

○ 組織的な取組の構築

安全・防災において、校長自らの意識を高めた。あらゆる場面を想定してヒヤリハットの感度や「こうなるかもしれない」という想像力を高める。そして適時教職員に働きかけ、意見を出し合い、組織を動かす。取組を実行させ、校長はそれを支える。さらにPDCAの過程を積み重ねる中で意識が高まると感じた。

4 おわりに

児童・教職員の安全・防災への意識は一步步ずつ向上している。学校に関わる全ての「命を守りきる」ために、今後も校長がリーダーシップを発揮し、「自分の命を守る みんなの命を守る」という合言葉を力強く発信し続けていく。未来の危険に備え、これからも三原市校長会、教職員と知恵を紡ぎ、判断力を磨き、地域と共に一歩進んだ安全な学校づくりへ歩みを進めていく。



〈危機対応：学校と子どもを取り巻く危機への対応〉

全体最適の危機管理を実現し、 組織の危機対応力を高める校長の役割と指導性

提案者 山口県周南市立富田東小学校長 大 丸 奈緒美

1 はじめに

学校は子どもの健やかな成長を保障し、安心して学ぶことができる安全な場所であり続けなければならない。そのために、学校には危機管理の体制を確立し、教職員及び子どもたち一人ひとりの危機対応力を高めることが求められている。

本市の小学校は全27校で、教職員の年齢構成を見ると若年層が増加しており、各校における危機対応力の向上が喫緊の課題である。

2 研究の概要

(1) 危機管理の実態把握と校長の意識調査

各校の危機管理の実態を把握するために、事前アンケート調査として、まず、「特色のある取組」を調査した。調査の結果、「教職員の危機対応力育成に向けた取組」、「児童の危機対応力育成に向けた取組」、「家庭、地域、関係諸機関との連携・協働を図る取組」に大きく分けることができた。

続いて、校長の危機管理に係る意識について把握するために「校長として危機の未然防止のため注力していること」について調査した。調査の結果、主に「教職員の意識向上」「児童の安全教育と主体性の育成」「保護者・地域との情報共有と連携」「マニュアルの更新や訓練の実施・改善」「迅速な対応と情報収集体制の整備」等に注力していることが分かった。

(2) 研究の視点（研究発表主題）の設定

調査の結果から、学校の実情や教職員組織の違いによって、危機対応に係る取組や

校長として注力していることは多岐にわたることが分かった。そこで、各校の様々な危機管理に組織的・総合的に対応するために、「全体最適」をキーワードとし、以下の研究の視点を設定することとした。

【研究の視点】

全体最適の危機管理を実現し、組織の危機対応力を高める校長の役割と指導性

全体最適の危機管理とは、「組織全体の視点から将来起こり得る様々な危機を俯瞰し、その影響を最小限に抑え、組織の持続的な発展を可能にするための危機管理」と共通理解することとした。

(3) 研究の視点に沿った各校での実践

研究の視点を校長間の共通の指針とし、全体最適の危機管理を実現し、組織の危機対応力を高めていくために、各校で実践に取り組むこととした。

(4) 実践の共有による研究の視点の再考

各校での実践を共有した後、「実践を共有しての気づき」、「危機の未然防止のために注力していること（事前アンケート調査との比較）」、「全体最適の危機管理を実現するための校長の役割と指導性について」の3項目について事後アンケート調査を実施した。

3 校長の役割

事後アンケート調査の結果から、全体最適の危機管理を実現し、組織の危機対応力を高めていくための校長の役割と指導性について、「示す」「育てる」「結ぶ」の3つのキーワードを導き出すことができた。以下、特徴的な



取組を基に述べる。

(1) ビジョン共有による全体最適の危機管理の実現 —「示す」—

周陽小学校では、危機管理に関わる3つの力として、「危機の芽を見抜く力（未然防止）」、「危機を危機と感じる力（迅速な対応）」、「組織で対応できる力（早期解決）」を明確に示し、教職員全体で共有し、日常の教育活動に生かすことで、実効性のある危機管理体制の構築を目指している。

組織として危機対応を行うためには、教職員一人ひとりが共通の危機意識と判断基準をもつことが不可欠である。なぜなら、個々の経験や判断に委ねられている状況では、対応の遅れや判断のばらつきが生じ、組織全体の安全性が損なわれるおそれがあるからである。

このように、学校運営の責任者である校長が明確なビジョンを「示す」ことで、組織として同一の判断基準が形成され、全体最適の危機管理が実現すると考える。

(2) 組織力向上による全体最適の危機管理の実現 —「育てる」—

富田東小学校では、教職員一人ひとりの危機対応力を向上することで組織全体の危機対応力の向上を目指した「教職員版KYT」を行っている。本研修では、既に起きている事案や今後起こりそうな事案を事例として取り上げ、その対応についてチームで考えたことを日常の対応に生かすことをねらいとしている。研修内容は、生徒指導、特別支援教育、綱紀保持、保健対応等で、研修のマネジメントは各担当に任せ、教職員が主体的に取り組むことができるよう人材育成を図っている。併せて、チーム研修の形で進めることで、学年主任にミドルリーダーとしての自覚をもたせることも狙っている。

このように、教職員一人ひとりが当事者意識をもち、自分事として主体的に取り組む研

修体制を構築し、個や組織を「育てる」ことで全体最適の危機管理が実現すると考える。

(3) 地域との協働による全体最適の危機管理の実現 —「結ぶ」—

遠石小学校では、通学環境の改善と児童の危機対応力の育成に向け、徳山高等専門学校都市計画研究室と連携し、通学路の安全対策や安全教育に取り組んできた。環境に働きかけるハード、児童の行動変容を促すソフトの両面から、危機を未然に防ぐ対策が進んだ。

通学路の危険箇所調査には、県・市教育委員会、警察、市道路課、自治会が立ち会い、課題を共有した。徳山高等専門学校の専門的知見が加わったことで行政を動かす力が生まれ、現在は通学路の歩行空間確保のため、電柱移設が予算化されつつある。また、高専生による交通教室が4・5年生を対象に年2回実施され、地域の実態に即した内容が児童の危機対応力向上に寄与している。

学校・地域・行政・専門機関の人と知見を、校長が核となって積極的に「結ぶ」ことで、地域との連携・協働による全体最適の危機管理が実現すると考える。

4 おわりに

各校における実践研究を基に校長会として検討を重ねてきたことで、以下の成果を得ることができた。

- ・研究の視点「全体最適の危機管理の実現」を共通の指針とし、各校で実践に取り組んだことで、校長の役割と指導性が明確になった。
- ・「全体最適の危機管理を実現し、組織の危機対応力を高める校長の役割と指導性」について3つのキーワード「示す」「育てる」「結ぶ」を共通理解することができた。

今後も、各校での取組を定期的に校長間で共有し、各校の実態や実情、課題に応じた取組を継続していくことで、さらなる組織の危機対応力向上に努めていきたい。



〈危機対応：学校と子どもを取り巻く危機への対応〉

様々な危機への対応と未然防止の体制づくり

～「日常の平和」を感じる学校づくり～

提案者 広島県広島市立大州小学校長 藤谷 並樹

1 はじめに

本校は、広島駅から約2.5kmに位置し、学区には、マツダスタジアムやスパイラップガーデンといった商業施設や中小企業がある。全児童327名の学校で、地域や家庭は学校に協力的で家庭環境も落ち着いており、学校も同様である。この落ち着きを続けていくことができるよう、ゆるぎない、持続可能な学校組織づくりが求められており、そのためにも、児童が安全・安心に学校生活を送ることが最も大切である。令和6・7年度は、広島市教育委員会より「平和教育」の研究指定を受け、「平和教育」への取組を進めた。まずは、相手意識をもち他者理解をすることから始めたいと考えた。今後も社会の変化に対応し、安定した学校経営を行い、持続可能な学校を創っていく必要がある。全教職員と全児童で学校を創っていくという意識をもち、「日常の平和」を大切に感じ、学校体制を整えていくことを考えていきたい。

2 研究の概要

(1) 広島市の目指す教育の方向性

広島市では、広島市教育大綱に示されているように「国際平和文化都市」を都市像に掲げ、その具現化を目指し、「地域共生社会」の実現に取り組んでいる。本市での児童の育成を考える際、持続可能な社会の構築に向けて、「平和を希求する心」「互いの違いや多様性を理解・尊重し、共生・協働する力」を育成していくことが求められている。その視点からも「日常の平和」を

大事にした「平和教育」を推進していくことが、いじめ防止と支持的風土の醸成を推進していくことにもつながると考える。一人一人が大切にされ、自己肯定感を育み、地域への誇りと愛着をもち、将来のまちづくりを牽引する存在となっていくことも大事である。いじめや不登校の未然防止に向けて、互いに認め合い、支え合うことができる支持的風土の醸成された学校・学級づくりなど、予防的生徒指導の充実を図ることを推進する。

(2) 「日常の平和」を感じる取組

① 授業づくり

児童が学校の中で大半を過ごすのは授業時間である。授業を大切にすることが安定した学校経営には不可欠である。そこで、研修主事を中心として、研究部から発信する授業づくりに取り組んだ。研修主事を総合的な学習の時間の専科とし、各学級担任とTTの授業展開を行った。

ア 「発言」にこだわった授業

児童の「発言」を大事にした授業展開を行う。聞き手や相手意識をもって話し、反応しながら聞くことを取り入れる。

イ 学びの共有化と可視化

教室内だけでなく、階段・廊下・踊り場などを活用し、全児童で学びの足跡や作品を掲示し、可視化を図る。

➡ 校舎内を学校美術館として活用。

ウ 総合的な学習の時間・特別活動

専科を中心に「平和教育」を推進するため、3～6年は総合的な学習の時間、1・2



年は特別活動で平和学習を推進する。「ひろしま平和ノート」を活用し、学習を進める。

エ 研修会

研修を自分事として捉えるため、協議会など教職員の「発言」を大事にし、協議会後に各自が振り返りを記入する。それを研究部がまとめて配付し、学びの共有を図る。

② 生徒指導

ア いじめ防止委員会と児童会活動

- ・生徒指導主事を中心に、いじめ防止委員会を全教職員で毎月実施する。
- ・生活部が縦割り班活動（異年齢集団活動）や児童会活動など、児童が中心となって運営することができる活動を提案し、全児童が関わり合いながら活動できる取組を行う。

イ 学級での取組

- ・「朝の会」「帰りの会」でのよいことみや1日の振り返りの場を設ける。そのよさを共有するため、発言内容を掲示する。また、学級でのよかった場面を写真で残し、教師のコメントを入れて掲示する。

➡互いのよさの共有化と可視化。

(3) 学校体制づくり

① 教職員の意識統一

ア キャッチフレーズの提示

R6「One Team 大州」、R7「One Peace 大州」、R8「One Harmony 大州」を合言葉とし、教職員が一丸となって教育活動を推進できるよう年度当初に意識統一を図る。

イ 学校経営計画を自分事として捉える

校務分掌各部で1項目を担当するとともに、取組を検証し、成果と課題を整理していく。

② 危機管理やいじめの未然防止体制の確立

アンテナを巡らせ、些細なうちに芽を摘むことを徹底するため、保護者や地域との密な連携を図る。情報があつた際には、暮会や臨時集会をもち、全職員で情報共有を行う。意識統一したのち、指導の動きをつくっていく。

③ 報告・連絡・相談体制の確立

何か起きた際には、学年主任・生徒指導主事・管理職への報告を徹底し、記録を残す。未然防止の観点から、よいことも含め、保護者へは学校から先に積極的に連絡を行う。

3 校長の役割

校長自ら見識を深め、教育活動のビジョンを明確にし、機能的な組織・体制づくりを進めるとともに、リーダーシップを発揮しながら教職員の資質を高め、教育力の向上を図ることが必要である。大州小を児童と教職員で創り上げていきたいと考え、教育実践を積み重ねている。

(1) 語先後礼

相手を大事にするため、朝の挨拶では、「語先後礼」に取り組む。一人一人に丁寧に声を掛け、表情を読み取ることを大切にする。

(2) 校長からの発信

週1回の校長室からのエール、学校だより、学校朝会、授業観察シートなど、言葉で児童・教職員・保護者・地域に思いや考えを伝える。

(3) 校長室前の掲示

全児童で「平和の種」を育てるため、一人一人の思い、考え、取組を3段階で掲示する。

➡全校で「平和の取組」を意識化。

4 おわりに

児童は、令和6年度当初、「平和」への思いや考えをもつことはできなかったが、2年間の取組で、「こうしてみんなで勉強できることが平和」「おいしい給食を食べる毎日がうれしい」と、「日常の平和」を大切に感じることができるようになった。人を大事にし、授業中には、友達の「発言」に反応しながら聞くこともできるようになっている。そのことが、学校全体の落ち着きとなっていると感じている。安定した学校経営を行うためには、支持的風土の醸成を続けていくこと、人を大事にする視点が欠かせない。そのことがいじめ防止などの危機管理への対応となり、未然防止につながっていくと考える。



〈社会形成能力：社会形成能力を育む教育の推進〉

小学校段階で必要な社会形成能力の育成 ～学級経営を核とした社会形成能力育成の方策について～

提案者 岡山県岡山市立彦崎小学校長 安 東 伸 一

1 はじめに

岡山市は岡山県南部に位置する人口約71万人の政令指定都市である。小学校長会は小学校86校、義務教育学校1校で構成し、研究主題「新しい時代を創造し、未来社会に夢と希望をもち、たくましく生きる児童の育成をめざす小学校教育の推進」の実現に向けて、六つの専門部と六つの委員会で教育課題の解決に取り組んでいる。また、五つの区ごとに校長会を組織し、地域の特性に応じた教育活動の充実を図っている。

2 研究の概要

(1) 生徒指導委員会での取組

① プロアクティブな生徒指導の推進

プロアクティブな生徒指導は、全ての児童を対象に一次的支援を行う常態的・先行的な生徒指導であり、日々の学校生活を通して社会的資質能力を育成することを目的としている。生徒指導委員会では、継続してこの視点を研修テーマに掲げ、各校の実態に応じた目標設定をし、実践したことを共有してきた。

昨年度からは、プロアクティブな生徒指導という時代のニーズを反映した取組を推進してきた視点を生かして、社会形成能力の育成に焦点を当てた教育活動を各校で推進している。

② 各校における主な実践

ア 児童会テーマ「ふみ出せ！幸せの第一歩」をもとに、児童が個々の目標を設定し、実践と振り返りを行う。

イ 児童のネガティブな実態を分析し、課題解決に向けた校内体制の整備を図る。

ウ 「自分の目標振り返りカード」を活用し、自己評価・相互評価に加えて保護者コメントを取り入れ、粘り強い取組への意欲向上を図る。

エ 児童会で承認された「〇〇っ子宣言」を軸に、児童が主体的に学校生活を改善する態度を育成する。

③ 各校の実践から共有した課題と対策

社会形成能力はキャリア教育で育成すべき資質能力の一つであるが、内容は多岐にわたり、地域との関わりや体験活動を通して育つ側面も大きい。そのため、活動が目的化し、育成すべき資質・能力が十分に意識されない。

そこで、学校の実態に応じて発達段階ごとに育成すべき力を絞り、具体的な姿として位置付けることが重要であることを確認し合った。また、活動ありきから脱却し、共通理解のもとで見取りや評価を行える手立ての構築が求められる。

(2) 彦崎小学校の取組

① 昨年度の取組

児童が自己評価を行い、学級目標や当番・係活動などについて振り返ることで、学級力の向上を図った。「主体性」「自己・他者理解」「受容的な人間関係」「協働的な活動」等を評価項目に設定し、社会形成能力の育成に直結する内容とした。また、評価結果をレーダーチャートで可視化し、PDCAサイクルを定着させることで、課題



発見力・課題解決力・自治力の向上につながる取組となった。これらをプロアクティブな生徒指導の視点と結び付け、学校全体で方向性をそろえた実践へ発展させたいと考えた。

② 今年度の取組

ア 目指す子ども像の共有

「共に学び合い、生活することを通して、自他の良さを大切にしながら、互いの違いを認め、進んで課題を解決しようとする子」を設定している。子ども像にせまれるように、低学年では「自己理解」「他者理解」、中学年では「主体性」「協働性」、高学年では「課題解決」「創造性」等に重点を置き、社会形成能力の育成を図る。

イ 目標設定の工夫

目標取組制度の面談において、学級経営方針や学級目標、具体的な手立てを管理職と共有することで、教職員の社会形成能力育成への意識向上を図る。

ウ 校内研究と関連

校内研究では、指導の重点である「三つのチャレンジ」のうち、特に「トモチャレ（友達と共に挑戦する）」に力を入れている。このトモチャレを学級目標達成の手立てとして位置付けることで、児童や教職員にとって取り組みやすい実践にする。

エ 児童の自己評価の充実

評価結果をレーダーチャートで表示できる環境を整え、児童自身が成果や課題を視覚的に把握できるようにする。これにより、教師の働きかけだけでなく、児童が自ら課題を見付け、PDCA サイクルを回す実践へとつなげることができるようにする。

③ 取組の様子

各学年が発達段階に応じた目標を設定し、社会形成能力の育成に向けて取り組んでいる。6年生は、昨年度から学級力向上に取り組んでおり、今年度の目標は「HERO」。下学年の手本となる存在を目指して、

学校全体の課題を見付け、解決に向けて主体的に行動する姿が増えている。「低学年の学級園整備」「ごみ分別の徹底を図る掲示物の作成と校内放送での呼びかけ」「はきものそろえの意識向上を目指した校内放送での呼びかけ」などの実践を行っている。

他学年の実践についても全校で共有し、学校として育成すべき社会形成能力をさらに精査していく。

3 校長の役割

- (1) ICT 教育・働き方改革・校務 DX などの教育改革の流れを踏まえ、児童・教職員が無理なく実践できる環境を整える。
- (2) 教職員が児童の具体的な姿をもとに成果や課題を語れるよう、研究の質を高める。
- (3) 児童と教職員の認識のずれを防ぐため、自己評価などを活用し、主観だけに頼らない客観的な見取りや評価ができる仕組みを整える。

4 おわりに

多くの課題が山積している教育現場において、自己理解・他者理解・主体性・創造性といった社会形成能力を育むプロアクティブな生徒指導の重要性を改めて認識できた。育成すべき資質・能力を見極め、学級力を高めていくことは、学校教育の土台を築くことにほかならない。今回の取組をさらに発展させることで、児童にとっては安全・安心で学びやすい学校に、教職員にとっては働きやすい職場になることを願っている。

また、生徒指導委員会で共有したことを自校の実践に生かし、自校での実践が他校にも生かされる連携の良さに、校長の資質向上に資する校長会の存在意義を実感することができた。



〈社会形成能力：社会形成能力を育む教育の推進〉

子ども自ら地域とつながり、地域に働きかける教育活動

～「ふるさとキャリア教育」の推進を通して～

提案者 広島県福山市立熊野小学校長 望 月 誠 治

1 はじめに

本校は児童数 64 名の小規模校である。「学校は地域の宝」という地域の期待は大きいものの、児童数は減り続けている。将来的な近隣校との統廃合も否定できない。

広島県は「転出超過」ワーストを更新中である。本校の卒業生も、いずれは熊野町を離れることが予想される。今、過疎化の現実や将来を見据えた教育が求められている。めざすのは、地域に愛着と誇りを持つ児童の育成である。自立して自分らしく生きる力を養う。将来にわたり「ふるさと福山」を思い、地域を支える人材を育てていかなければならない。

2 研究の概要

(1) ふるさとキャリア教育とは

「ふるさと教育」と「キャリア教育」を融合させた「ふるさとキャリア教育」は、地域の魅力を学ぶことと、自らの将来（生き方）を考えることを一体化した取組である。主な目的は以下の通りである。

① 郷土への愛着と誇り

地域の自然、歴史、産業などの「本物」に触れ、ふるさとを大切に思う気持ちを育む。

② 自己実現の意欲

地域で活躍する大人や企業との交流を通じ、自らの将来の夢や目標を具体化し、社会に貢献しようとする態度を養う。

③ 主体的な学び

地域課題の解決策を提案したり、魅力を発信したりする活動を通じ、予測困難な社会を生き抜く力を育てる。

(2) 各学年の内容（令和 7・8 年度）

	地域を知る	地域とつながる	地域に貢献する	
6 年	職 場 体 験	和菓子パッケージデザイン	創立 150 周年オリジナルソング創作	自分の生き方を考える
5 年	地域ブランド米作り・販売	福祉施設訪問・交流（認知症カフェ）		
4 年	ばら花壇の整備・緑のカーテン大作戦	熊野を元気に！パワーアップ体力ぐんぐん大作戦		
3 年	地域の特産品「くわい」「デニム」			
2 年	熊野を笑顔に！出張ミニライブ演奏会			
1 年	熊野を笑顔に！おもちゃ作りを楽しもう			
全学年	デニムの日（デニム産業について学ぶ）			
	カラフルな日（多様性について学ぶ）			

(3) 実践例

① オリジナルソングの創作（6 年生）

熊野小学校の創立 150 周年を記念し、6 年生が歌を作詞した。児童は住民や卒業生から町への思いを聞き取り、歌詞に反映させた。集めた言葉を練り上げた歌詞に、担任が曲を付けた。児童は「学校や地域の良さを再発見できた。みんな親切で優しい町」と振り返っていた。

学習発表会の最後、創作した歌を全校合唱で披露した。温かい拍手をいただいた。地域の方からは「150 周年にふさわしい。感動した。曲も素敵なので、ぜひ CD 化して販売してほしい。少人数でも熊野小と地域の文化を守り続けてほしい」との感想が寄せられた。

② ミニライブ演奏会（2 年生）

本校では、低学年から地域とつながる活動を続けている。2 年生は音楽隊を結成し、保育所や郵便局、スーパーの駐車場、休耕



田等、町内各地で「演奏会」を開いた。保護者は衣装や横断幕を自作し、地域の方はチラシを配ってくれた。周囲を「応援団」に巻き込み、活動を広げることができた。

③ 「認知症カフェ」での交流（5年生）

「認知症サポーター養成講座」の受講を機に、「まりホーム熊野」で行われる月1回の「認知症カフェ」で入所者と交流している。

高齢者との接し方を学んだ児童が、学んだ気配りを実践した。聞こえにくい入所者には耳元で話しかけるなど、気遣う姿が見られた。入所者は「にぎやかで元気をもらえた。また来てほしい」と喜んでいた。児童は「分かりやすい言葉を心がけた。うまく交流できた」と振り返った。

④ 「福山デニム」の出前授業（全校児童）

日本一のデニム産地である福山市への理解を深めるため、本校で3年連続「デニムの日」を実施した。児童と教職員がデニム姿で登校し、デニムの歴史や生地の特徴について、体験活動を交えながら学習した。

児童からは「日本一の産地と知り、自慢に思う」「ますます興味がわいた」という感想があった。講師や市担当者からも、デニム業界の機運醸成や若者の地元定着につながる貴重な機会として期待が寄せられた。

(4) 成果と課題

郷土への愛着と誇り			自己実現の意欲		
熊野町や福山市のことを知ることで、ふるさとを大切に思うようになった。			出前授業や職場体験での交流を通して、自分の将来の夢や目標を考えたり、社会に出て役に立ちたいと思ったりするようになった。		
	4月	2月		4月	2月
そう思う	37%	100%	そう思う	12%	75%
どちらかと言えば思う	50%	0	どちらかと言えば思う	38%	25%
あまり思わない	13%	0	あまり思わない	50%	0
思わない	0	0	思わない	0	0

児童の意識調査では、年度末には、どちらの項目も肯定的回答の割合が上昇した。

少人数の熊野小学校だからこそ、地域に深く踏み込んだ学習が可能となる。出前授業や職場体験を通じて多くの大人と関わる

ことで、自己実現への意欲が高まり、校内では見られない児童の意外な一面も発見できる。

児童の活動は、地域の方々に元気と笑顔を届ける。感謝される経験は「やってよかった」という自信になり、自己肯定感やふるさとへの誇りを育んでいる。こうした地域を巻き込む取組は、学校の魅力を発信する大切な機会にもなっている。

一方で、地域連携は特定の教員への依存度が高く、異動時の継続性や信頼維持に課題がある。また、外部調整による事務負担の増加や連携のための時間確保も必要となる。

3 校長の役割

児童が地域に働きかける教育活動を推進するために、まず校長が教育資源との出会いを主導する。予算の継続的な確保とともに、「学び」と「地域・民間」をつなぐ調整役を担う。地域の「本物」や「人・企業」との交流をいつ、どの学年で実現させるか、最適なタイミングの見極めが重要になる。

そして、担任の教材化への挑戦と外部連携を促す。地域素材を活用した教材開発から授業実践に至るまでの一連のノウハウを体系的に学ぶ機会とし、若手教員の指導力向上にもつなげたい。

4 おわりに

「ふるさとキャリア教育」は、郷土への愛着と誇りを育み、社会に貢献したいという自己実現の意欲も引き出すことが明らかになった。特に地域を巻き込んだ取組は、小規模校の強みである「顔の見える関係」を活かし、児童が貢献を実感する貴重な機会となった。これが将来の地域を支える人材に不可欠な社会形成能力の育成につながる。

今後も地域と学校が一体となった教育課程を推進していく。



〈自立と共生：自立し、共に生きる力を育む教育の推進〉

「自立と共生」を見据えた学校経営の在り方

～特別支援教育の視点から～

提案者 山口県山口市立名田島小学校長 福村 貴博

1 はじめに

山口市小学校長会（以下、市校長会）では、市内32校が抱える教育課題を共有し、よりよい学校経営を目指して研究を進めてきた。本研究は、「自立と共生」という視点を基盤に、特別支援教育の観点から学校経営の在り方を整理し、市全体として取り組むべき方向性を明確にすることを目的とする。

市内には115の特別支援学級が設置され、13校で通級指導が行われている。通級指導対象児童は通常の学級の約5%を占め、その他にも支援や配慮を要する児童が多数在籍している。そのため、多様なニーズに応える体制整備は喫緊の課題であり、学校全体で支援に取り組む組織的対応の重要性が市校長会で共有されている。支援体制の充実、学校が児童を育む基盤づくりに直結し、教育活動全体の質を左右する重要な要素となる。

市校長会が考える「自立」とは、自分らしさを大切にしながら判断し自己決定することを指し、「共生」とは、多様な他者と互いに尊重し支え合うことを意味する。これらは市内すべての学校が共通して育てるべき資質であり、本研究はその視点を土台として提言をまとめるものである。

2 研究の概要

本研究では、現状把握と課題整理、改善の方向性を明確にするため、「校長による熟議」「市内全教職員へのアンケート」「実践事例の共有」の三つの方法で研究を進めた。

(1) 熟議で見えてきた課題

熟議では、市内の特別支援教育の現状を共有し、各校の課題を出し合った。その結果、校内委員会の運営方法や位置づけは学校間で差があることがわかった。形式的な会議にとどまる学校もあれば、個別の教育支援計画の活用や外部機関との連携などを日常的に進めている学校があった。そして、こうした対応差が支援の質に大きく影響していることが指摘された。

また、児童に関する情報共有の方法も学校ごとに異なり、個別カードの活用や会議体での共有など手法にばらつきが見られた。特に年度当初の引き継ぎの質の違いが支援開始の遅れにつながるケースがあり、校長を中心に仕組みを整える必要性が確認された。

(2) アンケートで見えてきた現場の思い

アンケートでは、情報共有については概ね肯定的な評価が得られた一方、支援体制の整備状況については管理職と教職員の認識に差が見られた。管理職は制度面を中心に「整っている」と捉える傾向があるのに対し、教職員からは「仕組みが実際の支援に十分に結びついていない」という意見が寄せられた。

通常の学級担任からは「対応が個々の教員の力量に依存しやすい」、特別支援学級担当からは「役割分担の共通理解が不足しており、連携が遅れる」といった課題が挙げられた。保護者・地域への周知不足も指摘され、学校と家庭の認識のずれが課題とし



て浮かび上がった。一方で、「校内委員会の機能向上」「研修の充実による教育的効果の高まり」など、学校全体の意識や対応力の向上を求める前向きな意見も見られた。(アンケート結果は上記の二次元コードから閲覧可能である。)



(3) 実践事例の共有で見えてきた学び

市校長会では、実践事例報告の中でも、特に示唆の多かった二つの取組を共有し、学校運営に生かすこととした。

大内小学校では、医療的ケア児の受け入れに向け、入学前から関係機関と連携し、医療的ケア安全委員会を中心に情報共有を進めた。また、看護師との協働体制を整え、安心して学ぶことのできる環境づくりを進めたことで、児童・保護者の不安の軽減につながった。さらに、教職員が基礎知識を共有し、緊急時対応を確認するなど、学校全体で受け入れ体制を高める取組が進んだ。

鑄銭司小学校では、山口県立山口南総合支援学校との交流を継続して行っており、共同学習やクラブ活動を通して自然な関わりが生まれている。手話や身振りを使ったコミュニケーションが広がり、「してあげる」から「いっしょにする」へ意識の変化が見られた。交流後には互いの得意なところを認め合う姿が増え、学級の雰囲気も温かくなり、児童が共生の価値を実感する場面が多く見られるようになった。

(4) 三つの方法から見えてきたこと

三つの方法を通して、学校ごとの支援体制や情報共有の在り方には差があること、保護者・地域への周知不足が課題であることが明確になった。また、組織的な支援体制づくりや外部機関との連携が児童の学びを広げることとも確認できた。これらの課題を解決し、学校全体で支援を機能させるためには、校長のリーダーシップが不可欠である。

3 校長の役割

アンケートや熟議から、校長には次の三つの役割が求められることが明らかになった。

(1) 校内支援体制のマネジメント

校長が校内委員会の目的と役割を明確にし、児童理解のための情報共有や支援方針の確認を継続的に行うことで、学校全体で児童を支える仕組みが機能する。年度当初の引き継ぎの質を高め、随時外部機関との連携を促すことも、早期対応を図るうえで重要である。

(2) 教職員の学びを支える研修の企画

校長は校内コーディネーターと協働し、自校の課題に応じた研修の企画・実施を進めることが求められる。医療的ケアや発達特性、合理的配慮など、現場のニーズに即した内容を扱うことで、教職員の理解が深まり支援の質が高まる。研修を日常の実践と結びつけて振り返る機会を設けることも効果的である。

(3) 学校外との連携の推進

総合支援学校や地域の専門機関、医療・福祉との連携は、学校だけでは対応が難しい課題を補完する。校長が学校のビジョンを示し、教職員と方向性を共有することで、外部との協働が円滑に進み、児童の学びが広がる。

4 おわりに

本研究を通して、「自立と共生」を見据えた学校経営を進めるには、校内の支援体制整備、教職員の学びの充実、学校外との連携の三点が重要であることが明らかになった。大内小学校や鑄銭司小学校の実践は、学校経営に関する多くの示唆を与えている。

今後も市校長会による協働と情報共有を進め、市内小学校の教育の質を高めていきたい。すべての児童が安心して学び、自分らしく成長できるよう、学校経営の改善につながる提言を継続していく。こうした取組の積み重ねが、市全体の教育力を高め、未来を担う児童の確かな成長につながると考えている。



〈社会との連携・協働：家庭・地域社会等との連携・協働と学校間連携の推進〉

育ちと学びをつなぐ幼保小連携

～離れていても無理なくできる連携を目指して～

提案者 広島県広島市立長束小学校長 吉 岡 奈緒美

1 はじめに

幼保小間における段差や切れ目、いわゆる「小1プロブレム」が叫ばれて久しい。本市では、乳幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図るため、市立園・小学校から「幼保小連携推進園・校」に指定され、接続や連携の在り方について実践研究を進めている。

本校は昨年度、長束幼稚園と共に本市の幼保小連携推進園・校に指定された。これまでの指定園・校は隣接した場所等、連携しやすい環境にあったが、本校と長束幼稚園は約800mも離れている。そんな本校が指定を受ける際のミッションは「距離が離れていても可能な連携を探る」こと。さらに、学区内には公・私立幼保が4園あるため、それら相互の連携（横のつながりづくり）も探ることになった。しかし、昨年度、本校がそれまで推進していた研究は、まとめとなる3年次であったため、その内容を幼保小連携と結びつけることが難しく、2本立てでスタートせざるを得なかった。よって、指定1年目は「円滑な連携のために教職員の共通認識を形成すること」「幼保小連携について知り、無理なくできることをやってみる」を目標に取り組んだ。

2 研究の概要

(1) 教職員間の連携

① 合同研修会の実施

教職員が幼保小連携への共通理解を図るために大学教授や指導主事等の講師を招いて合同理論研修会を行い、幼保小接続の必要性や円滑な幼保小連携について学んだ。

また、年間を通して行うミニ研修に幼稚園の教職員にも時間が許せば参加してもらった。一緒に研修することでそれぞれの立場からの意見交流ができ、子ども理解の幅を広げたり子どもを見取る視点を共有したりすることができた。また、教職員同士が顔見知りになることで、話しやすい関係を築くことができた。

② 学校教職員の園訪問

教職員が数回園を訪問し、保育の見学後、協議会に参加した。保育の様子を初めて見る教職員もあり、互いの教育や環境の違いを知ることによって子どもへの言葉かけの仕方や、活動の見通しをもたせるための環境づくりについて考えるきっかけとなった。

③ 園と学校をつなぐ派遣教員

派遣教員とは指定校に加配される幼稚園教諭免許状を持つ小学校教諭のことである。派遣教員は週4日幼稚園に勤務し、保育に携わると同時に他園を訪問する機会を多く得た。保育の様子を観察し各々の園の取組を小学校教職員に向けた「架け橋通信」を通して伝えるほか、接続カリキュラムの作成や子ども同士の交流会等のコーディネーター役も担った。

(2) 園児と児童の交流

① 5歳児と1年生の交流

- ・虫探し…幼稚園と場所・時刻を合わせて現地集合し、一緒に活動した。
- ・「〇〇に会いに行こう！」…日々の教育や保育を通してできるかわりを見つけ、学校・園で飼育している生き物（クジャク・



ウサギ等)にそれぞれが会いに行く活動を実施した。

- ・5歳児と1年生の交流会…近隣4園と一緒に実施。事前に双方に一緒にしたいことを聞き、目的意識をもって学習を進めた。

② 5歳児と5年生の交流

- ・ながつかなかよし交流会…12月と3月に実施。担任同士が事前に打ち合わせを行い、5歳児には小学校入学に向けて安心感をえられるように、5年生には最高学年になることへの自覚や思いやりの気持ちをもちつという互いのめあてを明確にして実施した。

(3) 架け橋期に安心感をもちつための取組

① 幼稚園教諭による読み聞かせ

5月に幼稚園教諭が小学校で絵本の読み聞かせや手遊びを行った。不安が多いこの時期にお世話になった園の先生に会うことで子どもの気持ちを和ませることができた。

② 授業見学会の実施

11月の「学校へ行こう週間」に4園の5歳児とその保護者を対象に1年生の授業見学会を行った。多くの参加があり、保護者からは「小学校生活の様子が分かった」「入学への不安が少し減った」との声が寄せられた。

③ 横のつながりを意識した活動

長束幼稚園の行事に近隣の3園を招いて一緒に活動したり、小学校での1・5年生との交流会に4園が一緒に参加したりした。入学前に4園の園児が交流することで顔見知りになり、入学後の安心感につながることを期待した。4月、顔見知りのクラスメイトと出会い、安心の表情を見せる子どももいた。

3 校長の役割

(1) 持続可能な取組へのマネジメント

指定校決定後、教職員に戸惑いが見られたため、1年目は幼保小連携への理解を少しずつ深めていくことを目標とした。また、「派遣教員がいるからできること」よりも「派遣教員がいなくなってもできること」が大

切と考え、取組を考える際にはお互いが無理をしないことや既存の行事に組み入れることで持続可能な取組になるよう助言した。

(2) 派遣教員への支援

初任から4年目の教員が派遣教員となった。当初は慣れない環境や園での人間関係に不安を抱いていたので、週1日の小学校勤務の際に話を聞き、相談に乗るようにした。また、派遣教員が「やってみたい。」と考えたことはできる限り実行できるよう支援した。「無理なく、持続可能」なことに加え、近隣園の教職員に過度な負担をかけないように配慮することも伝えると、相手意識をもって企画をすることができるようになった。

(3) 園・関係機関との連携

派遣教員や推進リーダー、研究担当が動きやすいように園長と校長が連携を密にした。また、迷った時、不安を感じた時に相談し、指導を上げるように担当指導主事とも連携を密にした。園長と校長、担当指導主事だけでなく、教職員と指導主事の関係も深まり、気軽に指導や助言を受けることができた。

4 おわりに

指定1年目の取組を終えて、教員同士がつながること、園での活動が小学校の学習にどうつながるのかをお互いが知ること、特別なことではなく普段の教育活動の中に組み入れることで離れていても無理のない連携ができると実感した。また、連携によって子どもや保護者の入学への不安を軽減することができるということも分かった。

今年度は、研究主題を「一人ひとりが安心して自分を表現できる集団づくり」と設定し、園・校ともに「安心感」をキーワードに取り組んでいる。入学後に安心して学べるように、また、幼児期に身に付けた力を小学校でも生かし、さらに伸ばしていけるようにこれからも幼保小で連携しながら進んでいきたい。



メ

モ

Handwriting practice lines consisting of multiple sets of three horizontal lines (top solid, middle dashed, bottom solid) for letter formation.

大会役員



●阿伏兎観音

沼隈半島の南端、阿伏兎岬の突端に建つ臨済宗の寺院です。岬の断崖絶壁に建つ朱塗の観音堂は、自然と調和した景観を作り出しています。観音堂は元亀年間（1570年～1573年）に毛利輝元によって創建され、国の重要文化財に指定されています。

●明王院

愛宕山中腹近くにあり、眼下に草戸千軒町遺跡を見渡す明王院は中道山円光寺明王院と称し、国宝の「本堂」「五重塔」を有する真言宗大覚寺派の古刹として知られています。もとは西光山理智院常福寺といい、807年、弘法大師の開基と伝えられています。



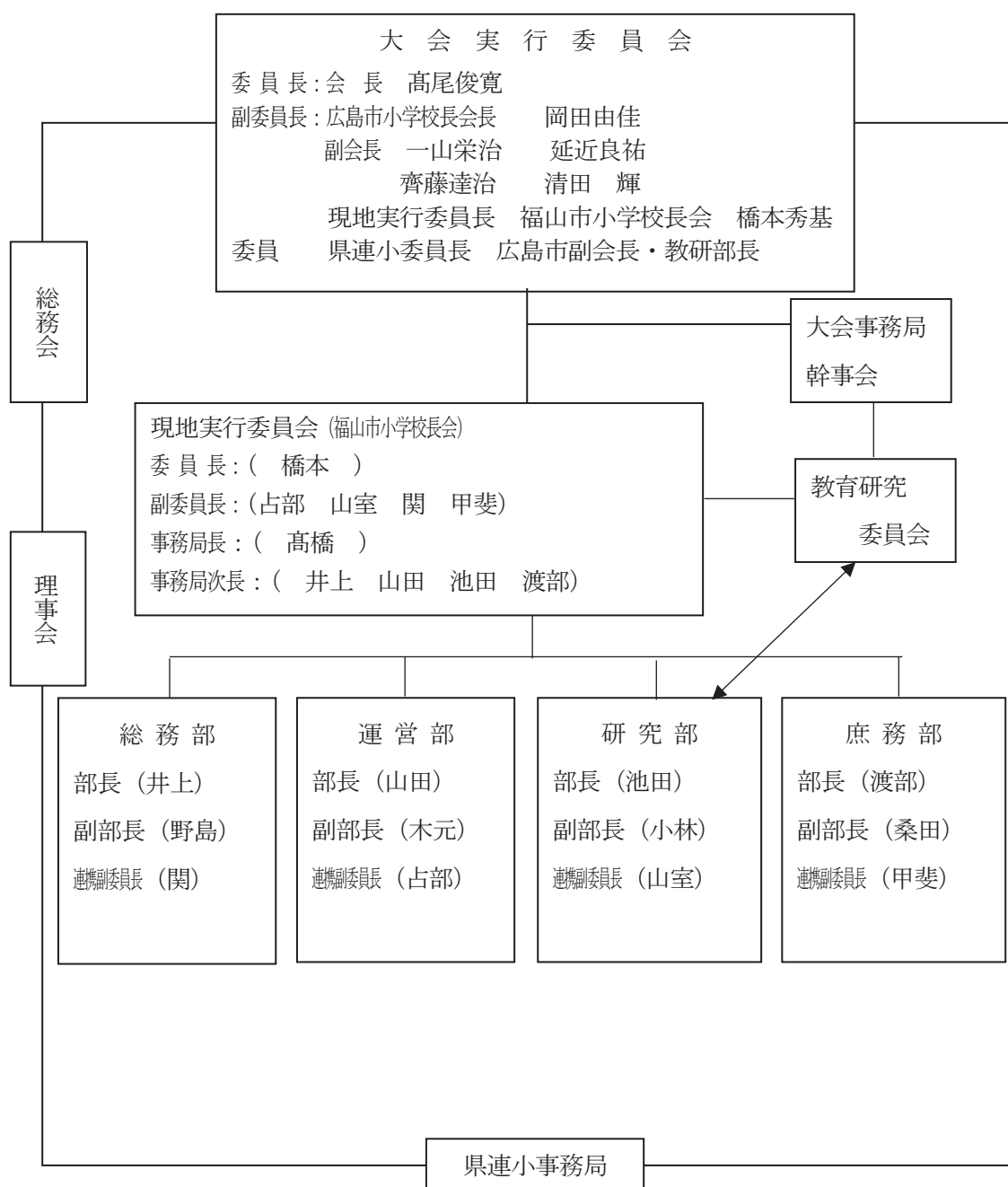


第 73 回 中国地区小学校長会教育研究大会広島大会運営組織

大会役員

大会会長	広島県連合小学校長会会長
大会副会長	岡山 鳥取 島根 山口 各県小学校長会会長
大会役員	岡山 鳥取 島根 山口 広島 各県小学校長会副会長，現地実行委員長

大会運営組織





大会役員

○大会会長	広島県連合小学校長会会長	高尾 俊寛	福山市立松永小学校
○大会副会長	岡山県小学校長会会長	八田 卓二	岡山市立芳泉小学校
	鳥取県小学校長会会長	岡本 修典	鳥取市立日進小学校
	島根県小学校長会会長	片寄 泰史	松江市立内中原小学校
	山口県小学校長会会長	原 浩一郎	宇部市立恩田小学校
○大会委員	広島県連合小学校長会副会長	一山 栄治	庄原市立東小学校
		延近 良祐	福山市立遺芳丘小学校
		齊藤 達治	廿日市市立阿品台西小学校
		清田 輝	三原市立本郷西小学校
	広島市小学校長会会長	岡田 由佳	広島市立袋町小学校
	広島県連合小学校長会現地実行委員長（福山市小学校長会）	橋本 秀基	福山市立水呑小学校
	岡山県小学校長会副会長	奥橋 健介	岡山市立吉備小学校
		片山 淳一	赤磐市立磐梨小学校
		藤野 博	倉敷市立倉敷東小学校
		春名 章範	美作市立勝田小学校
	鳥取県小学校長会副会長	安本 雅紀	鳥取市立浜坂小学校
		矢田 佳代	倉吉市立打吹小学校
		三上 浩樹	日南町立日南小学校
	島根県小学校長会副会長	川本 徹	松江市立川津小学校
		和泉 雅史	出雲市立灘分小学校
		川津 康正	大田市立大田小学校
	山口県小学校長会副会長	右田 俊博	山口市立大殿小学校
		中谷 仁美	防府市立勝間小学校
		山田 孝之	下関市立豊浦小学校



大会実行委員

○委員長	広島県連合小学校長会会長	高尾 俊寛	福山市立松永小学校
○副委員長	広島県連合小学校長会副会長	一山 栄治	庄原市立東小学校
	広島市小学校長会会長	岡田 由佳	広島市立袋町小学校
	広島県連合小学校長会副会長	延近 良祐	福山市立遺芳丘小学校
		齊藤 達治	廿日市市立阿品台西小学校
		清田 輝	三原市立本郷西小学校
	広島大会現地実行委員長	橋本 秀基	福山市立水呑小学校
○委員	広島市小学校長会副会長	岡崎 貴弘	広島市立川内小学校
	広島市小学校長会教育研究部長	野上 真二	広島市立宇品小学校
	広島県連合小学校長会教育研究委員長	花田 修	福山市立加茂小学校
	広島県連合小学校長会教育調査委員長	藤井 弘之	尾道市立三幸小学校
	広島県連合小学校長会人事給与委員長	香川 隆太	呉市立明立小学校
	広島県連合小学校長会広報委員長	増上 正美	東広島市立豊栄小学校
○大会事務局	広島県連合小学校長会幹事長	宮里 洋司	府中町立府中北小学校
	広島県連合小学校長会副幹事長	竇戸 浩之	福山市立瀬戸小学校
	広島県連合小学校長会幹事	小迫 賢志	東広島市立龍王小学校
		赤木 実	三次市立十日市小学校
		金子 恵子	尾道市立高見小学校
		池田 明子	福山市立駅家西小学校
		末岡 信子	廿日市市立金剛寺小学校
		栗栖 智弘	安芸高田市立甲田小学校
		奥本 雅幸	呉市立昭和南小学校
	広島県連合小学校長会事務局長	芳川 雅行	
	広島県連合小学校長会事務局員	藤井 桂子	

教育研究委員会

○委員長	花田 修	福山市立加茂小学校		
○副委員長	三島 寛子	福山市立戸手小学校		
○委員	大石 充洋	福山市立津之郷小学校	菊地あかね	呉市立三坂地小学校
	吉田 美和	竹原市立竹原小学校	柳川 大蔵	廿日市市立地御前小学校
	菅 ちあき	東広島市立川上小学校	河野 諭恵	江田島市立鹿川小学校
	高木 和希	海田町立海田小学校	児玉 聡子	安芸高田市立吉田小学校
	福原喜美子	三原市立須波小学校	石本 美喜	尾道市立美木原小学校
	宮本 毅	世羅町立甲山小学校	佐々木 孝	三次市立三和小学校
	赤木 智香	庄原市立高野小学校		



現地実行委員会

○現 地 事 務 局	現 地 実 行 委 員 長	橋本 秀基	福山市立水呑小学校
	現 地 副 実 行 委 員 長	占部 享	福山市立緑丘小学校
		山室 和恵	福山市立坪生小学校
		関 知恵子	福山市立湯田小学校
		甲斐 和子	福山市立常石ともに学園
	現 地 事 務 局 長	高橋富美代	福山市立御幸小学校
	現 地 事 務 局 次 長	井上 博貴	福山市立新涯小学校
		山田 裕之	福山市立常金丸小学校
		池田 明子	福山市立駅家西小学校
渡部 智子		福山市立南小学校	
現 地 実 行 委 員 会 会 計	田村 真澄	福山市立宜山小学校	
○総 務 部	総 務 部 長	井上 博貴	福山市立新涯小学校
	総 務 部 副 部 長	野島 史吉	福山市立想青学園
	連 携 副 委 員 長	関 知恵子	福山市立湯田小学校
	総 務 部 員	古谷 雅裕	福山市立光小学校
		清水 正憲	福山市立千田小学校
		望月 誠治	福山市立熊野小学校
		田中ひとみ	福山市立金江小学校
		塚本 智一	福山市立曙小学校
		木坂奈保子	福山市立西深津小学校
		本宮 政尚	福山市立新市小学校
		藤井 義弘	福山市立神辺小学校
加藤 由美	福山市立竹尋小学校		
○運 営 部	運 営 部 長	山田 裕之	福山市立常金丸小学校
	運 営 部 副 部 長	木元 直樹	福山市立川口小学校
	連 携 副 委 員 長	占部 享	福山市立緑丘小学校
	運 営 部 員	松岡 浩之	福山市立東小学校
		小原 憲治	福山市立霞小学校
		和田 亘	福山市立手城小学校
		高橋 典子	福山市立泉小学校
		福田 裕治	福山市立蔵王小学校
		杉本 愛弓	福山市立赤坂小学校
		青山 俊美	福山市立箕島小学校
福場 清文		福山市立高島小学校	
甲斐 敏子	福山市立柳津小学校		



○運 営 部	運 営 部 員	清水弓記子	福山市立伊勢丘小学校
		高田美和子	福山市立多治米小学校
		柳原 伸一	福山市立福相小学校
		猿渡久美子	福山市立桜丘小学校
		村上 政紀	福山市立長浜小学校
		東 真由美	福山市立野々浜小学校
		小畠 仁美	福山市立久松台小学校
		灰原 久美	福山市立日吉台小学校
		本岡 寛	福山市立道上小学校
○研 究 部	研 究 部 長	池田 明子	福山市立駅家西小学校
	研 究 部 副 部 長	小林 貴子	福山市立中条小学校
	連 携 副 委 員 長	山室 和恵	福山市立坪生小学校
	研 究 部 員	田村 泰子	福山市立旭小学校
		來山 桂子	福山市立引野小学校
		森 正之	福山市立大津野小学校
		小坂 京	福山市立春日小学校
		徳重 富雄	福山市立神村小学校
		本田 光洋	福山市立本郷小学校
		加藤 聡	福山市立旭丘小学校
		吉岡美和子	福山市立駅家小学校
		藤里 昌子	福山市立山手小学校
		田中 勤子	福山市立大谷台小学校
		清水 早苗	福山市立明王台小学校
		河田 節生	福山市立駅家北小学校
○庶 務 部	庶 務 部 長	渡部 智子	福山市立南小学校
	庶 務 部 副 部 長	桑田 貴子	福山市立西小学校
	連 携 副 委 員 長	甲斐 和子	福山市立常石ともに学園
	庶 務 部 員	作田由起子	福山市立深津小学校
		近藤 裕弥	福山市立樹徳小学校
		飯泉 晴美	福山市立藤江小学校
		藤井 真爾	福山市立有磨小学校
		田村 真澄	福山市立宜山小学校
		樋上 浩子	福山市立幕山小学校
		湯川美貴子	福山市立川口東小学校
		山上 秀樹	福山市立網引小学校
		藤田真有美	福山市立山南小学校
		川崎真由美	福山市立御野小学校

参加者一覧



●福山琴

福山は琴の生産地として有名です。その歴史は古く、水野勝成が福山藩主だった時代に始まります。歴代の藩主が奨励したことから、城下町では歌謡、音曲が盛んに行われたと伝えられています。

●備後絣

日本三大絣のひとつであり、昭和30年代には年間300万反も生産され全国一の絣の生産量を誇っていました。1992年（平成4年）には「広島県指定伝統的工芸品」に登録されています。



●松永げた

明治時代初期、松永では製塩業が盛んでした。塩を煮詰める薪を使って下駄を作ったのが松永下駄の始まりといわれています。1955年頃のピーク時には年間5,600万足の全国一の生産量を誇っていました。



第 73 回 中国地区小長会教育研究大会広島大会 参加者名簿

分科会：①〈経営ビジョン〉 ②〈組織・運営〉

77 名：14 グループ

会 場：福山市立大学 港町キャンパス 中講義室 B

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※
グループ司会者（司会順 司 1・司 2） グループ記録者（記録順 記 1・記 2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	鳥取市立大正小	山本 紀子	4	司 2
2	鳥取	鳥取市立賀露小	西堀 明	13	司 2
3	鳥取	倉吉市立小鴨小	川上 典孝	14	記 2
4	鳥取	大山町立大山小	萩 治公	2	司 2
5	岡山	岡山市立浦安小	藤澤 正宏	3	
6	岡山	岡山市立牧石小	西上 慶一	10	記 2
7	岡山	津山市立清泉小	植月 純子	6	記 2
8	岡山	和気町立佐伯小	山本 和宏	9	記 2
9	岡山	倉敷市立倉敷東小	藤野 博	1	※
10	岡山	倉敷市立菅生小	平尾 嘉克	11	
11	岡山	倉敷市立庄小	井上 靖信	7	記 2
12	岡山	笠岡市立城見小	平田日出子	12	
13	岡山	笠岡市立大島小	村上 裕子	13	記 2
14	岡山	総社市立池田小	石井 恭子		○
15	岡山	総社市立新本小	志田 圭子		◎
16	岡山	総社市立常盤小	平田 治	5	司 2
17	島根	雲南市立西日登小	曾田 史郎	1	司 2
18	島根	安来市立母里小	三浦 慶子	3	司 2
19	島根	出雲市立中部小	横田 輝昭	4	
20	島根	隠岐の島町立西郷小	中西 直也	6	司 2
21	島根	松江市立八雲小	杉谷 崇	7	司 2
22	島根	大田市立久手小	生越 徹	8	司 2
23	島根	益田市立鎌手小	松本 徹	14	司 2
24	山口	山口市立興進小	眞野 直洋	8	記 2
25	山口	柳井市立小田小	宮川 修	2	
26	山口	萩市立佐々並小	上原 健司	5	記 2
27	山口	宇部市立厚南小	永久 亮	9	司 2
28	山口	宇部市立万倉小	深田 秀郷	10	司 2
29	山口	下関市立豊東小	矢ヶ部哲也	11	記 2
30	山口	阿武町立福賀小	吉谷 亮	12	司 2
31	広島	広島市立神崎小	池田 剛	2	
32	広島	広島市立美鈴が丘小	有馬 朝路	13	司 1
33	広島	広島市立古田台小	吉野 賢一	1	記 1
34	広島	広島市立瀬野小	石河 良典	6	司 1
35	広島	広島市立牛田小	花岡 潔	3	記 1
36	広島	広島市立伴東小	中川 祥子	10	記 1
37	広島	広島市立三入東小	西田 理恵	12	司 1
38	広島	広島市立宇品小	野上 真二	4	
39	広島	広島市立中筋小	田口 秀隆	11	司 2
40	広島	広島市立倉掛小	宮本 文雄	5	記 1
41	広島	竹原市立立中通小	元永 圭一	6	記 1
42	広島	東広島市立高美が丘小	吉岡 尚史	1	司 1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	東広島市立平岩小	平林 明美	5	司 1
44	広島	東広島市立豊栄小	増上 正美	12	記 1
45	広島	東広島市立木谷小	加藤 燈恵	13	記 1
46	広島	廿日市市立宮内小	片平 千恵	3	
47	広島	廿日市市立佐方小	谷本 直子	4	記 1
48	広島	廿日市市立吉和小	金原 直樹	11	記 1
49	広島	呉市立倉橋小	下河原しのぶ	1	記 2
50	広島	呉市立昭和西小	安宗 誠	14	司 1
51	広島	呉市立昭和南小	奥本 雅幸	13	
52	広島	呉市立郷原小	濱咲 美佐	12	記 2
53	広島	三次市立神杉小	玉木 昌知	2	記 2
54	広島	三次市立田幸小	藤井 俊介	8	司 1
55	広島	三次市立栗屋小	高槻 雄志	9	記 1
56	広島	北広島町立壬生小	藤田 一友	2	記 1
57	広島	庄原市立東小	一山 栄治	14	※
58	広島	安芸郡立府中小	青木真智子	2	司 1
59	広島	尾道市立向東小	渡辺住味子	3	記 2
60	広島	尾道市立高須小	豊田 浩矢	10	司 1
59	広島	尾道市立栗原小	横松 和義	8	記 1
62	広島	世羅町立世羅小	小川 美樹	4	記 2
63	広島	安芸高田市立愛郷小	宮地 嗣	7	司 1
64	広島	三原市立木原小	村上 信孝	7	記 1
65	広島	三原市立幸崎小	村田 耕一	11	司 1
66	広島	府中市立栗生小	梅田 法美	9	司 1
67	広島	府中市立南小	花田 三恵	14	記 1
68	広島	福山市立引野小	來山 桂子	11	☆
69	広島	福山市立福相小	柳原 伸一	3	司 1
70	広島	福山市立東小	松岡 浩之	1	☆
71	広島	福山市立想青学園	野島 史吉	4	司 1
72	広島	福山市立樹徳小	近藤 裕弥	14	
73	広島	福山市立戸手小	三島 寛子		★
74	広島	福山市立長浜小	村上 政紀		◎
75	広島	福山市立赤坂小	杉本 愛弓		○
76	広島	福山市立旭小	田村 泰子		●

【会場巡回】

77	広島	福山市立水呑小	橋本 秀基		※
----	----	---------	-------	--	---



分科会：③〈評価・改善〉

76名：14グループ

会 場：福山市立大学 港町キャンパス 中講義室 C

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※

グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	琴浦町立聖郷小	中本 祐二	4	司2
2	鳥取	鳥取市立修立小	長見 圭祐	9	司2
3	鳥取	岩美町立岩美北小	田中 智子	10	司2
4	鳥取	日南町立日南小	三上 浩樹	11	※
5	岡山	浅口市立鴨方東小	川上 展弘	1	
6	岡山	岡山市立加茂小	北原 浩子	2	記2
7	岡山	岡山市立旭東小	延堂 雅美	3	記2
8	岡山	赤磐市立磐梨小	片山 淳一	4	※
9	岡山	津山市立喬松小	立石 明美	5	記2
10	岡山	美咲町立加美小	秋元 紀幸	6	司2
11	岡山	瀬戸内市立美和小	加賀康二郎	8	記2
12	岡山	美作市立大原小	近藤 健二	9	記2
13	岡山	高梁市立富家小	福田 知子	12	
14	岡山	新見市立上市小	藤原 貴枝	13	
15	岡山	倉敷市立乙島小	武政 和茂	14	記2
16	島根	浜田市立三隅小	佐藤 安治	1	記2
17	島根	出雲市立高松小	馬庭 義久	7	司2
18	島根	邑南町立石見東小	上田 忠則	12	司2
19	島根	海士町立福井小	道川 一史	13	司2
20	島根	松江市立朝酌小	伊達 悟		○
21	島根	松江市立出雲郷小	濱岡 宏行		◎
22	山口	岩国市立東小	梅森 芳典	2	司2
23	山口	周防大島町立久賀小	貴船 光	3	司2
24	山口	山陽小野田市立高泊小	安重 美穂	5	司2
25	山口	山口市立嘉川小	宮崎 康生	6	記2
26	山口	下関市立生野小	上野 美枝	7	記2
27	山口	長門市立日置小	西村 史代	8	司2
28	山口	阿武町立阿武小	佐々木耕治	10	記2
29	山口	防府市立小野小	瀧口 稔	11	司2
30	山口	宇部市立琴芝小	磯崎 愛子	14	司2
31	広島	広島市立白島小	村中真由美	7	司1
32	広島	広島市立口田小	馬淵 敏典	2	
33	広島	広島市立畑賀小	横田 佳栄	6	記1
34	広島	広島市立原小	山本真里子	4	
35	広島	広島市立川内小	岡崎 貴弘	8	司1
36	広島	広島市立矢賀小	里本 孝文	9	記1
37	広島	広島市立五日市観音西小	吉田 昌史	10	司1
38	広島	広島市立井口台小	久保田祐徳	11	記2
39	広島	広島市立青崎小	久保田みどり	12	記2
40	広島	広島市立筒瀬小	小西 正浩	13	司1
41	広島	東広島市立福富小	小島 美樹	6	司1
42	広島	東広島市立西条小	神笠 一義	2	記1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	東広島市立寺西小	小川 寛	1	司1
44	広島	東広島市立小谷小	松下 篤	14	記1
45	広島	廿日市市立宮島小	伊豆田智子	13	記1
46	広島	呉市立両城小	安部ほずみ	11	司1
47	広島	呉市立呉中央小	横山 眞澄	4	司1
48	広島	呉市立広南小	山田 幸治	2	
49	広島	呉市立白岳小	関藤 直子	5	記1
50	広島	呉市立波多見小	蒲原 尚博		◎
51	広島	呉市立広小	後東 貴之		○
52	広島	呉市立豊小	清水 晃子		●
53	広島	呉市立三坂地小	菊地あかね		★
54	広島	三次市立三次小	龍王 由美	12	司1
55	広島	三次市立作木小	穂山 英嗣	11	記1
56	広島	尾道市立御調西小	横松太江子	1	記1
57	広島	尾道市立因島南小	土井 尚美	8	記1
58	広島	尾道市立重井小	曾根奈美枝	14	
59	広島	尾道市立因北小	山本 みき	3	
60	広島	三原市立田野浦小	岡田 恵子	3	記1
59	広島	三原市立沼田東小	永井美智子	7	記1
62	広島	江田島市立三高小	表田啓太郎	1	司2
63	広島	庄原市立口和小	山口 美穂	3	
64	広島	北広島町立本地小	山城 美和	4	記1
65	広島	世羅町立せらひがし小	平尾 浩一	4	記2
66	広島	府中町立府中中央小	猪原 一郎	14	司1
67	広島	安芸高田市立八千代小	出元 永子	13	記2
68	広島	竹原市立竹原西小	藏本 利恵	9	司1
69	広島	府中市立旭小	矢野 康博	12	記1
70	広島	府中市立上下北小	木村 亮三	10	記1
71	広島	福山市立川口小	木元 直樹	1	☆
72	広島	福山市立春日小	小坂 京	11	☆
73	広島	福山市立曙小	塚本 智一	2	司1
74	広島	福山市立竹尋小	加藤 由美	5	司1
75	広島	福山市立高島小	福場 清文	3	司1
76	広島	福山市立幕山小	樋上 浩子	14	



分科会：④〈知性・創造性〉

50名：7グループ

会 場：福山市立大学 小松安弘記念館 多目的 A

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※

グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	倉吉市立明倫小	長田 美穂	7	司2
2	鳥取	鳥取市立富桑小	濱部 有希	2	司2
3	岡山	井原市立青野小	荒川 光平	5	
4	岡山	岡山市立山南学園	太田 圭一	1	
5	岡山	倉敷市立倉敷西小	原 新吾	3	
6	岡山	倉敷市立帯江小	木谷 秀史	4	
7	岡山	津山市立高野小	高岡 昌司	6	
8	岡山	美作市立勝田小	春名 章範	2	※
9	島根	安来市立能義小	井上 浩子	1	司2
10	島根	益田市立東仙道小	房野 伸枝	6	司2
11	島根	奥出雲町立横田小	千原 一弘		◎
12	島根	奥出雲町立仁多小	三島 啓介		○
13	山口	下関市立豊浦小	山田 孝之	7	※
14	山口	下松市立下松小	清角 剛	1	記2
15	山口	光市立上島田小	福田 康子	4	司2
16	山口	光市立島田小	森本 博美	3	司2
17	山口	周南市立櫛浜小	清水 聡美	5	司2
18	山口	周南市立今宿小	前川 孝	2	記2
19	広島	府中町立府中東小	花井 恵美	7	司1
20	広島	呉市立吉浦小	吉原 知美	5	記1
21	広島	広島市立可部小	掛田 智花	6	記2
22	広島	広島市立河内小	古城 裕司		○
23	広島	広島市立基町小	森貞小百合	1	記1
24	広島	広島市立己斐上小	岡本 順子	4	記1
25	広島	広島市立五月が丘小	中澤 真子		◎
26	広島	広島市立荒神町小	大和 千尋	3	記1
27	広島	広島市立高須小	戸田 美鈴	5	司1
28	広島	広島市立高南小	坂田きよみ	2	記1
29	広島	広島市立春日野小	植田恵理子	7	記1
30	広島	広島市立翠町小	竹内 教子	3	
31	広島	広島市立天満小	東 健一郎	5	
32	広島	広島市立湯来南小	小西香代子	7	
33	広島	広島市立尾長小	西村 則生	4	記2
34	広島	広島市立毘沙門台小	越智 武志	1	司1
35	広島	広島市立本川小	森川 敦子	2	
36	広島	広島市立矢野小	荻野 朋子	6	
37	広島	三原市立中之町小	石川 智章	3	記2
38	広島	三次市立川地小	原田 和明	3	司1
39	広島	廿日市市立原小	青木 暁夫	5	記2
40	広島	東広島市立御園宇小	石川 真紀	7	記2
41	広島	東広島市立入野小	徳満 謙三	4	司1
42	広島	尾道市立瀬戸田小	砂田 文美	2	司1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	竹原市立竹原小	吉田 美和		★
44	広島	大崎上島町立東野小	加藤千香恵	6	記1
45	広島	福山市立蔵王小	福田 裕治	1	☆
46	広島	福山市立坪生小	山室 和恵	4	☆
47	広島	福山市立道上小	本岡 寛	6	司1
48	広島	福山市立本郷小	本田 光洋		●

【会場巡回】

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
49	島根	松江市立内中原小	片寄 泰史		※
50	広島	福山市立加茂小	花田 修		※



分科会：⑤〈豊かな人間性〉 ⑥〈健やかな体〉
会 場：福山市立大学 小松安弘記念館 講義室 A

60名：9グループ

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※
グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	鳥取市立美保南小	濱橋 太	2	司2
2	鳥取	倉吉市立社小	筏津 孝行	6	司2
3	鳥取	倉吉市立打吹小	矢田 佳代	8	※
4	岡山	岡山市立岡南小	奥山 裕史	7	
5	岡山	岡山市立津島小	花房 明彦	8	記2
6	岡山	倉敷市立中庄小	水城 弘之	1	記2
7	岡山	倉敷市立万寿東小	佐野 薫	6	
8	岡山	真庭市立川東小	清水さとみ	2	
9	岡山	瀬戸内市立行幸小	田中 耕二	3	
10	岡山	笠岡市立吉田小	佐藤 公三	4	記2
11	岡山	玉野市立胸上小	上杉 将	5	記2
12	岡山	玉野市立田井小	川淵 玉美		○
13	岡山	玉野市立築港小	片山 昇		◎
14	島根	川本町立川本小	河村 恭子	3	記2
15	島根	出雲市立神戸川小	樋野 育司	4	司2
16	島根	出雲市立朝陽小	山本 芳正	9	司2
17	島根	邑南町立阿須那小	高木 優	5	司2
18	山口	防府市立勝間小	中谷 仁美	1	※
19	山口	下松市立東陽小	倉光 範江	2	記2
20	山口	宇部市立常盤小	松本 悦子	3	司2
21	山口	岩国市立藤河小	村中 晶子	6	
22	山口	長門市立俵山小	松本 成生	7	司2
23	山口	下関市立垢田小	藤本 眞也	8	司2
24	山口	山口市立大歳小	門岡 裕二	9	記2
25	広島	安芸高田市立美土里小	児玉 克恵	4	司1
26	広島	大竹市立大竹小	大井 一徳	8	司1
27	広島	尾道市立吉和小	福島 健作	3	記1
28	広島	呉市立仁方小	木村 智子	6	記2
29	広島	呉市立明立小	香川 隆太	7	記2
30	広島	廿日市市立地御前小	柳川 大蔵		★
31	広島	広島市立戸山小	藪田 知子	1	記1
32	広島	広島市立亀崎小	上野由美子	1	司1
33	広島	広島市立温品小	加藤 典子	2	記1
34	広島	広島市立仁保小	川口 大輔	3	
35	広島	広島市立久地南小	久保田 健	4	
36	広島	広島市立大町小	三吉 和恵	5	
37	広島	広島市立中島小	平井 史郎	6	記1
38	広島	広島市立藤の木小	尼子 博崇	7	
39	広島	広島市立楽々園小	高野 祥子	8	
40	広島	広島市立井口明神小	福田 諭子	9	
41	広島	東広島市立板城小	中野詠美子	2	
42	広島	東広島市立下黒瀬小	山上 孝	4	記1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	三原市立西小	徳重 宏美	9	司1
44	広島	三次市立布野小	一山 恭子	5	記1
45	広島	大崎上島町立木江小	望月 浩和	7	司1
46	広島	北広島町立芸北小	熊野 尚子	8	記1
47	広島	神石高原町立豊松小	藤井 裕子	5	司1
48	広島	神石高原町立三和小	平原 幹彦	7	記1
49	広島	神石高原町立神石小	寺田 知巳	9	
50	広島	神石高原町立油木小	六原 三枝		◎
51	広島	神石高原町立来見小	徳重 知子		○
52	広島	世羅町立せらにし小	小出 真里	9	記1
53	広島	世羅町立甲山小学校	宮本 毅		●
54	広島	府中町立府中北小	宮里 洋司	1	司2
55	広島	福山市立泉小	高橋 典子	1	☆
56	広島	福山市立金江小	田中ひとみ	2	司1
57	広島	福山市立西深津小	木坂奈保子	3	司1
58	広島	福山市立神村小	徳重 富雄	4	☆
59	広島	福山市立山南小	藤田真有美	5	
60	広島	福山市立霞小	小原 憲治	6	司1



分科会：⑦〈研究・研修〉

79名：12グループ

会 場：リーデンローズ 小ホール

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※
グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	鳥取市立湖山西小	三谷 一孝	1	司2
2	鳥取	倉吉市立関金小	赤嶋美和子	3	司2
3	鳥取	大山町立中山小	田中 恒治	11	記2
4	鳥取	智頭町立智頭小	池井 康二	12	司2
5	岡山	岡山市立旭操小	中藤 英二	2	記2
6	岡山	岡山市立西大寺小	原田 芳文	3	
7	岡山	岡山市立御野小	山口 洋香	12	記2
8	岡山	倉敷市立倉敷南小	平松 紀子	4	記2
9	岡山	倉敷市立中洲小	小松原祥司	5	
10	岡山	矢掛町立美川小	井上 明美	6	
11	岡山	井原市立大江小	柳本 直美	7	記2
12	岡山	津山市立向陽小	溝口 誠子	8	記2
13	岡山	真庭市立富原小	松浦 澄江	9	
14	岡山	美作市立江見小	高本ゆかり	10	
15	島根	松江市立宍道小	石橋 裕子	1	記2
16	島根	出雲市立灘分小	和泉 雅史	3	※
17	島根	江津市立郷田小	白井 朋己	6	司2
18	島根	江津市立渡津小	佐々木孝匡	7	司2
19	島根	雲南市立海潮小	須田 勉	9	司2
20	島根	安来市立比田小	京谷 雄輔	10	司2
21	島根	浜田市立原井小	毛利 尚子	11	司2
22	山口	岩国市立そお小	手嶋 泰寛	1	
23	山口	周防大島町立三蒲小	富樫 優子	2	司2
24	山口	山口市立大殿小	右田 俊博	4	※
25	山口	下関市立小串小	中野 達史		◎
26	山口	下関市立養治小	三谷 朱美		○
27	山口	下関市立宇賀小	吉井 唯生	5	司2
28	山口	萩市立多磨小	磯村亜由美	6	記2
29	山口	周南市立遠石小	中西 昭博	8	司2
30	広島	広島市立幟町小	田中 雅美	1	
31	広島	広島市立中山小	築地 陽子	2	
32	広島	広島市立皆実小	齊藤 啓一	3	記2
33	広島	広島市立草津小	久野 哲治	4	司2
34	広島	広島市立安東小	川村 桂子	5	記2
35	広島	広島市立大塚小	寺戸 典子	6	
36	広島	広島市立狩小川小	小西 潤児	7	司1
37	広島	広島市立鈴張小	瀬良みづほ	8	
38	広島	広島市立阿戸小	武本紀美子	9	記2
39	広島	広島市立彩が丘小	長岡 正敏	10	司1
40	広島	安芸高田市立高宮小	正田 政則	8	記1
41	広島	江田島市立大古小	加藤 幸恵	9	記1
42	広島	尾道市立三幸小	藤井 弘之	3	記1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	尾道市立日比崎小	播磨 寛宗	4	
44	広島	尾道市立栗原北小	神原 雅彦	8	司1
45	広島	呉市立阿賀小	堀江 大志	2	司1
46	広島	呉市立和庄小	佐々木智明	3	司1
47	広島	呉市立音戸小	中舛 智子	5	司1
48	広島	呉市立荘山田小	浅木森 宏	10	記2
49	広島	庄原市立東城小	小原 智子	1	記1
50	広島	庄原市立高小	佐々木理佳	4	司1
51	広島	庄原市立庄原小	永井 博美	11	記1
52	広島	庄原市立西城小	中田 弘幸	12	司1
53	広島	庄原市立総領小	川原 陽子		◎
54	広島	庄原市立永末小	岡崎 敏朗		○
55	広島	庄原市立高野小	赤木 智香		●
56	広島	竹原市立仁賀小	山田 浩美	11	司1
57	広島	廿日市市立友和小	安藤 聡子	2	記1
58	広島	廿日市市立宮園小	向井畑 透	5	
59	広島	廿日市市立津田小	小林 伸二	11	
60	広島	東広島市立龍王小	小迫 賢志	2	
59	広島	東広島市立志和小	玉里 周二	5	記1
62	広島	東広島市立八本松小	京谷 志穂	6	記1
63	広島	東広島市立高屋東小	弓場紫奈子	7	記1
64	広島	三原市立沼田小	佐伯 美佐	6	司1
65	広島	三原市立沼田西小	藤原登美子	9	司1
66	広島	三次市立和田小	古川 浩紀	4	記1
67	広島	三次市立十日市小	赤木 実	7	
68	広島	三次市立青河小	谷川 佳万	10	記1
69	広島	三次市立三和小	佐々木 孝		★
70	広島	安芸太田町立戸河内小	萩原 英子	12	記1
71	広島	海田町立海田西小	若尾 賢介	12	
72	広島	福山市立箕島小	青山 俊美	1	司1
73	広島	福山市立御幸小	高橋富美代		※
74	広島	福山市立日吉台小	灰原 久美		☆
75	広島	福山市立大谷台小	田中 勤子		☆
76	広島	福山市立藤江小	飯泉 晴美		
77	広島	福山市立常石とともに学園	甲斐 和子		

【会場巡回】

78	鳥取	鳥取市立日進小	岡本 修典		※
79	山口	宇部市立恩田小	原 浩一郎		※



分科会：⑧〈リーダー育成〉No. 1

会 場：リーデンローズ 大ホール

138名：21グループ

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※
グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	鳥取市立遷喬小	竹田 潤	1	司2
2	鳥取	鳥取市立宮ノ下小	河合 淳一	2	
3	鳥取	鳥取市立東郷小	池本 久美	3	司2
4	鳥取	米子市立弓ヶ浜小	笠井 和観	21	司2
5	鳥取	米子市立五千石小	山本 晶子		◎
6	鳥取	米子市立河崎小	石倉 和幸		○
7	岡山	井原市立木之子小	田原 里美	12	
8	岡山	岡山市立平島小	小野田美雪	1	
9	岡山	岡山市立第三藤田小	板倉真由美	2	司2
10	岡山	笠岡市立六島小	池田 誠	10	
11	岡山	倉敷市立万寿小	福永 誠二	7	
12	岡山	倉敷市立大高小	神原 尚洋	8	
13	岡山	瀬戸内市立邑久小	松本 総	5	
14	岡山	総社市立阿曾小	池上宗一郎	13	
15	岡山	高梁市立川上小	田口 英和	14	
16	岡山	玉野市立後閑小	岡村 彰紀	20	
17	岡山	津山市立一宮小	野村 恵美	15	記1
18	岡山	備前市立片上小	原田 敏和	4	
19	岡山	真庭市立天津小	木下 聡子	17	
20	岡山	真庭市立美川小	木村 好香	18	
21	岡山	鏡野町立大野小	勝田 俊行	16	
22	岡山	吉備中央町立加賀東小	三宅 智朗	3	
23	岡山	里庄町立里庄東小	森延 将司	9	
24	岡山	矢掛町立三谷小	風早 千帆	19	
25	島根	大田市立大田小	川津 康正	2	※
26	島根	浜田市立松原小	河本 誠二	5	司2
27	島根	浜田市立石見小	伊津 洋士	6	司2
28	島根	浜田市立美川小	南 博喜	7	
29	島根	浜田市立長浜小	花田 健司	8	司2
30	島根	浜田市立今福小	池辺恭一朗	17	司2
31	島根	浜田市立弥栄小	毛利 伸	18	記2
32	島根	浜田市立国府小	大石 学	19	記2
33	島根	浜田市立波佐小	星野 明洋	10	司2
34	島根	浜田市立雲城小	川神 幸	9	
35	島根	益田市立西益田小	大田 謙二	11	
36	島根	益田市立安田小	中尾 瑞紀	8	
37	島根	益田市立中西小	杉原 貴宏	13	記2
38	島根	益田市立益田小	河野 直樹	14	司2
39	島根	益田市立豊川小	品川 智成	16	記2
40	島根	益田市立桂平小	田原 昭久	17	記2
41	島根	益田市立高津小	田中 茂秋	21	記2
42	島根	松江市立雑賀小	常松 倫子	1	記2

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	島根	松江市立島根小	金山 剛志	11	記2
44	島根	安来市立社日小	越野 浩一	3	記2
45	島根	飯南町立頼原小	内田 誠	4	記1
46	島根	飯南町立志々小	竹下 透	5	記2
47	島根	飯南町立来島小	打田 敦志	6	記2
48	島根	飯南町立赤名小	常松 浩	7	記2
49	島根	邑南町立高原小	大野 寛人	13	司2
50	島根	邑南町立日貫小	齋藤 祥文	14	記2
51	島根	邑南町立市木小	小林 信	15	記2
52	島根	邑南町立口羽小	中村 卓夫	18	司2
53	島根	津和野町立木部小	小田川 治	15	司2
54	島根	津和野町立日原小	有福 保	19	司2
55	島根	津和野町立津和野小	北野 憲民	20	司2
56	島根	美郷町立大和小	原 拓	12	記2
57	島根	美郷町立邑智小	佐々本 茂	16	司2
58	島根	吉賀町立蔵木小	並河 智之	9	司2
59	島根	吉賀町立柿木小	岩崎 伸史	12	司2
60	山口	岩国市立米川小	柳本 美樹	12	
59	山口	岩国市立河内小	松尾 佳子	21	
62	山口	宇部市立見初小	吉田 睦美	9	記2
63	山口	下関市立岡枝小	関野 貴司	10	記2
64	山口	周南市立富田西小	長安 邦浩	5	
65	山口	長門市立深川小	東福 裕康	11	司2
66	山口	萩市立育英小	重永美津子	6	
67	山口	光市立室積小	片山なるみ	20	記2
68	山口	防府市立右田小	加藤 祐之	7	司2
69	山口	防府市立中関小	田中 秀史	8	記2
70	山口	柳井市立平郡東小	大川 健次	2	記2
71	山口	田布施町立田布施西小	檜室 豊	4	司1
72	広島	広島市立三入小	岡田 泰	1	
73	広島	広島市立袋町小	岡田 由佳	14	※
74	広島	広島市立戸坂城山小	小村 瑞与	2	記1
75	広島	広島市立井口小	三好 崇之	4	
76	広島	広島市立段原小	元田 学	6	
77	広島	広島市立似島小	杉本 悟志	3	
78	広島	広島市立山田小	足立 健	10	
79	広島	広島市立庚午小	城子 勇志	3	司1
80	広島	広島市立古市小	船原 浩司	7	記1
81	広島	広島市立山本小	河野 隆	19	
82	広島	広島市立東野小	中丸 敏至	20	
83	広島	広島市立石内北小	木原 和子	5	記1
84	広島	広島市立真亀小	栗末 満	10	司1



分科会：⑧〈リーダー育成〉No.2

会 場：リーデンローズ 大ホール

138名：21グループ

グ：グループ番号

 記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※
 グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
85	広島	広島市立中野小	内山 亜樹	15	
86	広島	広島市立八幡小	吉武 哲	13	
87	広島	広島市立五日市中央小	北浦 昌義	12	記1
88	広島	広島市立飯室小	西原 純子	1	司1
89	広島	広島市立安小	上田志津江	11	記1
90	広島	広島市立五日市観音小	西田 直樹	17	
91	広島	広島市立広瀬小	岩本 ゆか	16	司1
92	広島	広島市立早稲田小	小林 健吾	18	
93	広島	広島市立向洋新町小	高田 稔	21	
94	広島	広島市立比治山小	細川 洋	8	記1
95	広島	広島市立古田小	大上 隆之	20	司1
96	広島	広島市立原南小	牛尾 泰久	9	記1
97	広島	広島市立深川小	佐藤 由幸	21	記1
98	広島	広島市立船越小	菅川 雄二	18	記1
99	広島	江田島市立中町小	上本 真理	18	司1
100	広島	大竹市立小方小	木村 彰	13	記1
101	広島	尾道市立西藤小	小川 咲子	4	司1
102	広島	尾道市みなと小	土居 理恵	11	司1
103	広島	呉市立原小	梶本 浩史	2	司1
104	広島	呉市立坪内小	佐々木 恵	6	記1
105	広島	呉市立宮原小	木谷 順子	9	司1
106	広島	呉市立昭和中央小	平岡恵美子	15	司1
107	広島	呉市立安浦小	金山 美香	16	記1
108	広島	庄原市立比和小	石村 誠	12	司1
109	広島	廿日市市立大野西小	空田 由美	19	記1
110	広島	東広島市立原小	神重 修治	7	司1
111	広島	東広島市立三ツ城小	坂本 博司	17	記1
112	広島	東広島市立上黒瀬小	水戸美穂子	19	司1
113	広島	東広島市立高屋西小	今朝丸由香	20	記1
114	広島	東広島市立川上小	菅 ちあき		★
115	広島	府中市立国府小	長谷川奈保美	6	司1
116	広島	三原市立南小	延安 浩	3	記1
117	広島	三原市立大和小	石原 直久	21	司1
118	広島	三次市立吉舎小	森元 誠	1	記1
119	広島	三次市立河内小	平田 雄三	10	記1
120	広島	海田町立海田東小	小村 孝広	13	司1
121	広島	海田町立海田南小	西村 靖子		○
122	広島	海田町立海田小	高木 和希		●
123	広島	熊野町立熊野第三小	上田中泰子	14	記1
124	広島	熊野町立熊野第四小	中川 隆		◎
125	広島	坂町立小屋浦小	香川 千恵	17	司1
126	広島	府中町立府中南小	有崎 美紀	8	司1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
127	広島	福山市立新市小	本宮 政尚	4	記1
128	広島	福山市立千田小	清水 正憲	5	司1
129	広島	福山市立柳津小	甲斐 敏子	14	司1
130	広島	福山市立宜山小	田村 真澄	15	
131	広島	福山市立西小	桑田 貴子	16	
132	広島	福山市立新涯小	井上 博貴		
133	広島	福山市立南小	渡部 智子		
134	広島	福山市立桜丘小	猿渡久美子		☆
135	広島	福山市立駅家西小	池田 明子		☆
136	広島	福山市立川口東小	湯川美貴子		

【会場巡回】

137	岡山	岡山市立芳泉小	八田 卓二		※
138	広島	福山市立緑丘小	占部 享		



分科会：⑨〈学校安全〉

59名：9グループ

会 場：福山市立大学 小松安弘記念館 講義室 B

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※

グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	境港市立余子小	渡瀬慎太郎	8	司2
2	鳥取	境港市立中浜小	水嶋志都子		◎
3	鳥取	境港市立境小	高濱 禎彦		○
4	岡山	岡山市立平井小	怒田真由美	2	
5	岡山	岡山市立東疇小	安井 澄子	3	
6	岡山	岡山市立箕島小	祇園 元子	5	
7	岡山	倉敷市立箭田小	藤原 能成	9	
8	岡山	高梁市立高梁小	難波 徹	6	
9	岡山	津山市立河辺小	小林 圓裕	8	
10	岡山	新見市立神代小	船越 博昭	7	
11	岡山	備前市立香登小	市川 麻弥	1	
12	岡山	備前市立三石小	服部 真典	4	
13	島根	松江市立川津小	川本 徹	3	※
14	島根	吉賀町立朝倉小	植田 充一	1	司2
15	島根	吉賀町立七日市小	江角 貴行	5	司2
16	島根	吉賀町立六日市小	福原 英忠	9	司2
17	山口	岩国市立錦清流小	石本 知子	4	司2
18	山口	宇部市立新川小	中島 香織	1	記2
19	山口	下関市立角倉小	藤原 一	6	司2
20	山口	萩市立むつみ小	原田 武志	7	記2
21	山口	美祢市立麦川小	西村 雅美	2	司2
22	山口	山口市立良城小	兼坂 幸雄	5	記2
23	山口	和木町立和木小	村中 数子	3	司2
24	広島	広島市立伴小	堤 信之	1	司1
25	広島	広島市立千田小	有森 歩	2	
26	広島	広島市立みどり坂小	福田 忠且	2	記1
27	広島	広島市立福木小	熊谷謙次郎	3	記2
28	広島	広島市立大林小	津島 正司	4	記1
29	広島	広島市立観音小	末本 学	5	記1
30	広島	広島市立石内小	田中 英祥	6	
31	広島	広島市立井原小	鳴戸 由江	7	記1
32	広島	広島市立安北小	矢本 学	8	司1
33	広島	広島市立似島学園小	藤井 豊之	9	記1
34	広島	尾道市立向島中央小	丸山 裕子	1	記1
35	広島	尾道市立三成小	山口 喜之	9	記2
36	広島	尾道市立美木原小	石本 美喜		●
37	広島	呉市立警固屋小	坂本 晴則	4	記2
38	広島	呉市立明德小	石田 浩司	6	記1
39	広島	呉市立港町小	畠藤 晃	8	記2
40	広島	庄原市立小奴可小	森 一芳	6	記2
41	広島	竹原市立東野小	大隅 雅浩	7	司1
42	広島	熊野町立熊野第一小	梶 弘樹	6	司1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	三次市立君田小	湯浅 るみ	9	司1
44	広島	廿日市市立阿品台西小	齊藤 達治	7	※
45	広島	東広島市立乃美尾小	植野洋一郎	3	記1
46	広島	東広島市立三永小	若狭 弘子	7	司2
47	広島	東広島市立三津小	井上 陽子	8	記1
48	広島	三原市立本郷小	朝原啓一郎	2	記2
49	広島	三原市立深小	加藤 法子	4	司1
50	広島	三原市立鷺浦小	満田千恵子	5	
51	広島	三原市立本郷西小	清田 輝		○※
52	広島	三原市立須波小	福原喜美子		★
53	広島	三原市立小泉小	岡 明美		◎
54	広島	福山市立久松台小	小島 仁美	1	☆
55	広島	福山市立光小	古谷 雅裕	2	司1
56	広島	福山市立神辺小	藤井 義弘	3	司1
57	広島	福山市立山手小	藤里 昌子	4	☆
58	広島	福山市立湯田小	関 知恵子	5	司1

【会場巡回】

59	広島	福山市立松永小	高尾 俊寛		※
----	----	---------	-------	--	---



分科会：⑩〈危機対応〉

80名：13グループ

会 場：まなびの館ローズコム 大会議室

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※
グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	鳥取市立世紀小	森下 裕一	5	司2
2	鳥取	鳥取市立久松小	中村 礼子	8	司2
3	鳥取	米子市立伯仙小	西村 健吾	1	司2
4	鳥取	南部町立会見小	山本 育朗	3	司2
5	鳥取	北栄町立大栄小	西村 信彦	4	司2
6	岡山	浅口市立鴨方西小	藤井 洋子	11	
7	岡山	岡山市立御南小	浅野 摂子	2	
8	岡山	岡山市立甲浦小	名合 淳	4	
9	岡山	岡山市立庄内小	田岡 朋子	13	
10	岡山	倉敷市立老松小	根岸 正治	5	
11	岡山	倉敷市立葦高小	鮫島 正	12	
12	岡山	玉野市立第二日比小	杉本 哲也	3	
13	岡山	津山市立高田小	下山 智之	7	
14	岡山	津山市立南小	鹿島 康裕	10	
15	岡山	新見市立高尾小	正村 信子	9	
16	岡山	真庭市立落合小	岩崎 政則	8	記2
17	岡山	吉備中央町立加賀南小	金盛 優子	1	
18	島根	出雲市立出東小	秦 康人	13	司2
19	島根	雲南市立寺領小	森山 知之	10	司2
20	島根	大田市立朝波小	山本 裕子	9	司2
21	島根	浜田市立周布小	大達 高弘	7	司2
22	島根	益田市立都茂小	坂野 智之	11	司2
23	島根	松江市立鹿島東小	楨野 吉人	2	司2
24	島根	隠岐の島町立五箇小	中村 孝志	6	司2
25	山口	下関市立川棚小	藤附 一博	6	記2
26	山口	周南市立高水小	重岡 尚宏	1	記2
27	山口	周南市立富田東小	大丸奈緒美		◎
28	山口	周南市立周陽小	増本 森幸		○
29	山口	山陽小野田市立須恵小	間恵 満貴	8	
30	山口	山口市立秋穂小	岡崎 顕真	3	記2
31	山口	柳井市立柳井小	藤村 信之	2	記2
32	山口	上関町立上関小	白石 和美	4	記2
33	山口	周防大島町立浮島小	平尾 寛	12	司2
34	広島	広島市立安西小	森田 賛子	1	記1
35	広島	広島市立落合東小	河合 秀明	2	記1
36	広島	広島市立牛田新町小	福原 剛	3	記1
37	広島	広島市立上安小	坂口由紀子	4	司1
38	広島	広島市立江波小	田村 康雄	4	記1
39	広島	広島市立己斐東小	山形恵美子	5	記2
40	広島	広島市立鈴が峰小	柿木昭一郎	6	記1
41	広島	広島市立中野東小	杉本由美子	6	
42	広島	広島市立祇園小	岡重 郁代	7	

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	広島市立伴南小	沖西 啓子	5	
44	広島	広島市立志屋小	竹下 和伸	8	
45	広島	広島市立亀山小	川口 和郷	6	
46	広島	広島市立竹屋小	宮正 純二	2	
47	広島	広島市立上温品小	井上 隆生	11	司1
48	広島	広島市立日浦小	竹部 志保	12	記1
49	広島	広島市立五日市小	河野 陽子	12	記2
50	広島	広島市立八幡東小	新谷 博章	13	司1
51	広島	広島市立吉島東小	藤田佐智子	13	記1
52	広島	広島市立大州小	藤谷 並樹		◎
53	広島	広島市立宇品東小	藤井 智子		○
54	広島	安芸高田市立向原小	四良丸優子	10	記1
55	広島	江田島市立江田島小	畠藤 邦子	10	司1
56	広島	江田島市立鹿川小	河野 諭恵		★
57	広島	大竹市立玖波小	貞盛 倫子	8	司1
58	広島	廿日市市立四季が丘小	永野 真	9	記2
59	広島	尾道市立御調中央小	半田 裕二	7	記2
60	広島	尾道市立浦崎小	吉原 明美	9	記1
59	広島	呉市立本通小	中塩 曜子	5	司1
62	広島	呉市立昭和北小	高田 哲也	6	司1
63	広島	呉市立安登小	細川 由美	7	司1
64	広島	東広島市立風早小	竹野 政彦	5	記1
65	広島	東広島市立中黒瀬小	田中 宏憲	9	司1
66	広島	東広島市立吉川小	沖 秀治	13	記2
67	広島	三原市立三原小	平松 理恵	1	司1
68	広島	三原市立久井小	山垣内理恵	11	記1
69	広島	三次市立酒河小	新谷 勇	7	記1
70	広島	三次市立みらさか小	古本 宗久	12	司1
71	広島	庄原市立山内小	定宗 由里	11	記2
72	広島	大崎上島町立大崎小	大政 勇司	8	記1
73	広島	北広島町立八重東小	免田久美子	10	記2
74	広島	熊野町立熊野第二小	兼崎 素子	3	司1
75	広島	福山市立伊勢丘小	清水弓記子	1	☆
76	広島	福山市立多治米小	高田美和子	2	司1
77	広島	福山市立中条小	小林 貴子	3	☆
78	広島	福山市立遺芳丘小	延近 良祐	4	※
79	広島	福山市立有磨小	藤井 真爾	13	
80	広島	福山市立明王台小	清水 早苗		●



分科会：⑪〈社会形成能力〉

40名：6グループ

会 場：福山市立大学 小松安弘記念館 ラーニングcommons B

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※

グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	八頭町立郡家西小	西田 彰訓	1	司2
2	鳥取	湯梨浜町立泊小	濱家 功	2	司2
3	岡山	岡山市立吉備小	奥橋 健介	2	※
4	岡山	岡山市立操明小	遠藤 正和	5	
5	岡山	岡山市立彦崎小	安東 伸一		◎
6	岡山	岡山市立高島小	高岡 誠治		○
7	岡山	倉敷市立味野小	小野 明子	3	
8	岡山	新見市立西方小	千種 典子	4	
9	島根	出雲市立長浜小	松井 誠	3	司2
10	島根	雲南市立佐世小	板垣 恵	6	司2
11	島根	松江市立恵曇小	小室由希江	5	司2
12	山口	岩国市立小瀬小	榊原 美代	1	記2
13	山口	周南市立岐山小	阿部くるみ	6	記2
14	山口	美祢市立美東小	渡壁 誠	4	司2
15	山口	山口市立上郷小	佐々木真治	3	記2
16	広島	広島市立舟入小	上田 修	1	記1
17	広島	広島市立元宇品小	上本公次郎	2	記2
18	広島	広島市立南観音小	筒井 順也	3	記1
19	広島	広島市立八木小	山本 知子	4	司1
20	広島	広島市立五日市東小	山領 勲	4	記2
21	広島	広島市立矢野南小	西田 由美	5	記1
22	広島	広島市立三田小	木村 慶哲	6	司1
23	広島	尾道市立山波小	村上 悦久	3	司1
24	広島	呉市立川尻小	石原 修	2	記1
25	広島	廿日市市立阿品台東小	前田 静樹	1	司1
26	広島	東広島市立板城西小	兼島 久美	1	
27	広島	東広島市立造賀小	高槻 尚子	6	記1
28	広島	三原市立糸崎小	三寺 美穂	5	記2
29	広島	三次市立甲奴小	香川 美佳	6	
30	広島	安芸太田町立筒賀小	中藪 優子	2	司1
31	広島	安芸太田町立加計小	竿尾 久恵	4	記1
32	広島	坂町立坂小	松本 孝司	5	司1
33	広島	福山市立綱引小	山上 秀樹	2	
34	広島	福山市立駅家小	吉岡美和子	3	☆
35	広島	福山市立深津小	作田由起子	4	
36	広島	福山市立熊野小	望月 誠治		◎
37	広島	福山市立御野小	川崎真由美		○
38	広島	福山市立大津野小	森 正之		●
39	広島	福山市立津之郷小	大石 充洋		★
40	広島	福山市立常金丸小	山田 裕之		☆



分科会：⑫〈自立と共生〉 ⑬〈社会との連携・協働〉

79名：13グループ

会 場：まなびの館ローズコム 中会議室

グ：グループ番号

記号：分科会司会者○ 提案者◎ 記録者● 運営委員★ 会場担当者☆ 本部役員※

グループ司会者（司会順 司1・司2） グループ記録者（記録順 記1・記2）

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
1	鳥取	鳥取市立散岐小	門脇 智子	1	司2
2	鳥取	鳥取市立城北小	蓮佛 俊敬	4	司2
3	鳥取	鳥取市立明德小	中林 康与	8	司2
4	鳥取	米子市立加茂小	山浦 俊也	5	司2
5	鳥取	米子市立尚徳小	頼田 敬子	12	司2
6	鳥取	八頭町立船岡小	矢部 佳子	10	司2
7	岡山	赤磐市立赤坂小	家森 康彰	3	
8	岡山	井原市立出部小	平木 康晴	8	
9	岡山	岡山市立平福小	古谷 浩子	1	
10	岡山	岡山市立宇野小	坪田 典子	4	
11	岡山	岡山市立古都小	岡 哲也	13	
12	岡山	倉敷市立琴浦西小	大森 輝彦	2	
13	岡山	倉敷市立富田小	元長 重人	7	
14	岡山	津山市立誠道小	高橋 寿美	9	
15	岡山	真庭市立美甘小	森 泰久	11	
16	岡山	美作市立美作第一小	延東 省典	12	
17	岡山	吉備中央町立加賀西小	草野 健	5	
18	岡山	美咲町立旭学園	金島久美子	10	
19	島根	出雲市立遙堪小	勝部 孝	9	司2
20	島根	雲南市立田井小	松本 茂	3	司2
21	島根	大田市立久屋小	山本 孝志	2	司2
22	島根	浜田市立旭小	山藤 真樹	11	司2
23	島根	松江市立忌部小	井上 孝弘	7	司2
24	島根	安来市立広瀬小	樋野 義之	6	司2
25	山口	岩国市立岩国小	大野 元良	4	記2
26	山口	下関市立関西小	藏田 博史	2	記2
27	山口	下関市立川中西小	上重 卓広	7	記2
28	山口	山陽小野田市立厚狭小	長谷川裕司	3	記2
29	山口	防府市立松崎小	川本 尚貴	13	司2
30	山口	美祢市立伊佐小	吉山 礼子	5	記2
31	山口	山口市立佐山小	川本 朋子	6	記2
32	山口	山口市立生雲小	西嶋 智		○
33	山口	山口市立名田島小	福村 貴博		◎
34	広島	広島市立楠那小	脇坂 将城	1	記2
35	広島	広島市立東浄小	西川 由紀	1	司1
36	広島	広島市立大芝小	中尾 希恵	2	記1
37	広島	広島市立大河小	濱田 麻理	3	記1
38	広島	広島市立可部南小	茶園 隆司	4	記1
39	広島	広島市立吉島小	内田 友和	4	
40	広島	広島市立黄金山小	岡田 智子	6	
41	広島	広島市立三篠小	藤原 聡子	10	司1
42	広島	広島市立長東西小	山崎 佳子	5	司1

NO	県名	学 校 名	氏 名	グ	記号
43	広島	広島市立戸坂小	北谷 一水	6	記1
44	広島	広島市立落合小	新田 美穂	7	
45	広島	広島市立矢野西小	黒田 章弘	12	記2
46	広島	広島市立口田東小	佐々木 芳	8	記2
47	広島	広島市立亀山南小	奥村鯉都子	2	
48	広島	広島市立己斐小	瀧口 久子	5	司1
49	広島	広島市立湯来東小	鰐川 裕司	11	記1
50	広島	広島市立五日市南小	藤井 裕子	8	
51	広島	広島市立緑井小	高田 玲子	13	記2
52	広島	広島市立長束小	吉岡奈緒美		◎
53	広島	広島市立梅林小	大庭 智美		○
54	広島	安芸高田市立甲田小	栗栖 智弘	12	司1
55	広島	安芸高田市立吉田小	児玉 聡子		★
56	広島	江田島市立切串小	尾崎 弓枝	11	司1
57	広島	尾道市立高見小	金子 恵子	9	記1
58	広島	呉市立長迫小	田中真奈美	8	記1
59	広島	呉市立横路小	高橋 伸治	9	司1
60	広島	呉市立蒲刈小	藤井 眞實	12	記1
59	広島	庄原市立板橋小	竹田 行男	6	
62	広島	竹原市立荘野小	富本 健司	7	記1
63	広島	廿日市市立金剛寺小	末岡 信子	2	司1
64	広島	廿日市市立大野東小	林 健一郎	10	記2
65	広島	東広島市立河内小	大星 篤志	3	司1
66	広島	東広島市立郷田小	上杉 政景	10	記1
67	広島	東広島市立東西条小	下田健一郎	11	記2
68	広島	府中市立上下南小	高森 嘉代	13	司1
69	広島	三原市立沼北小	柄崎 真毅	8	司1
70	広島	三次市立川西小	片桐 克敏	1	記1
71	広島	三次市立八次小	高下 節雄	13	記1
72	広島	北広島町立八重小	細田 充裕	5	記1
73	広島	北広島町立大朝小	武本 圭子	9	記2
74	広島	坂町立横浜小	尾崎 恵	7	司1
75	広島	福山市立手城小	和田 亘	1	☆
76	広島	福山市立駅家北小	河田 節生	3	☆
77	広島	福山市立瀬戸小	簀戸 浩之	4	司1
78	広島	福山市立野々浜小	東 真由美	6	司1
79	広島	福山市立旭丘小	加藤 聡		●

【各県事務局】

	鳥取	鳥取県小学校長会	寺坂 市子		
	島根	島根県小学校長会	建岡 浩子		
	岡山	岡山県小学校長会	中尾 雅文		
	山口	山口県小学校長会	伊藤 豊		
	広島	広島県連合小学校長会	芳川 雅行		

大会のあしあと



●ねぶと

瀬戸内で獲れる小魚の唐揚げは福山の定番です。特にネブトは味がよくスナック感覚でつまみとして好まれています。正式名称は天竺鯛(てんじくだい)です。

●くわい

福山のくわいは全国一の生産量を誇っています。もともとは沼地に自生していたものを明治ごろに福山城の堀に植えたのが栽培の始まりといわれています。福山くわい出荷組合が出荷するくわいはふくやまブランド農産物として認定されています。



●ピオーネ

瀬戸内の温暖で雨の少ない気候に恵まれて育った美味しいぶどうは、備後圏域の魅力ある特産物となっており、福山のぶどうは広島県内有数の栽培面積を誇っています。



大会のあしあと（過去4大会）

第69回中国地区小学校長会教育研究大会島根大会

（第74回全国連合小学校長会研究協議会島根大会）

※【島根県松江市会場、東京会場に分かれてハイブリッドで研究発表が行われた】

期日 令和4年10月14日

会場 島根県民会館 他

主題 自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進
～ふるさとを学びの原点に 主体的・協働的に学び合い 豊かな未来社会を創る子どもの育成～

内容

a 研究協議

第1分科会 経営ビジョン：創意と活力に満ちた学校経営ビジョンの策定

①質の高い学校経営を展開するための学校経営ビジョンの策定 (静岡)

②教職員と児童とともに創る学校
～児童主体・教職員主体の学校経営に向けて～

(広島)

第2分科会 組織・運営：学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと運営

①感動の涙あふれる学校を目指して～人を育てる・人とつながる～ (兵庫)

②「連携と協働で育む」小中一貫教育を推進する組織づくりと運営を支援する校長の役割 (山口)

第3分科会 評価・改善：学校教育の充実を図るための評価・改善

①学校経営の組織的かつ継続的な改善に向けた学校評価の充実

～校長としての取組と指導性について～ (千葉)

②自分の資質能力を高める、自己評価、他己評価、語り合いの取組

～スタッフ全員がよい人間関係を模索し、自分の力を発揮できる環境の中で～ (島根)

第4分科会 知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

①「主体的・対話的で深い学び」を追求する職員集団の育成

～職員の意識を向上させるための校長の働きかけの工夫～ (岩手)

②一人一人の児童を大切にした幼保小連携による教育課程の編成

～就学前後の切れ目のない実践を通して～ (鳥取)

第5分科会 豊かな人間性：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

①学校全体で取り組む道德教育を目指して

～教職員の意識の共有化と校長の役割～ (和歌山)

②全ての子どもの可能性を伸ばす学校経営の推進

～子ども同士をつなぐ学び合いの授業づくりとチーム担当制の取組を通して～ (広島)

第6分科会 健やかな体：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進

①健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進における校長の役割と指導性 (北海道)

②児童が主体的に課題を追究する体育の授業改善とメディアコントロールを中心とした生活習慣改善のためのカリキュラム・マネジメント (岡山)

第7分科会 研究・研修：学校教育力を向上させる研究・研修の推進

①学校教育目標の実現を目指した学校研究の在り方～グランドデザインの策定における校長の役割～ (神奈川)

②教職員の防災意識の向上を図り、意識をつないでいくための研修の充実を目指して (岡山)

第8分科会 リーダー育成：これからの学校経営を担うリーダーの育成

①社会の変化を捉える能力と、豊かな人間性を身に付けたミドルリーダーの育成

～離島へき地におけるミドルリーダーの育成～

(沖縄)

②主体的に学校経営に参画する人材の育成

～ワークシート「今の自分と将来の自分」の活用と起案を介したOJTの実践を通して～ (島根)

第9分科会 学校安全：命を守る安全教育・防災教育の推進

①経験を繋ぎ実践力を高める防災教育・安全教育の推進と校長の在り方 (北海道)

②地域特性を生かし家庭や地域・関係機関と共に取り組む防災教育 (鳥取)

第10分科会 危機対応：様々な危機への対応と未然防止の体制づくり

①いじめの未然防止や組織的な対応への校長のリーダーシップの在り方 (岐阜)

②「学校と子どもを取り巻く危機への対応」

～子どもの生命・安全を守る適切な対応と体制づくり～ (山口)

第11分科会 社会形成能力：社会形成能力を育む教育活動の推進

①他者と協力・協働しながら 自ら社会を形成する子どもの育成

～カリキュラム・マネジメントによる教育活動の推進と校長の役割～ (岩手)

②「地域と共に進めるキャリア教育の在り方」と「校



長の役割」

～社会形成能力を育むために～ (山口)

第12分科会 自立と共生：自立と共生の実現に向けた
教育活動の推進

①特別支援教育における校長の役割

～リーダーシップと連携の要～ (愛媛)

②自己有用感を高め、多様な他者と協働する資質・
能力を育む教育活動の推進

～ふるさと玉野を学びの原点に！～ (岡山)

第13分科会 社会との連携・協働：家庭や地域等との
連携・協働と学校段階等間の接続・連携
の推進

①五ヶ瀬教育GVを核にした社会に開かれた学校づ
くりの展開

～家庭・地域との協働を図るためのヒト・モノ・
コト・システムの活用を中心にして～ (宮崎)

②東広島市における特色ある学校等間の接続・連携
の取組 (広島)

b 鼎談

「豊かな未来社会を創る子どもたちへ

～ふるさと 原点 創造～」

シンポジスト

加納美術館名誉館長 加納佳世子 先生

小泉八雲記念館館長 小泉 凡 先生

海士町役場人づくり特命担当 豊田 庄吾 先生

第70回中国地区小学校長会教育研究大会鳥取大会

期日 令和5年12月1日

会場 米子コンベンションセンター 他

主題 自ら未来を拓き ともに生きる社会を創る 日
本人の育成を目指す小学校教育の推進

～高い志を持ち 多様な他者と協働しながら
新たな価値を創造する子どもを育てる 学校
経営の推進～

内容

a 研究協議

第1分科会 経営ビジョン：創意と活力に満ちた学校
経営ビジョンの策定

①今日的な教育課題の解決に向けた学校づくり

～チームで子どもの育成の充実を目指して～

(岡山)

第2分科会 組織・運営：学校経営ビジョンの実現を
図る組織づくりと運営

①同僚性の構築を核とする学校経営 (鳥取)

第3分科会 評価・改善：学校教育の充実を図るため
の評価・改善

①学校の教育力の向上を図るための評価・改善

～組織的な評価・改善と教職員評価の在り方につ
いて～ (山口)

②学校経営ビジョンの具現化のための学校評価と人

事評価をツールとした組織マネジメントの改善

(鳥取)

第4分科会 知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュ
ラム・マネジメント

①授業を核とする【協働】

～Well-being～

(広島)

②一人一人の児童を大切にしたい幼保小連携による教
育課程の編成

～就学前教育の育ちを大切に、小学校への円滑
な接続を図る取組～ (鳥取)

第5分科会 豊かな人間性：豊かな人間性を育むカリ
キュラム・マネジメント

①子ども達の豊かな人間性の向上と校長の役割

～地域の特色を生かした取組～

(鳥取)

第6分科会 健やかな体：健やかな体を育むカリキュ
ラム・マネジメント

①健全な生活に向けたメディアコントロール力を育
成するための校長の役割 (鳥根)

第7分科会 研究・研修：学校の教育力を向上させる
研究・研修の推進

①学校の教育力向上を図る研究・研修の推進

～「核となる価値」を生かした研修で「チーム学校」
を強化する～ (山口)

②教師の資質・能力の向上を図る研究・研修にする
ための校長の役割

～一人一人のWell-beingをもとに～

(鳥取)

第8分科会 リーダー育成：これからの学校を担うリー
ダーの育成

①学校のよさを高めるリーダーの育成

～特色ある教育活動の継承と活性化を進めるにあ
たって～ (広島)

②学校組織力の向上をめざすリーダー育成

～校長のリーダーシップとマネジメント～ (鳥取)

第9分科会 学校安全：命を守る防災教育・安全教育
の推進

①生涯にわたって生きてはたらく力となる防災教育・
安全教育とするために (岡山)

②地域特性を生かし家庭や地域・関係機関とともに
取り組む防災教育 (鳥取)

第10分科会 危機対応：学校と子どもを取り巻く危機
への対応

①教職員一人一人の「察知する力」を高めるために
～対話を通して当事者意識を育むシステムづくり・
場づくり～ (広島)

②様々な危機への対応と未然防止の体制づくり

～協働による人材育成がすべて～

(鳥取)

第11分科会 社会形成能力：社会形成能力を育む教育
の推進

①「今後の社会を積極的に形成することができる力」
をめざして



～自分事として考え、他者と協働して地域社会への参加～
(岡山)

②小規模校における社会形成能力を育成するための取組

～小中一貫校の特性を生かして～
(鳥取)

第12分科会 自立と共生：自立と共生の実現に向けた教育の推進

①地域共生社会の実現に向けた教育を推進するための校長の役割

～学校統合と向き合いながら～
(鳥根)

第13分科会 社会との連携・協働：家庭・地域等との連携・協働と、異校種間の接続・連携の推進

①学校と地域等の連携と校長の役割

～「学校・地域戦略会議」の取り組みを通して～
(鳥取)

b 記念講演

「甲子園名将に学ぶ人材育成」

NHK 高校野球解説者

皆生タクシー株式会社代表取締役社長

杉本 真吾 先生

第71回中国地区小学校長会教育研究大会山口大会

期日 令和6年11月8日

会場 KDDI 維新ホール 他

主題 自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進
～高い志をもって 他者と協働し 新たな価値を生み出す子どもを育てる開かれた学校経営の展開～

内容

a 研究協議

第1分科会 経営ビジョン：先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知

①先見的で創意あふれる経営ビジョンの策定と周知
～学校・家庭・地域が連携・協働して進める経営ビジョンづくり～
(山口)

第2分科会 組織・運営：学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある組織づくりと運営

①学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある組織づくりと運営
～小規模校の組織づくりと地域や教職員への動機付けの工夫～
(山口)

第3分科会 評価・改善：学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善

①学校運営協議会の学校評価への効果的な関わりを促し、学校経営の評価・改善の質の向上を目指す
(鳥根)

②学校の教育力向上を図る学校経営の評価・改善
(鳥取)

第4分科会 知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

①新たなことにチャレンジし、たくましく生きていく子どもの育成

～他者とのつながりや非認知能力の評価を意識しながら～
(岡山)

②知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント
～ Mine の特色を生かした個別最適な学びと協働的な学びの一体的な推進～
(山口)

第5分科会 豊かな人間性：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント

①「自立・貢献」の心を育む「小中一貫・地域連携カリキュラム」とそのマネジメントにおける校長の役割
(山口)

第6分科会 健やかな体：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

①健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント
～児童の体力向上に向けた取組における校長の役割～
(山口)

第7分科会 研究・研修：学校の教育力向上を図る研究・研修の推進

①小中一貫教育の充実に向けた研究・研修の推進
(岡山)

②チーム雲南として共通課題の改善に向けた研修の推進

～研修の充実に向けて、行政、異校種との連携を図るための校長の役割について～
(鳥根)

第8分科会 リーダー育成：これからの学校を担うリーダーの育成

①キャリアステージに合わせた人材育成
～「T字型人材育成モデル」の活用を通して～
(広島)

②これからの学校を担うリーダーの育成
～キャリアステージに応じた段階的なリーダー育成の取組～
(山口)

第9分科会 学校安全：地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進

①自分で考え、判断し、安全に行動できる力を育てる防災教育・安全教育

～学校教育・地域連携で取組む防災教育の推進に向けた校長の役割～
(広島)

②地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進
～学校・家庭・地域が連携し、子どもが主体的に取り組む防災教育・安全教育の推進～
(山口)

第10分科会 危機対応：学校と子どもを取り巻く危機への対応

①ベクトルの最大化に向けて
(鳥取)

②学校と子どもを取り巻く危機への対応
～支部全体のヒヤリ・ハット事例を活用した教職員の危機意識の向上～
(山口)



第11分科会 社会形成能力：社会形成能力を育む教育の推進

①社会に貢献する資質・能力・態度を育む教育の創造
～子どもがつながる、学校がつながる、地域とつながる取組を通して～ (広島)

②社会形成能力を育む教育の推進
～地域の資源を活用しながら、地域連携担当教員等が核となって推進するカリキュラム・マネジメントの充実～ (山口)

第12分科会 自立と共生：自立し、共に生きる力を育む教育の推進

①高梁市校長会で取り組む特別支援教育の推進
～特別支援教育コーディネーターの育成を中心に～ (岡山)

第13分科会 社会との連携・協働：家庭・地域社会との連携・協働と学校間連携の推進

①家庭・地域社会等との連携・協働と学校間連携の推進
～人づくりと地域づくりの好循環を目指す連携・協働の在り方～ (山口)

b 記念講演

「教育現場に元気を与えるトーク術
～スポーツ現場で使われるベクトークとは～」
日本ベクトーク普及協会 代表理事
岩崎 由純 先生

第72回中国地区小学校長会教育研究大会岡山大会

期日 令和7年11月21日

会場 倉敷市民会館 他

主題 自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進
～夢や知を育み 持続可能な社会の創造者となる
子どもの育成に向けた学校経営の推進～

内容

a 研究協議

第1分科会 経営ビジョン：創意と活力に満ちた学校経営ビジョンの策定

①魅力ある学校経営ビジョンの策定
～学校と家庭、地域が協働した創意あるビジョンづくり～ (岡山)

第2分科会 学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営

①学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営
～職員の参画意識を高める学校運営の工夫～ (島根)

第3分科会 評価・改善：学校教育の充実を図るための評価・改善

①学校改善への意識と組織力を高める学校評価と教職員評価の充実
～小中一貫教育校における取組から～ (山口)

②変化し続ける社会に対応した教育活動の充実

～社会の変化・要請に沿った学校評価の改善と学校運営協議会の活性化を目指して～ (岡山)

第4分科会 知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

①夢の実現に向けて主体的に行動する児童の育成
～中学校区での学校間連携と自校での取組を通して～ (広島)

②課題を自分で見つけ、協働して解決していく児童の育成
～主体的に学習に取り組むための校長の役割～ (岡山)

第5分科会 豊かな人間性：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

①豊かな人間性の育成に向けた地域学習の充実
～学校運営協議会・地域学校協働本部との連携・協働の推進～ (岡山)

第6分科会 健やかな体：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進

①共通指標を根拠とした健やかな体を持つ児童の育成 (鳥取)

第7分科会 研究・研修：学校の教育力を向上させる研究・研修の推進

①「オール世羅」でつなぐ幼保・小・中・高連携の取組 (広島)

②学校力・教師力向上をねらった研究・研修
～架け橋プログラムを軸に展開するための校長の役割～ (岡山)

第8分科会 リーダー育成：これからの学校を担うリーダーの育成

①学校の枠を越えた次世代の学校リーダー育成 (鳥取)

②これからの学校を担うリーダーの育成
～職員が成長するシステムのあり方～ (岡山)

第9分科会 学校安全：命を守る安全教育・防災教育の推進

①「自分の命は自分で守る」力の育成
～自分の笑顔、家族の笑顔、地域の笑顔を守る～ (広島)

②「自分たちの命を守る」防災意識の向上と安全・防災教育の推進
～児童・教職員・中学校区とともに～ (岡山)

第10分科会 危機対応：様々な危機への対応と未然防止の体制づくり

①学校危機をいかに防ぐか
～教職員の危機意識の向上と安全管理体制の在り～ (山口)

②自他の安全について自ら考え、進んで行動できる態度や能力を育てる安全教育
～セーフティプロモーションスクール認証の取組



を通して～ (岡山)

第11分科会 社会形成能力：社会形成能力を育む教育の推進

①持続可能な「ライフキャリア教育」としていくために

～校長会・校長の役割を再考する～ (島根)

②社会形成能力育む地域資源を生かした取組の推進と校長の役割 (山口)

第12分科会 自立と共生の実現に向けた教育活動の推進

①インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の推進 (岡山)

第13分科会 社会との連携・協働：家庭や地域等との連携・協働と学校間連携の推進

①学校・家庭・地域社会の有機的なつながりによる自立する子どもの育成をめざして

～地域の力を生かした学校運営と教育活動～

(岡山)

b 記念講演

「小学校と手をつなぐ～大原芸術財団の場合～」

公益財団法人大原芸術財団 代表理事

大原 あかね 先生



●リーデンローズ

中四国最大級のコンサートホールである大ホールは優れた音響性能を有しており、クラシックコンサートはもちろん、全国大会、式典等に利用されています。3層のバルコニーから成る2003席のゆったりとした「ばら色」の椅子が囲んでいます。



●ローズコム

学習活動の支援、文化活動等の振興及び市民交流を図り、生涯学習を推進するための施設です。中央図書館等との複合施設です。



●ふくやま文学館

福山市を中心として、近接市町村をも含めた、ゆかりの文学者の顕彰、諸資料の収集・研究を行っています。福山城の北西に位置し、城を借景にした瓦ぶきの建物は、展示の中心作家、井伏鱒二の郷里加茂地方の民家をイメージして造られました。



●福山人権平和資料館

人権・平和資料を展示し、人権の確立と恒久平和の実現が、私たちの生活にとって最も基本となる大切なことであるということを学び合うための資料館として、1994年8月30日に開館しました。



●広島県立歴史博物館

福山城公園内のふくやま文化ゾーンに位置しています。芦田川の中州で見つかった中世の町の遺跡として全国的に有名な草戸千軒遺跡を中心に、瀬戸内地域の歴史と文化に視点を当てた博物館です。

第73回中国地区小学校長会教育研究大会広島大会
第62回広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会

大会要項

発行 広島県連合小学校長会
〒732-0052 広島市東区光町一丁目11番5号地産ビル1003号
TEL：082-263-6381 FAX：082-262-3822

編集 広島大会実行委員会

印刷所 株式会社タクトプリントメディア

第73回 中国地区小学校長会研究大会
広島大会

第62回 広島県連合小学校長教育研究大会
福山大会

大会要項

